
代わりにガンダールヴ!? ~ 使い魔は最強!! ~

天孤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

代わりにガンダールヴ！？！使い魔は最強！！！

【Nコード】

N0009P

【作者名】

天孤

【あらすじ】

オッスー！！！！ オラ、はが……、んんつ、と、まあ改めまして俺、鋼乃はがねのじゅんや 純耶！！！！ しょっぱなからボケをかました俺は、車に轢かれそうになった女の子を助け死んじまった。しかし、死んだと思ったのに俺は何故か白い空間にいた。神様！？ 転生！？ そんなバカな！？ そんな純耶に神は能力を授け、純耶が死ぬ前持っていた小説『ゼロの使い魔』へと飛ばした。そんな純耶がハルケギニアで最初に目にしたものは——……桃色？。

ときどき挿絵を追加するときがあります。なのでこまめに見ると

新たな発見があると思います。お楽しみください!!

第0話 まさかの転生！？

挿絵あり（前書き）

いやゝ、始まりました。

ゼロの使い魔

初めて書くので、どうなるか分からないので

覚悟していてください！！

では、どうぞー！ー！ー！

いまは放課後。純耶は、部活に入っていない。いや、入ってはいませんが毎日続く、
特に変わることの無い刺激の無い練習に飽き、入部半年で退部、
そしていまは帰宅部として絶賛活動中である。

「そうだ!! 確か今日は新しく新刊が出る日だったし、本屋に
よろう!!」

そう言っただけで純耶はカバンに教科書をつっ込み、
帰り道に本屋をいれた純耶は、本屋へと足を急がせた……。

教室を出て、学校を出た純耶は、カバンから財布を出し中身を確
かめたのだが……、

「げっ!? まじか!? 今回は買えるけど結構金欠じゃねーか…
来月は我慢するしかないかあ……はあ。」

肩を沈めながら純耶は足を本屋へと向け歩き出した……。
そして、本屋へとついたら純耶は、いつも置いてある小説コーナー
へと向かった。

そして目的である本を見つけた純耶はそれを手に取った。

「おっ!! あった、あった。やつぱ『ゼロの使い魔』はいいよ
なあ。」

そう純耶の目的の本は、連載の続いている『ゼロの使い魔』。
魔法少女ルイズが人間の使　い魔を召喚し、あらゆる困難を乗り
越えていく物語である。

ときにファンタジー、ときにバトル、ときには恋愛、そんな刺激
のある物語に、
日常的に刺激の少なかった純耶は惹かれていき、見事にハマッて
しまったのである。

「よし、本も買ったし、さっさと家に帰って読むとするかー!」

本の支払いも終わった純耶は、財布をカバンにしまい、
本の入った袋を手にはぐらさげ、家へとつながる道を歩き出した…
…。

「今回の物語はなにかなあ。前は確かサイトとティファニアが、
ネステフから逃げ出したとこだったけ？」

そんな事を考えていると、前方にある光景が見えた。

それは小学生ぐらいの女の子がボールを追いかけていたが、
ボールが道路へと入ってしまった。しかし、それは通行量の多い
道路。

女の子はボールを追いかけて道路へと飛び出すところだった。
しかも、不運な事にちょうど飛び出すところにトラックが走って
きてしまった。

「!? くそっ!! 間に合え!!!」

それを見た瞬間、純耶は肩にかけていたカバンを放り出し、女の子目指して走り出した。

「(まにあってくれ!!!!!!)」

そして力を振り絞り何とか間に合った純耶は自分の命をかえりみず、

女の子を歩道へと突き飛ばして――…、

「（……こんな現象は普通ありえないだろ。それに俺は死んだはず。」

そして、そこから導かれる答え。やっぱりこれは……）」

『いや、流石に答えを見つけるとは、すばらしい！！ まあ、ちよつと違っけどね』

「っ！？」

俺が声のする方を向くと、そこには金髪のイケメン野郎がいた。
…モゲロ。

『おつと、そんな警戒しないでくれよ！！悲しいじゃないか（笑）ｗｗｗ』

「ぜんぜん、悲しそうには見えませんが？　なぜ答えが間違えてると？　それに貴方は？」

『そんなことないさ。それに、そんなにがつつかなくても教えるよ。』

まあ、簡単に言えば僕の正体は、しょせん神みたいなものさ！
『！-！』

神ですね。わかります。

「それで？　ここは何処なんです」

『そうだね。簡単に言うと、ここは限りなく存在するセカイ、そういうものが集まる“セカイの原点”かな？』

「“セカイの原点”？」

はてさて、意味がわからんな。

『そう、さっきも言ったとおりここにはいろんな“セカイ”が存在するんだ。

たとえば平行世界や異世界。あ、そうだね、あとは死ぬ前に持っていた本とかね。』

「（！？　まさか……）」

『そうさ、そのまさか……！！！！　【ゼロの使い魔】だっけ、あれだけじゃない。

この“セカイの原点”には、ゲームや漫画、君たち人間が作った空想世界が、

現実として世界を作っている。そして今回、君をここに呼んだには、ある理由がある。』

「理由？」

『実はあの時君は死ぬ存在ではなかったんだ……。』

いや、本来は誰も死ぬ運命ではなかった。どの道、君が女の子を助けなかったとしても、

あの子は助かる運命だったんだ。つまりは君は結構無駄な事をしたんだよね。

まあ、あの女の子を助けようとする君の勇氣には、百点満点を付けたいくらいだよ（笑）』

「――orz……何てこった。……ていうか、わ・ら・う・な！
！！！！！」

『いや、バカにしているわけじゃないさ。そして本題だが、君には転生をしてもらいたい。』

あ、別にタダってわけじゃないよ。能力とかもつけるさ。』

「は？」

『いや、だから転生だよ。これにも理由があるんだけど、
実は君が予定にない死を迎えたことによって、“セカイ”に歪

みが生まれてしまった。

それを直すために、君に転生してもらおうのさ！……うれし
いだろ！……！」

「マジですか！？ 本気と書いて、マジですか！……？」

『マジマジ。ちなみに転生先は【ゼロの使い魔】だから。』

「あざっす！……！……！」

『じゃあ、決まったことだし能力5つくらい決めちゃってほしい』

「あ、はい、じゃあ1つ目に神器だろうと宝具だろうと、
どんな武器にでも変わる指輪を二つください。」

『ふんふん、それで？』

「2つ目は、漫画・ゲーム・二次創作の技を使えるようにして下
さい。」

3つ目はそれを扱うための知識」

『いいよ、いいよ』

「4つ目は身体能力など全ての限界をなくしてください」

『それで最後は？』

「5つ目は僕の物事に対する理解力を極限まであげた“超理解力”にまで上げてください」

『OK!!! オマケとして身体能力と魔力の基本スペックを一般人の10倍あげるよ。』

よし、全部君に授けようじゃないか。ついでに君の容姿をハンサムに変えておこう』

そして、神が俺に手をかざし何か呟くと、神の手の平から光が溢れ出し、

俺の胸に沈んでいった。その瞬間、俺の体が輝き、光が収まるとそこにいたのは、

黒目黒髪、身長174cmぐらいのハンサムな日本人風の男だった。

『はい、鏡』

「（うわっ、何だこのハンサム。って俺！？）」

『前と違って、いい顔をしてるだろう、身長も大きくしたし（笑）』

「なんかひどい言われようだけど、ありがとうございます……！」

『そんなあゝ、お礼とかいいよ。こっちの都合で転生してもらうわけだしね。』

では、準備も整ったわけだし、そろそろ来るよ。』

「へ？来るって？」

その時、目の前に高さ2mほど。幅は1m位の楕円形をしていて、厚みの無い光り輝く鏡のようなものが現れたのである……。

「……これって……」

『そう、僕が無理やり繋げた《サモン・サーヴァント》だよ。さあ、しまっってしまう前に、早く行きなさい』

「あ、はい。…あのゝ、いろいろありがとうございました。行っ
てきます……！」

『どういたしまして。あー！そっだ、名前は変えてもいいし変えなくてもいいよ』

「まあ、唯一親との繋がりでし、変えない事にします」

『そうか。じゃあ、あちらでも頑張りなさい。君の旅立ちに祝福を』

「ではいきます。」

そして、純耶は“セカイの原点”から消えた……。

『さあ、君の運命は、どう動いていくか……楽しみにしているよ、純耶くん』

続く

第0話 まさかの転生！？ 挿絵あり（後書き）

いや、プロローグでこんなに書くとは思いませんでした。

けっこう、いい感じにかけたと思います。

感想よろしく！！！！！！

あ、あと誤字とかあったら教えてください

次回『第1話 使い魔召喚！？』

お楽しみに！！

第1話 使い魔召喚！？（前書き）

今回は使い魔召喚の場面です！

結構いい感じです！！

では、どうぞ

第1話 使い魔召喚!?

- - - - - s i d e ルイズ・フラン
ソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール（後にルイズ）

ルイズは焦っていた……。

何故か私は魔法が使えない。何故か全て爆発してしまうのだ……。
お母様もお父様も私に高名なメイジを教師として連れてきたけど、
結果はやはり爆発。

それでも、両親は最初いろいろ試してくれたが、爆発、爆発、爆
発……。

そんな私に両親もとうとうお手上げ。なすべが無かった。
周りの召使いも私を憐れみの眼で見ってくる…。

トリスティン魔法学校でも、最初は公爵家である私に取り入って
もらおうとして、
近づいてきた貴族たちがいたが、私が魔法を出来ないと知ると、
全員離れていった……。

それに自分の隣の部屋には、なんとツェルプストー家のキュルケ
がいたのだ。

犬猿の仲であるルイズとしては、なんともムカつく事である……。

そんな今日はルイズが二年生に進級するための『春の使い魔召喚』の日なのである。

ルイズはこの『春の使い魔召喚』で偉大な使い魔を召喚し、周りの皆を見返すのだ、と心の中で思っていたのだが――…

「ゼロのルイズ、何回ミスをしてんだ!!」

「そうだ!! 早く召喚しろよ、じゃないと帰れないじゃないか」

「ゼロのルイズ!!」

「うるさいわねっ!! 集中できないでしょっ!!」

「（落ちこぼれじゃ無いって事を、見せ付けてやるんだからっ!!）」

ボカアーーーーーッ!!

そしてルイズは今日28回目の爆発を起こした……。

周りの生徒は爆風に巻き込まれ、転んだり、召喚した使い魔が逃げたりしていた。

そんなルイズの爆発に、とうとう堪忍袋が切れた、回りの生徒も爆発した。

「なにやってんだよ!!!!」

「いい加減しろ!!」

「うつさい!! 分かってるわよ!!!!」

「(き~~~~!!) なんて成功しないのよ!! こうなったら……」

ルイズは、一回深呼吸し、心を静めた……。

そして右手にある杖に、自分の気持ち、自分の持っている精神力を込めた……。

そんな今までと何処か違うルイズの雰囲気、

自然と周りに生徒たちも静まり、その場に緊張感が広まった……。

我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

五つの力を司るペンタゴン。私の運命に従いし——……

そこでルイズは胸の前に掲げた杖に力を振り絞り、その杖を地面へと振り下ろした。

「使い魔を召喚せよ！……！」

振り下ろした瞬間、いままでとは規模の違う爆発を起こした……。爆発で地面の砂埃で使い魔召喚の鏡が見えなかったが、ルイズは今までとは違ってこたえを感じていた……。

「おいおい、また失敗か！？」

「でも、今までとは何か違うぞ……！」

「どうせ失敗だろ」

「おい！！！！ あれを見る！！！！！！」

「「「「「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」」」」

砂埃がなくなってきたそこには、確かに高さ2mほど。
幅は1m位の楕円形をしていて、厚みの無い光り輝く鏡のような
ものが現れていた……。

「ゼロのルイズが成功させたぞ！？」

「いや、まだ何が出るか分からないだろ！」

「！？ おい、なんか出てくるぞ！」

ルイズはやつと成功させた召喚に呆然としていたが、何か出てく
るところが見えたので、

ルイズは目を細め、何が出てくるかを見つめていた…。

「（おねがい！！ 皆を見返せるような使い魔が出てきて！！！！）

」

ルイズが一生懸命お願いしていると、とうとう召喚の鏡から、
待望の使い魔が出てきた……。

「は？」

召喚の鏡から出てきたのは、ドラゴンやフクロウなどの動物では
なかった。

そこから出てきたのは男性だった。その男はハルケギニアでは見
られない黒目黒髪。

顔は結構整っており、身長も自分よりはだいぶ高かった。

高身長で全体を見ると結構なハンサムである。

そのためか何人かの少女達は見惚れて、少年達からは、嫉妬の目
で見られていた。

しかし、ルイズは自分の使い魔と思ったら、平民が出てきたので
ある……。

どうしたら良いもんか分からなかった。なので、とりあえずルイ
ズはその男に聞いてみた。

「あんた誰？」

[illegible]

俺は鏡をくぐった後、ずっと歩いていた…。

俺はたぶんこれがそうだろうと思ってくぐって見たのだが、出たと思ったら砂埃で何も見えなかった……。

そしてある程度砂埃が収まってくると、周りにたくさん人がいた。まあ、春の使い魔召喚だか何だかあるから、その生徒だろうと思った。

今の地球との環境の違いが見られた…。

そんな事を考えてくると、突然声が聞こえた。
いや、今まで周りの奴らががやがやうるさかったが、俺を特定に話しかけられたのは、初めてだった……。まあ、予想はついていたのだが……。

声をしたほうを見ると、黒いマントの下に、白いブラウス、グレイのプリーツスカートを着た、

桃色がかったブロンドの髪と透き通るような白い肌にくりくりと鶯色の目をした、

小柄な女の子がいた。まあ、これがルイズだろう……。

「ここでは、自分の名を名乗る前に、人に名前を尋ねるのか？」

「あんた平民でしょ？ まあ、いいわ！！ 私の名前はルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ……」

やっぱりルイズだった。つか、名前長すぎ……。

「じゃあ俺の名前も名乗らせてもらおう。俺の名は、鋼乃純耶。まあこちらではジュンヤ・ハガネノだな……」

「ジーンヤ・ハガナノ？ 変な名前ね」

なんで伸びんだよ。ジーンヤっておかしいだろ。しかもハガナノって……。

某魔砲少女の語尾みたいじゃねえか。。。なの、みたいな。

「ジュンヤ・ハガネノだ。名前が変なのは、俺が東方のほうの生まれだからな」

「東方って、ロバ・アル・カリイエってこと？」

「まあ、そんなもんだ」

「ていうか、なんで平民が召喚されるのよ！！！！」

いや……いきなり、怒られても…。

とそんな感じでルイズとしゃべっていると、一人の頭の眩しい男性が近寄ってきた……。

「そろそろよろしいかな、ミス・ヴァリエール」

「あ、はい」

「（これがあのコルベールか……見事にハゲだな）」

そんなしょうもないことを考えていると、いきなりルイズが怒鳴りだした。

「ミスタ・コルベール!!」

「なになな? ミス・ヴァリエール」

「もう一回召喚することは出来ないんですか!」

しかしコルベールは首を振った。

「それはだめだ。ミス・ヴァリエール」

「どうしてですか!」

「決まりだからだよ。二年生に進級する際、君達は『使い魔』を召喚する。

今、やっているとおりだ。それによって現れた『使い魔』で、今後の属性を固定し、

それによって専門課程へ進む。一度呼び出した『使い魔』は変更することはできない。

何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。どのみち、彼を使い魔へにするしかない」

「でも平民を使い魔にするなんて、聞いたことがあります！」

ルイズがそう言ったところで、周りがどっと笑った。

ルイズは、その人垣をにらみ付けるが、笑いは止まらない。

まあ、しゃあない、ちよつと黙らすか……。

俺は息を吸うと、それを一気に――

「喝っ！！！！！！！！！！」

.....

純耶がそう言うのと、大気が震えた。

「！！！！！」

「少し黙ってる…」

周りが静くなったので、スツキリした。
なぜこんなことができるかというと、それは神によって身体能力
が上がっており、

俺の肺活量が上がったためである。

俺はまだ啞然しているルイズのほうに向きなおり、話を進ませた。
ルイズはまだ驚きながらも、コルベールと話し始めた……。

「いやあ、まさか、彼が黙らすとは思わなかったよ。」

「それでどうにかならないんですか！」

「まあ、これは伝統なんだ。ミス・ヴァリエール。例外は認められ
ない。

それに彼は……」

そう言いながら、コルベールはこちらを見て、俺に指を指し、

「見た感じ彼はただの平民には見えない。呼び出された以上、
君の『使い魔』にならなければならない。今まで、人を使い魔
にした例は無いが、

春の使い魔召喚の儀式のルールはあらゆるルールに優先する」

「そんな……。 (ぼそ) まあ、顔は悪くは無いけど……」

ルイズが小さく悪くないと言ったが、
身体能力が上がった俺にははつきり聞こえてしまった……。

「さて、では、儀式を続けなさい」

「うえ？ か、彼とですか？ / / / /」

おつ？ サイトとは、違う反応だな……。 以外に好印象だし、いい傾向だろう。

知らんけどな。 まあ、みた感じでは、悪い印象は持たれていないだろう。

「そうだ。 次の授業が始まってしまふ。 君は召喚にどれだけ時間をかけたか

思っているのかね。 何回も失敗して、 やっと呼び出せたんだ。
早く契約するんだ。」

そうだそうだ、と野次が飛ぶが、俺がひと睨みすると、 静まった……。

そしてルイズは近くに寄ってきて俺の顔を見ると、 ちよっと頬を染めながら……、

「あんた、感謝しなさいよね／＼。き、貴族にこんな事されるなんて、

普通は一生ないんだからね／＼」

（ズッキューーン！！…ツンデレ乙！！）

「ああ、儀式が何か何だか知らないが、俺もルイズみたいな娘と
だったらうれしい（ニコッ）」

俺的には、ニコポが備わってたらうれしいな。

「／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／
（プイッ）」

「ははは、すまん。それで、何をするんだ？」

「ちょっとしゃがんで／＼／＼」

「わかった」

そして俺がルイズの目線にあわせると、ルイズは目をつむった。

そして手に持った、小さな杖を純耶の目の前で振った。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

呪文を唱えたルイズは、すっと、杖を純耶の額においた。そして、ゆっくりと唇を近づけてくる。

俺はそれを拒まず、目をつぶり、そして唇が重ねられた。ついでに俺は舌も入れといた。

ルイズは驚いていたが、ボーとしていた。たぶん、雰囲気になれやすいのであろう。

そして唇が離れると、ちょっとのあいだルイズはボーとしていたが、

ハッと気が付くと俺のほうを向きモジモジしていた……。

「もう／＼／＼なにすんのよ／＼／＼別にそっちのキスじゃないわよ」

「いや、ルイズが可愛らしくてね、つい、ね」

「も、もう／＼／＼今回だからね！／＼／＼（モジモジ）」

「ゴホンッ！！そろそろいいかな？」

ちっ！！ハゲめ。邪魔すんじゃないよ、この野郎。

「あ、終わりました」

「『サモン・サーヴァント』は何回も失敗したが、
『コントラクト・サーヴァント』はきちんとできたね」

コルベールは嬉しそうに言ってきた。そのあと周りが何か言いそうだったので、

また睨んでやった。まったく、しつこい奴らだ……。
と、思っているといきなり体が妙に熱くなった。

「！？……ぐっ……うぁ……」

別にサイトほど騒ぐ事はなかったが、予想以上に痛かった…。

「すぐ終わるわ。『使い魔のルーン』を刻んでるだけだから。
…大丈夫？」

「ああ、心配ない。予想より痛がったが、耐えれないほどではな

い……」

しかし、熱いのは一瞬のことで、体はすぐに平静を取り戻した。そこにコルベールが近づいてきて、俺の左手の甲を確かめた。そこには、

ミミズが並んだような文字？ が刻んであった。

「ふむ……珍しいルーンだな」

コルベールはそう言って、左手の甲のルーンをスケッチし始めた。そしてコルベールはきびすを返すと、宙に浮いた。

ほう…これが『フライ』か？ それとも『レビテーション』？

まあ、どちらかだろう

他の生徒も、一斉に宙に浮いた。

浮かんた連中は、学園らしき建物のほうにむかって飛んでいった。

「ルイズ、お前はその使い魔と一緒に歩いてこいよ」

「さすがに、使い魔は飛べないだろ、残念だったな」

「ゼロのルイズのあんたにお似合いよ」

口々にそう言って笑いながら飛び去っていく。残されたのは、俺とルイズだけだった。

そうしていると行き成りルイズが俺に話しかけてきた。

「……笑いなさいよ。どうせ貴方も私のこと馬鹿にしてるんでしょ」

俺はそんなルイズの後ろに回り抱き上げた。いわゆるお姫様抱っこである。

「きゃあ! ? な、なにすんのよ / / / /」

「俺は君のことは知らないが、君が努力している事は目を見れば分かる。」

それに俺は使い魔なんだ。ルイズと俺、二人で頑張っていけばいいさ」

そう言うところルイズは、頬をちよっぴり赤く染め、俯き、

「（キュンッ） / / / / ……うん、ありがとう」

それを聞いた俺は、先に学園に向かった連中を追い抜くため、地面を蹴った。

すると、1回蹴っただけで、20mは跳んだ。これは来る前神にもらった初期の身体能力で、

これから鍛錬すればさらに身体能力は上がっていくのである。

「きゃっ!?!」

「少し急ごう。ルイズ、舌を噛むなよ!!」

それから俺達二人は、悠々と先に言った連中を追い抜き、ルイズは最初に教室につき、

俺は先に部屋に戻った。俺はその後いろんなことがあった疲れから寝てしまった。

そういえば、追い抜いたときの連中の驚いた顔が傑作で笑ってしまった…（笑）。

続く

第1話 使い魔召喚！？（後書き）

結構長くなったと思います。

今のところいい感じに仕上がっているので嬉しいです♪

誤字など教えてください。あと感想などもあつたら、よろしく願
いします

次回『第2話 能力確認！？』

お楽しみに！！

第2話 能力確認！？

- - - - - side 純耶

「異世界ですって？」

授業が終わり、俺はいまルイズの部屋にいる。

そして、寝る前に今後の話とかをすることにした。

何故かという、今までには無い人間の『使い魔』。

その扱い方を話し合うことにしたのだ。それに今後のために俺はルイズに、

俺が本当は何処からきたかを伝えることにした。

「ああ、俺は使い魔召喚の時ロバ・アル・カリイエから来たと言ったが、あれは嘘だ」

「じゃあ、異世界ってのは何処にあるのよ！」

「それはわからない。が、俺の世界には月が二つも無いし、魔法

は存在しない」

「はあ！？ 魔法が存在しないですって！？」

「ああ、しかし魔法のかわりに科学というものが発展している」

「カガク？何それ？」

「電気で動かしたりする機械などを使っている」

「ふーん、それで異世界から来たっていう証拠は無いの？」

「残念ながら、無いな。俺は死んだからな。証拠を持ってこれなかった」

「はあ！？死んだってどういうことよ！」

俺はルイズに俺が死んだ馴れ初めを話すことにした…。
女の子を助けたこと。それにより死んでしまったこと。
何故か神によって助けられたこと。

そしてルイズの使い魔召喚の鏡が俺の目の前に現れたこと。
そして召喚されたこと……。

「信じられないわね。」

「そう簡単に信じられるとは思ってないさ。時間をかければいい」

「まあ、この問題はとりあえずはいいわ。問題は使い魔の仕事についてよ」

そう言つとルイズは使い魔のことについて話し始めた。

「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」

「何も見えんな。まあ、勝手に人の視界を使われても困るしな」

「はあ、まあそうね。それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。」

例えば秘薬とかね」

「秘薬の特長とかがわかれば、ある程度は見つけられるだろう」

「まあ、貴方の身体能力があれば、何処でもいけそうね」

ルイズは俺の体をじろじろ見ながら言った。

「何でそんな体で、あんな跳べるのかしら。あなた、人間？」

「正真正銘、人間だ……たぶん」

「まあ、いいわ。そして、これが一番なんだけど……、
使い魔は、主人を守る存在であるのよ！その能力で、主人を敵
から守るのが一番の役目！」

まあ、貴方なら大丈夫でしょ、ドラゴンとかはともかく……」

ドラゴンでも倒そうとすれば倒せると思うがな……。

「まあ、ある程度の敵は倒せる」

「まあ、敵なんか学院にいればそうそう現れないわ。
だから、学院にいる時は、別の仕事をやらせてあげる。洗濯。
掃除。その他雑用」

えー。メンドクセー。でも、そんな事言えません。

「少し面倒だが、やらせてもらおう」

「さてと、喋ったら、眠くなっちゃったわ」

「そういえば、俺はどこで寝ればいいんだ？」

「まあ、私も普通の使い魔が現れるとは思ってなかったし。
何も準備できてないから、き、今日は特別にベットで寝ることを許してあげるわ。」

／
「べ、べつにカッコイイからとか思っていないんだからね！／／／」

「ありがとうな、ルイズ。そうさせてもらっよ。でも本当にいいのか？」

「今回だけだからね／／／」

それから、ルイズが服を着替えることにしたので、
俺は一度部屋の外に出ることにした。ルイズはあんまり気にしてなかったが……。

「もう入ってきてもいいわよ」

「ああ」

「そこに脱いだ服をおいといたわ。明日洗濯しといて。場所はメ
イドに聞いたらしいわ」

「ああ、わかつた」

「じゃあ、そろそろ寝ましょ」

「そうだな、もう夜も遅い。早く寝るとしよう」

それから、俺とルイズは一緒のベットに入り、一夜を過ごした。ちなみに俺はまだ疲れが残っていたのか、すぐに寝てしまった……。

[illegible]

次の日、純耶が目覚めて初めて目にしたものは、ルイズの可愛らしい寝顔だった。

こうしてみると、あまり歳が離れてないのに、幾分幼く見えた。一晩寝たら自分の部屋でした、なんて事が無くて純耶はホッとした。

純耶は自分の使い魔生活が始まると思うと、この世界が楽しみでならなかった。

とりあえず純耶はルイズが寝ている間に顔を洗うためのぬるま湯と、

クローゼットをあさり着替えの準備をした。準備を終えたので、純耶は未だに寝ているルイズを起こすことにした。

「ルイズ、朝だぞ。起きたほうがいい」

純耶がルイズの体をゆさゆさ揺らしていると、ルイズは寝ぼけた感じで返事を返してきた。

「はえ？あ、ありがとう……。つてあんた誰よ！」

「鋼乃 純耶」

「ああ、そういえば召喚したんだっけ」

「おはよう、ルイズ。とりあえずぬるま湯を準備しといた。顔を洗うといい」

「ああ、おはよう。貴方、結構気が利くのね」

「使い魔だからな。それと俺のことは純耶と呼んでくれ。いつまでも貴方だと困る」

「わかったわ、ジュンヤ」

そう言うルイズは顔を洗い、準備していた服を俺に渡してきた。

「どうした、ルイズ」

「ジュンヤは知らないだろうけど、貴族は下僕がいる時は自分で服なんて着ないのよ、

まあ、下僕じゃなくて使い魔だけど」

「そうか、じゃあ仕方ないな」

それにしても本物のキュルケは凄いな。ボンッ、キュ、ボンッじゃないか。

ルイズも小動物みたいで可愛いらしいが……。

彼女はルイズを見ると、にやっと笑った。

「おはよう。ルイズ」

ルイズは顔をしかめると、嫌そうに挨拶を返した。

「おはよう。キュルケ」

「貴方の使い魔って、その男性？　結構、美形じゃない」

「そうよ」

ルイズは俺が誉められてちょっと得意げな感じで返した。

「私も昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って、一発で呪文成功よ」

「ふん、それで」

「どうせ使い魔にするなら、こついつのがいいわよねえ。フレ
イム！」

そうキュルケが、勝ち誇った声で使い魔を呼んだ。するとキュル
ケの部屋から、
真っ赤で巨大なトカゲが現れた。口の端からは火が溢れ出して
いた。

「これってサラマンダー？ あんた『火』属性だもんね」

「ええ。微熱のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱。
でも、男の子はそれでイチコロ。貴方とは違ってねえ？」

キュルケは得意げに胸を張った。ルイズも負けじと胸を張ったが、
悲しいことに、

ボリウムが違いすぎた。ルイズは負けず嫌いのようで、キュル
ケをぐっと睨みつけた。

俺はその時、サラマンダーを見つめており、ぼそりと呟いた。

「火竜山脈の火トカゲ（サラマンダー）か。質が高いな」

「へえ、貴方フレイムが火竜山脈の火トカゲってわかったの？」

「まあな（本当は原作読んだから、分かったんだけど……）」

小さく呟いたのだが、キュルケには聞こえたようだ。
すると、キュルケは俺を興味深く思ったのか、名前を尋ねてきた。

「貴方、名前はなんていうの？」

「鋼乃純耶だ。この辺ではジュンヤ・ハガネノかな」

「ジュンヤ・ハガネノ？ 変な名前ね」

「まあ、この辺ではあまり聞き慣れないだろう」

「私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。」

「キュルケって呼んでね」

「ああ、分かったキュルケ」

「それより、ジュンヤ、こんなちんちくりんより私のとこにこな

い？」

キュルケはそう言いながら俺の腕にその大きな胸を押し付けてきた。

「ツエルプストー！ 誰の使い魔に手を出してんのよ！」

「あらゝ。人の恋路邪魔するっていつの？」

「あんた他にも恋人いるじゃない！ そっちはどうするのよ！」

「いやねえゝ。遊びじゃないの。まあ、いいわ。

朝食に遅れちゃうから私は行くわ。じゃあまたね、ジュンヤ」

「ああ、またな。あと、君のところにはいけないぞ」

「いいわよ。私の美貌で振り向かせてあげるから」

そう言つてキュルケは炎のような赤髪をかきあげ、颯爽と去つていった。

ちよこちよこと大柄な体に似合わない動きで、サラマンダーが後を追つていった。

キウルケがいなくなると、ルイズは拳を握り締めた。

「くやしー！ なんなのあの女！ 火竜山脈のサラマンダー召喚したからって！」

「まあ、いいじゃないか。気にすることは無い。それに俺は結構強いぞ。」

「はあゝ。もういいわ。朝食に遅れちゃうし、早く食堂に行きましよう」

「ああ、そのことなんだが、ちょっとしたいことがあってな。一人で食堂に行つといてくれないか」

「じゃあ、朝食はどうすんのよ」

「それは大丈夫だ。じゃあ行ってくる」

「使い魔も教室に行かないと駄目だから、ちゃんと戻ってきなさいよー」

「了解だ」

アルヴィーズの食堂つてのも見てみたかったが、俺は一度、能力の確認をしたかった。
何故かというと、ギーシュとの決闘があるため、大怪我でもしたら大変な事になる。
なので確認をしたかった。俺は学院の外にある森に行くことにした。

森につくとまず俺は能力を使い結界を張った。何故かというと学院院长が、
遠見をしている可能性があるのだ。そんなことになったら、俺の秘密がばれてしまう。

一応、学院を出るときも気配を消し、姿を見れないようにしてか

ら森に来た。

まず俺はどのくらい身体能力がどれくらい上がったか試してみることにした。

とりあえず跳躍力を測るため、俺は足に力をため――…地面を蹴った。

「うお!？」

すると垂直に約30mは跳んだ。

前のときは前に20mは跳んだのでこのぐらいかな、と納得した。

次は腕力を測るため木に向かって腕を突き出してみた。

――ボヒュッ!!!!

明らかに腕を突き出した音とは思えない音を出し、拳は木に向かっていった。

木に腕が当たった瞬間、木が折れるのではなく、腕が木を突き抜けてしまった。

まさか、折れるのではなく、突き抜けてしまったので俺は啞然としてしまった。

多分、鋭すぎたのであろう……驚きだ。

次に俺は指に付けておいた指輪を武器に変えてみる事にした。

「モード：刀」

すると右手につけていた指輪が輝きだし、光が収まると、俺の右手には刀が握られていた。

試しに近くに生えていた木を切ってみると、すぱっと切れてしまった。

そんなに抵抗も無く豆腐を切っているみたいだった。その後、銃や槍、

弓などいろんな武器に変えて試していった。ちなみに戦車に変えようとしたけど、

流石に無理だった。とりあえずこの刀を帯剣することにした。しかし抜き身なので、

左手の指輪を鞘に変えて、左腰にさしておいた。

次に俺は漫画やゲームに出てくる技を試そうとした。

しかし『ネギま』や『ゼロ魔』の魔法の類は発動したが、

『ナルト』や『BLEACH』などのチャクラ、霊力を使うものは発動しなかった。

魔法の類もすぐに魔力切れを起こした。それを疑問に思っている
と、空から紙が二枚、

ひらひらと落ちてきた。俺はそれを拾うと、日本語で文章が書いてあったので読んでみた。

『ハロ〜！ちゃんと無事に召喚されたみたいだね。今日は君にお

知らせがある。

実は僕の上に上級神や最上級神がいるんだけどその人たちに君を転生させたのが、

見つかってね。あ！別に転生をさせたのが悪いんじゃないんだけど。

《能力が強力すぎだ》って怒られちゃってね。勝手に能力を弱めさせてもらったよ。

何を弱めたかと言うと、まず魔力。ラインまで下げさせてもらったよ。

修行すれば増えていくからね。ほかの霊力やチャクラ気なども修行すれば増えていくよ。』

一枚目がここで終わっていたので、二枚目を見てみる。

『後は“超理解力”！！これは極限まで上げていてたけど、

それじゃあ君の精神が耐えられるか分からないからね。

人より物覚えがいくらいまで下げてみた。まあ、天才程度の理解力だと思ってくれていい。

でも、死にかけると一時的に戻るから。あ、あと指輪だけど神器は、

一日に一回しか使えないようにしたから。二個あるから実質二回だね。

他は変わってないよ。じゃあ、がんばってね！！

神

より』

……まあ、それでも十分チートだね。

にしても、まさか神の世界でも上下社会があったとは……神も大

変だな。

「というか、なんで結界は張れたんだ？ あれぐらいだと、いけるのか……」。

俺はその後少しだけ刀の修行をしてから、時間がきたのでルイズがいるであろう教室へと急いだ……。

[illegible]

ド・オスマン

ワシの名はオールド・オスマン。このトリステイン魔法学院の学
院長をしておる。

実は、つるべーり……じゃなくて、コルベール君が言っておったのじゃが、

今年の春の使い魔召喚のとき、ミス・ヴァリエールが平民を召喚したらしい。

コルベール君は、少し魔力を感じたとか言っていたがのう。

ワシは少しその召喚された平民の子が気になったので、

『遠見の鏡』でその平民の子を覗いておったのじゃ…。

召喚された子は次の日、普通に働いておったので何も問題ないとおもった…。

しかし、その子がミス・ヴァリエールと分かれた後、なぜかその子が、

突然消えてしまったのじゃ…。普通、魔法でもこんな突然消えることは不可能…。

あの子はいったい何者じゃ…？

「ふう〜。先が思い知れるわい……」

「？　どうかしましたか、オールド・オスマン」

「いや何も問題ありませんよ、ミス・ロングビル。」

「？　そうですか」

「（なにも起こらなければいいがのう……………」

とりあえずワシは引き続きその子を監視することにした……。

続く

第2話 能力確認！？（後書き）

なかなかいい感じに書けました

誤字、感想ありましたら、よろしくお願いします！

次回『第3話 『ゼロ』の理由！？』

楽しみに！！

第3話 『ゼロ』の理由！？

- - - - - s i d e 純耶

魔法学院の教室は、大学の講義室みたいだった。
いや、大学なんて行った事無いし……しかも、こっちの教室は石
で出来ているしな。

俺が教室に入ると、何人かの生徒が俺を見てきたがあまり興味が
なさそうだった。

たぶん平民に興味が無いのだろう。何人かの生徒がちょっと畏怖
の目で見てきた。

先ほど別れたキュルケもいたが、周りを男子が取り囲んでいた。
やはり、キュルケは男子に人気があるようだ…。

俺に気が付いたキュルケが流し目をしてきたが、
そこは適当に返して、俺はすでに教室にいたルイズの元へ歩いて
いった。

「なにしてたのよ」

「ちよっと、修行してたんだ」

「修行？」

「ああ、俺は剣士だからな、いや侍かな？（武器なんかほとんど握ったこと無いけど…）」

「サムライ？ まあ、どっちでもいいわ」

俺は、ルイズとの会話を終え教室を見回してみた……。すると、教室にはいろんな使い魔たちがいた。

キュルケのサラマンダーは、椅子の下で眠りこんでいる。肩にフクロウを乗せている生徒もいた。

窓からは巨大なヘビがこちらを覗いていた。

男子の一人が、口笛を吹くと、そのヘビは頭を隠していた。カラスや猫などもいた。

でも、一番目を引いたのは、バシリスクやバグベア、スキュアなどの架空の生き物達だった。

「（目ん玉が浮かんでるのは流石にキモいな……）」

そういえば、普通に椅子に座っているがいいんだろうか。サイトは確か床だったはずだが……。

まあ、この辺は印象の違いだろうと、自己完結させた。

すると扉が開いて、先生が入ってきた。

中年の女の人で、紫のローブに身を包み、帽子をかぶっている。

ふくよかな頬が、

やさしい雰囲気を漂わせている。たぶん、あの人がシュヴルーズだろう。

彼女は教室を見回すと、満足そうに微笑んで言った。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシュヴルーズ、

こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなんですよ」

ルイズは俯いた。

「おやおや。変わった使い魔を召喚したものですな。ミス・ヴァリエール」

シュヴルーズが、純耶を見てとぼけた声で言うと、教室中がどつと笑いに包まれた。

「（この先生、悪い人ではないんだろうが。天然ってのは、以外に辛口だな……）」

「ゼロのルイズ！召喚できないからって、その辺歩いていた平民連れてくるなよ」

ルイズは立ち上がり、長い、ブロンドの髪を揺らし、可愛らしく澄んだ声で怒鳴った。

「ちがうわ！きちんと召喚したもの！それに彼は強いわよ！」

「嘘つくな！『サモン・サーヴァント』ができなかったんだろ
う？」

ゲラゲラと教室中の生徒が笑う。

「ミセス・シュヴルーズ！侮辱されました！かぜっぴきのマリコルヌが私を侮辱したわ！」

「（何だよかぜっぴきって……。それじゃあ、ただ単に体が弱いだけじゃねーか！）」

「かぜっぴきだと？僕は風上のマリコルヌだ！風邪なんか引いてないぞ！」

「（風上って何だよ…。見た目、ただのデブじゃん！ 言わないけど……）」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪引いてるみたいなのよ！」

マリコルヌと呼ばれた男子生徒は立ち上がり、ルイズを睨みつける。

シュヴルーズ先生が手にもった小ぶりの杖を振った。

すると、立ち上がった二人は糸の切れた操り人形のように、すっと席に落ちた。

「ミス・ヴァリエール。ミスタ・マリコルヌ。みっともない口論はおやめなさい」

「（いや、あんたのせいだからね！？ 口論始まったの、あんたのせいだから！）」

ルイズはしょんぼりとうなだれている。

さっきまで見せていた生意気な態度が吹っ飛んでいた。

「お友達をゼロだのかぜっぴきだの呼んではいけません。わかりましたか？」

「ミセス・シュヴルーズ。僕のかぜっぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実です」

くすくす笑いが漏れる。

俺は少しマリコルヌが面倒になってきたので、少し黙らすことにした……。

俺は一瞬でマリコルヌの背後に回りこみ、刀を抜いた。

「そろそろ、黙ろうか……（ニコッ）」

俺はマリコルヌの首筋に刀の腹で叩いた。

というか、この言い方だと某魔砲少女みたいだな……。

「ひい！？や、やめろ……やめてくれ！」

「授業が進まねんだよ、黙ってる……わかったか？」

「あ、ああわかったから、早く、それをどけてくれ！」

「ちなみに言っとくが、今度俺の主人にゼロとか言ってみろ……（ぼそ）殺すぞ」

「ひいひい！？」

俺はそれだけ言うと、床を蹴ってルイズの横まで跳んで戻った。
まあ、あそまで脅したんだ。これからゼロとかほざく事は無いだ
ろ……。

俺が席まで戻ってくると、ルイズが小さな声で話しかけてきた。

「別にあそこまでしなくても……」

「なぐに、主人が中傷されてたんだ。使い魔の俺が黙っておけな
いだろう？」

「なっ！？ そ、そこまで言うならいいわ／＼／＼／＼（私のため
に……／＼／＼）」

ルイズの言葉に俺が返した後、ルイズは頼すこし赤らめ俯いてし
まった。

「……どうしたんだ？」

「おほんっ！ すこし、いろいろありましたが、授業をはじめま
すよー！」

シュヴルーズがほんと重々しく咳をすると、杖を振った。
机の上に、石ころがいくつか現れた。

「私の二つ名は『赤土』。赤土のシュヴルーズです。

『土』系統の魔法を、これから一年間、皆さんに講義します。
魔法の四大系統はご存知ですね？ ミスタ・マリコルヌ」

「は、はい。ミセス・シュヴルーズ。『火』『水』『土』『風』
の四つです！」

シュヴルーズは頷いた。

「今は失われた系統魔法である『虚無』を合わせて、
全部で五つの系統があることは、皆さんも知つてのとおりです。
その五つの系統の中で『土』はもっとも重要なポジションを占
めていると、

私は考えます。それは、私が『土』系統だから、というわけで
はありませんよ」

「（ぜったい自分の自慢だろ！ 俺は全部重要だと思つがな。てか
『虚無』横にいるし…）」

俺は隣をチラッと見てみた。

するとルイズがこっちに気付いて、ルイズを見ている俺を不思議

に思ったのか、

コテンと頭を可愛らしく傾けてから、前に向き直った。

……なに……この生物。超可愛いんですけど……。

するとシュヴルーズは再び、重々しく咳をした。

「『土』系統の魔法は、万物の組成を司る、重要な魔法です。

この魔法がなければ、重要な金属を作り出すことも、加工することもできません。

大きな岩を切りだし建物を建てることもできなければ、農作物の収穫も、

今より手間取るでしょう。このように、『土』系統の魔法は、皆さんの生活に密接に関係しているのです」

やはり魔法は便利なもんだと、純耶は思ったが、こんなものがある所為で、

6000年経った今でも発展がないんだよなあ、とも思ってしまった。

「（いろいろ複雑だよなあ……）」

「今から皆さんには『土』系統の魔法の基本である、『錬金』の魔法をもらいます。

一年生のときにできるようになった人もいるでしょうが、基本が大事ですので、

もう一度おさらいする事のします」

シュヴルーズは石ころに向かって、手にもった杖を振り上げ、そしてルーンを短く呟くと、石ころが光りだした。光がおさまり、ただの石ころだったそれはピカピカ光る金属に変わっていた。

「ゴゴ、ゴールドですか？ ミセス・シュヴルーズ！」

キュルケは身を乗り出し質問した。

「いえ、違います。ただの真鍮です。ゴールドを錬金できるのは、『スクウエア』クラスのメイジだけです。わたしはただの……」

こほんと、もったいぶった咳をして、シュヴルーズは言った。

「『トライアングル』クラスですから……」

「（うわぁ、すげえ自慢してんじゃん！ ほら、みんなかなり顔が引き攣ってるよ！）」

「では、だれにやってもらいましょうか……」

シュヴルーズは教室を見回した。
すると俺の隣にいるルイズと目が合ってしまった。

「では、ミス・ヴァリエール。あなたにやってもらいましょう」

「え？ わたし？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてもらんなさい」

ルイズは立ち上がらない。困ったようにもじもじするだけだ。

「（かぁー！ どうしたもんか。ここは応援するところだろうか……）」

「どうしたんだ？ 行かないのか？」

結局、俺は何も知らない事にしてルイズに訊ねてみた。

「ミス・ヴァリエール！ どうしたのですか？」

「先生」

「なんです？」

「やめておいたほうがいいと思いますけど……」

「どうしてですか？」

「危険です」

キウルケは、きっぱりと言った。教室のほとんど全員が頷いた。そんな俺も頷きそうになったが……。

「危険？ どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いてます。さあ、ミス・ヴァリエール。」

気にしないでやってごらんさい。失敗を恐れていては、何もできませんよ？」

「ルイズ。やめて」

キュルケが蒼白な顔で言った。

というかあのキュルケにあそこまで言わせるとは……ルイズ……恐ろしい子！

しかし、ルイズはその言葉に炎がついてしまったのであろう、立ち上がった。

「やります」

そして、緊張した顔で、つかつかと教室の前へと歩いていった。隣に立ったシュヴルーズはにっこりとルイズに笑いかけた。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

こくりと可愛らしく頷き、ルイズは手に持った杖を振り上げた。ルイズが呪文を唱えだすと、教室にいた生徒達は椅子の下に隠れはじめた。

俺も椅子の下に隠れようと思ったが、なんとなく使い魔として、隠れちゃまずいかなと思い、椅子に座っとくことにした。そしてルイズは短くルーンを唱え杖を振り下ろした。

その瞬間、机ごと石ころは爆発した。

爆風をモロに受け、ルイズとシュヴルーズは黒板に叩きつけられた。
た。

そんな俺も隠れなかったため、爆風をモロに受けてしまった。

爆発に驚いた使い魔たちは炎を吐いたり、窓を突き破ったり、他の使い魔を飲み込む使い魔もいた。

正直凄い光景である。キュルケは立ち上がり、ルイズを指差した。

「だから言ったのよ！ あいつにやらせるなって！」

「もう！ ヴァリエールは退学してくれよ！」

「ぎゃあー！ ラッキーがヘビに食われた！ラッキーが！」

いろいろ罵倒されているが、流石の俺もこれは庇えなかった……。シュヴルーズは気絶しているようだが、煤で真っ黒になったルイズが立ち上がった。

ブラウスは破け、華奢な肩が覗いている。見るも無残な格好だった。
た。

しかし、さすがである。

大騒ぎの教室を、意に介した風もなく……。

顔についた煤を、ハンカチで拭きながら、淡々とした声で言った。

「ちよつと失敗みたいね」

当然、他の生徒たちから猛然と反撃を食らう。

というかあの爆発をちよつとで済ますあいつの頭の中を覗いてみたい。

よくこんな被害を何回も出しながら退学にならないな……。

まあ、ルイズが公爵家だからだろうが……。

「ちよつとじゃないだろ！ ゼロのルイズ！」

「いつだつて成功の確率、ゼロじゃないの！」

まあ、虚無だからな（笑）

コモンマジックくらいなら成功するはずだが……。

まあそれとなく教えてもいいだろう。

そんな事を考えながら、俺の意識は暗闇に落ちていったのであった。

続く

第3話 『ゼロ』の理由！？（後書き）

今回は長くなったので二回に分けました。

次回『第4話 ギーシュとの決闘！？前編』

お楽しみに！！

第4話 ギーシュとの決闘！？前編

-----sideジャン・コル
ベール（その後コルベール）

ミスタ・コルベールはトリステイン魔法学院に奉職して二十年、中堅の教師である。
彼の二つ名は『炎蛇のコルベール』。『火』系統の魔法を得意としたメイジである。

彼は、先日行われた『春の使い魔召喚』の際に、ルイズが呼び出した平民の青年のことが
気になって仕方なかった。正確には、彼の左手に現れたルーンのことが気になって仕方なかった。

いや、彼から感じる魔力も気になるが……。
彼のルーンは珍しいものだった。それで、先日の夜から図書館にこもりつきりで、
書物を調べているのであった。

トリスティン魔法学院の図書館は、食堂の本塔の中にある。本棚は驚くにほど大きい。

おおよそ三十メートルほどの高さの本棚が、壁際に並んでいる姿は実に壮観だ。

彼がいるのは、図書館の一区画にある、教師のみが閲覧できる『フエニアのライブラリー』の中である。

生徒たちも閲覧できる一般の本棚には、彼の求める回答が見つからなかった。

『レピテーション』を使い、手の届かない書棚まで浮かび、彼は一心不乱に本を探っていた。そして、その努力は報われ、彼は一冊の本の記述に目をとどめた。

それは始祖ブリミルが使用したという使い魔たちが記述した古書であった。

その中に記された一節に彼は目を奪われた。その部分を読みふけるうちに、

彼の目が見開いた。古書の一節と、純耶の左手に現れたルーンのスケッチを見比べる。

彼は、あつ、と声にならないうめきをあげて、

一瞬、『レピテーション』のための集中が途切れ床に落ちそうになった。

彼は本を抱えると、慌てて床に下りて走り出す。

彼が向かったの先は、学院長室であった。

side オスマン

白い口ひげと髪を揺らし、テーブルに肘をついて、退屈をもてあましていた。

中から水キセルを取り出し、吸おうとしたが、部屋の端に座って書き物をしている

すると水キセルが宙を飛び、ロングビルの手元までやってきた。

「オールド・オスマン。あなたの健康を管理するのも、わたくしの

仕事なのですわ」

オスマンは椅子から立ち上がると、ロングビルに近づいた。椅子に座ったロングビルの後ろに立つと、重々しく目をつむった。

「こう平和な日々が続くとな、時間の過ごし方というものが、何より重要な問題になってくるのじゃよ」

オスマンの顔に刻まれた皺が、彼の過ごしてきた歴史を物語っている。

彼は、百歳とも、三百歳とも、言われている。

「オールド・オスマン」

「なんじゃ？ミス……」

「暇だからといって、わたくしのお尻を撫でるのはやめてください」

オスマンは口を半開きすると、よちよち歩き出した。

「都合が悪くなると、ボケた振りするのもやめてください」

オスマンはため息をついた。

「真実はどこにあるんじゃないだろうか？考えたことはあるかね？ミス・
・・」

「少なくとも、わたくしのスカートの中にはありませんので、
机の下にネズミを忍ばせるのはやめてください」

オスマンは、顔を伏せ、悲しそうな顔で、呟いた。

「モートソグニル」

すると、ロングビルの机の下からネズミが現れた。オスマンの足を
上り、

肩のちょこんと乗っかって、首をかしげた。ナッツを取り出し、ネ
ズミの顔の先で振った。

「気を許せる友達はお前だけじゃ。モートソグニル」

ネズミはそれを齧りだした。かじり終わると、ちゅうちゅう鳴きだ
した。

「そうかそうか、もっと欲しいか。くれてやろう。だが、その前に報告じゃ。」

ほう、ほう。そうか、白か。純白か。しかし、ミス・ロングビルは黒に限る。

そうは思わんかね、モートソグニル」

「オールド・オスマン。今度やったら王室に報告します」

「カーツ！王室が怖くて魔法学院学院長が務まるカーツ！
下着を覗かれたぐらいでカッパしなさんな！そんな風だから、婚期を逃すのじゃ。」

はあ~~~~~、若返るの~~~~~、ミス……」

オスマンはロングビルのお尻を堂々と撫で回し始めた。
ロングビルは立ち上がり、無言で上司を蹴りまわした。

「ごめん。やめて。痛い。もうしない。ほんとに」

オスマンは頭を抱えうずくまるが、ロングビルは、荒い息で、オスマンを蹴りつづけた。

「あだっ！年寄りを。きみ。そんな風に。こら！あいだっ！」

そんな平和な時間は、突然破られた。
ガタン！とドアが勢いよく開けられ、中にコルベールが飛び込んできた。

「オールド・オスマン！」

「なんじゃね？」

ロングビルは何事も無かったように椅子に座り、オスマンは腕を後ろに組み重々しく
コルベールを迎え入れた。目にも止まらぬ早業であった。

「たた、大変です！」

「大変な事など、あるものか。すべては小事じゃ」

「ここ、これを見てください！」

コルベールは、オスマンに先ほどの書物を手渡した。

「これは『始祖ブリミルの使い魔たち』ではないか。

まーたこのような古臭い文献など漁りおつて。

そんな暇があるのなら、たるんだ貴族から学費を徴収する
うまい手をもっと考えるんじゃないや。 ミスタ・ツルベール」

「コルベールです！それは新手のイジメですか！というか何処見てるんです！」

「まあまあ。冗談ではないか、ツルリーナ君。それでこの書物がど
うかしたのかね？」

「コルベールです！もう原型が残ってないじゃないですか！
とにかく、これを見てください！」

コルベールが純耶の手に現れたルーンのスケッチを渡すと、それを
見た瞬間、
オスマンの表情が変わった。目が光って、厳しい色になった。

「ミス・ロングビル。席を外しなさい」

ロングビルが席を立ち、部屋を出て行くのを確認したオスマンは口
を開いた。

その後、昼までの授業は全て中止になったので、生徒達は別々に別れていった。

ルイズは服を着替え、そのまま休んどくらしい。

なので俺は昼まで森でガンダールヴの能力を試した後、それを使わずに刀で素振りをしたり、筋トレをしたりして時間をつぶした。

昼になったので俺とルイズは、昼食を取るため食堂にいった。

初めて見てみたが、結構広くて長机が三つ並んでいた。たぶん学年別なんだろう。

しかし、ここで食べるのも落ち着かないし、すこしシエスタに会ってみたいので、

厨房のほうに行くことにした。しかも今日ギーシュと決闘だしね・・・。

「ルイズ。俺ここで食べるのもなんだし、厨房のほうで食べさせてもらっわ」

「そう？まあ、純耶が言うならいいけど・・・」

「じゃっ！行ってくるわ！」

「ちゃんと帰ってきなさいよ」

ルイズと別れた俺は厨房へと急いだ。
俺は厨房に付くとシエスタを探してみた。
中を見回していると俺と同じ黒髪の女の子がいた。

「すみません」

「はい、どうかしましたか？」

俺が呼んでみるとシエスタ？はこちらの方へとコトコと可愛らしく
向かってきた。

近くで見えてみるとシエスタ？の可愛らしさがハッキリとした。

（キュルケほどじゃないけど、シエスタ？も結構、巨乳だな・・・
・）

「私の顔に何かついてます？」

「いや、可愛い子だと思ってね」

「／／／それは、ありがとうございます・・・／／／／」

そろそろ、いいか。お腹も減ってきたし……。

「すまないが、何か食べるものは無いかな？」

「あゝ。その前に貴方は？」

「ああ、すまない。俺は使い魔の鋼乃純耶だ。ジュンヤと呼んでくれ」

「ジュンヤさんですね。あなたがミス・ヴァリエールの使い魔っていう……。」

俺の左手にあるルーンに気付いたようだ……。それにしても、もう噂になっているとは。

「君は？」

「私はシエスタっています。それでなぜジュンヤさんはこちらへ？」

「ああ。ルイズと食堂に行ったが俺には合わなくてね」

「貴族の方々にお出しする料理のあまりもので作ったシチューです。よかったら食べてください」

「ありがとうございます。食べさせてもらっよ」

スプーンで一口すすって口に運ぶ。昨日から食べてなかったので、凄くおいしかった。

まあ、食べれなかったのは俺が断ったからだけど……………。

「うん。すごくおいしいよ」

「よかった。お代わりもありますから。ごゆっくり」

俺は味わいながらシチューを食べた。シエスタは、ニコニコしながらそんな純耶の様子を見つめている。

なんてええ子や……………シエスタはん……………。
思わず関西弁になるほどいい子だった。

「ご飯、貰えなかったんですか？」

「いや、ちょっとしたいことがあってね。食べる暇がなかったんだ」

「そうなんですか。ミス・ヴァリエールはどんな方ですか？」

「ああ。別に悪い子じゃないさ。ちょっとムキになりやすいけどね」

「へえ、そうなんですか」

俺は空になった皿をシエスタに返した。

「おいしかったよ。ありがとう」

「よかった。またお腹が空いたら、いつでも来てくださいね。
私たちが食べているものでよかったら、お出しますから」

「ああ、そうしてもらおう。それより俺に何か出来ることがあったら言ってくれ。手伝おう」

「なら、デザートを運ぶのを手伝ってくださいな」

シエスタは微笑んで言ってきた。

「誰が恋人なんだ？ギーシュ！」

ギーシュはすつと唇の前に指を立てた。

「つきあう？僕にそのような特定の女性はいないのだ。
薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

自分を薔薇に例えてる時点で、俺は救いよつの無い気障だと思った。
見てるこつちが恥ずかしいほどのナルシストだ。こんな奴を俺は見
たことが無い。

黙っていればいい男だと思うんだが……残念だ。

その時、ギーシュのポケットから何か落ちた。ガラスでできた小壘
で、

中に紫色の液体が入っていた。

これを拾わないと物語は進まないの、俺は拾うことにした。

「おい、ポケットから壘が落ちたぞ」

しかし、ギーシュは振り向かない。まあ、しょうがない。

俺はシエスタにトレイを持ってもらい、しゃがみこんで小壘を拾った

「落し物だぞ、色男」

それをテーブルの上に置いた。ギーシュは苦々しげに、俺を見つめると、

その小壘を押しやった。その代わり俺はにこやかだったが……。

「これは僕のじゃない。君は何を言っているんだね」

その小壘の出所に気付いたギーシュの友人たちが、大声で騒ぎ始めた。

「おお？その香水は、もしか、モンモランシーの香水じゃないのか？」

「そうだ！その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分のためだけに調合している香水だぞ！」

「そいつが、ギーシュ、お前のポケットから落ちてきたってことは、つまり君は今、モンモランシーとつきあっている。そうだな？」

（そんなこと大声で言わんでもいいだろうに……わざとらしいし）

「違う。いいかい？彼女の名誉のために言っておくが……」

ギーシュが何か言いかけたとき、後ろにテーブルに座っていた茶色のマントの少女が

立ち上がり、ギーシュの席に向かって、歩いてきた。

可愛らしい女の子で、着ているマントの色からすると、一年生だろう。

「ギーシュさま……。やはり、ミス・モンモランシーと……」

「彼らは誤解しているんだ。ケティ。いいかい、
僕の心の中に住んでいるのは、君だけ……」

しかし、ケティはギーシュの頬を思いつきりひっぱたいた。

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠ですわ！さようなら！」

ギーシュは頬をさすった、すると遠くの席から一人の見事な巻き髪
の女の子が
立ち上がった。あれがモンモランシーか、すごいドリルだな……。

彼女はいかめしい顔つきで、かつかつとギーシュの席までやってき

た。

「モンモランシー。誤解だ。彼女とはただいっしょに、
ラ・ロシエールの森へ遠乗りをしただけで……」

ギーシュは、首を振りながら言ったが、
彼の冷静な態度とは裏腹に、冷や汗が一滴、額を伝っていた。

「やっぱり、あの一年生に、手を出していたのね？」

「お願いだよ。『香水』のモンモランシー。咲き誇る薔薇のような
顔を、

そのような怒りでゆがませないでくれよ。僕まで悲しくなるじゃないか！」

（誰の所為で、モンモランシーが怒ってんだよ……）

モンモランシーは、テーブルに置いてあったワインの壺をつかむと、
中身をどぼどぼとギーシュの頭の上からかけた。そして……。

「うそつき！」と怒鳴って去っていった。

沈黙が流れた。

ギーシュはハンカチで顔を拭くと首を振りながら芝居がかった仕草で言った。

「あのレディたちは、薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

(・・・・・・バカだ)

俺はそう思いながらシエスタからトレイを受け取った。
そして歩き出そうとすると、ギーシュに呼び止められた。

「待ちたまえ」

「なになに？」

ギーシュは椅子の上で体を回転させ、すさっ！と足を組んだ。
・・・・・・ちょっと、めんどくさいな

「君が軽率に、香水の壺なんか拾い上げたおかげで、
二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

俺は呆れた声で返した。

「二股かけていたお前が悪い」

するとギーシュの友人たちが、どつと笑った。

「そのとおりだギーシュ！お前が悪い！」

ギーシュの顔に、赤みが差した。

「いいかい？給仕君。僕は君が香水の壺を置いたとき、知らないフリをしたじゃないか。

話を合わせるぐらいの機転があってもよいだろう？」

「どのみち、二股などいつしかバレるに決まっている。それに、俺は給仕ではない」

「ふん……。ああ、君は……………」

ギーシュは、バカにしたように鼻を鳴らした。

「確か、あのゼロのルイズが呼び出した、平民だったな。

平民に貴族の機転を期待した僕が間違っていた。行きたまえ」

俺はサイトと違い切れる事は無かったが、
すこしお仕置きしとこうと思ったので挑発した。

「貴族にはバカみたいなキザ野郎がいたもんだな」

この言葉にギーシュの目が光った。

「どうやら、君は貴族に対する礼儀を知らないようだな」

「あいにく、バカに対する礼儀は持ってないんでね」

俺はギーシュを挑発するように言ってやった。

「よかるう。君に礼儀を教えてやろう。ちようどいい腹ごなしだ」

ギーシュは立ち上がった。

「おもしろい。俺もバカに灸を据えたいと思ってたところだ」

俺は別にギーシュのことが嫌いなわけではない。

俺は物語を進めるため、ギーシュと友達になるために、決闘するために挑発しているのだ。

「ここでするわけではないのだろう？」

「あたりまえだ。ヴェストリの広場で待っている。ケーキを配り終わったら、来たまえ」

ギーシュの友人たちが、わくわくした顔で立ち上がり、ギーシュの後を追った。

一人は、純耶が逃げないよう見張るため、テーブルに残った。

シエスタがぶるぶる震えながら、純耶を見つめている。

純耶は笑いながら、安心させるためシエスタの頭に手を置いた。

「大丈夫だ。俺はその辺の魔法使いよりは強い」

「で、でも……殺されちゃうわ……」

「安心しろ。俺は負けない」

すると後ろからルイズが駆け寄ってきた。

「ジュンヤ！何してんのよ！見てたわよ！」

「ああ、ルイズか。どうした」

「どうしたじゃないわよ！なに勝手に決闘なんか約束するのよ！」

「なに、ちょっとバカに灸を据えるだけさ」

ルイズはため息をついて、やれやれと方をすくめた。

「貴方の身体能力の高さは知っているわ。でも魔法に勝てるかは、分からないの」

「『ドット』『ライン』程度の奴に負けるほど落ちぶれてはいないさ」

「はあ。まあ、いいわ。その代わり負けたら、承知しないわよ！」

「了解した」

それから俺はギーシュの友人に案内を頼み、
ルイズ、シエスタと共にヴェストリの広場へと向かった。

続く

第4話 ギーシュとの決闘！？前編（後書き）

今回は長くなってしまったので二回に分けました。

次でギーシュ戦は終わると思います。

次回『第5話 ギーシュとの決闘！？後編』

お楽しみに！！

第5話 ギーシュとの決闘！？後編

- - - - - side
純耶

「諸君！決闘だ！」

ギーシュが薔薇の杖を掲げながら叫んだ。うおーッ！と歓声が巻き起こる。

俺はいま、ヴェストリの広場まで来ていた。

ヴェストリの広場は、魔法学院の敷地内、『風』と『火』の塔の間にある、中庭である。

西側にある広場で、そこは日中でも日があまり差さない。決闘にはうってつけの場所である。

俺が来た時、ヴェストリの広場には噂を聞きつけた生徒によって、溢れかえっていた。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はルイズの使い魔だ！」

ギーシュは腕を振って、歓声にこたえている。

それから、やっと俺に気付いた風に、俺の方を向いた。

俺とギーシュは、広場の真ん中に立ち、お互いぐっと睨みあった。

「とりあえず、逃げずに来たことは、誉めてやろうじゃないか」

「逃げる必要性を感じないな」

「減らず口を！まあ、始めるとしよう」

とりあえず俺はギーシュの『ワルキューレ』を見てみることにした。ギーシュは、そんなの俺を見て、疑問に思いながらも、薔薇の花を振った。

花びらが一枚、宙に舞ったかと思うと・・・。

甲冑を着た女戦士の形をした、人形になった。

身長は人間と同じくらいだが、硬い金属製で、淡い陽光を受け、甲冑がきらめいていた。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？」

「問題ない」

「言い忘れていたな。僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

言い終わると同時にワルキューレが、俺に向かって突進してきた。

その右の拳が、俺の腹を狙うが……。

「っふ！」

俺はその拳を掴み、そのままバランスを崩したワルキューレを……背負い投げした。

「！？ワルキューレ！きみ、何をした！」

「なに故郷に伝わる武術さ。それにしても、君……弱いな」

「なに！？なら、これでどうだ！いけ！ワルキューレ！」

ギーシュが手に持った薔薇を振った。

すると新たに六体のワルキューレが現れ、合計七体となったワルキューレは、

六体は純耶の周りを囲み、一体はギーシュの横に立っていた。

ワルキューレたちは全員、手に、両手剣、槍、盾など持っていたりなど武装をしていた。

「降参するなら今のうちだぞ。使い魔くん」

「この程度で勝った気になるな。キザ野郎」

「どうやら死にたいようだね。いけ！ワルキューレ！」

ワルキューレたちは武器を構え、俺に向かって突進してきた。そこでやっと俺は腰に差している刀を手を持った。

すると純耶の左手に刻まれたルーン文字が、光った。

「後悔したまえ！」

「お前がな！」

俺は足に力をこめ――――踏みだした！

「あの少年は、『ガンダールヴ』です！」

「ふむ……。確かにルーンが同じじゃ。ルーンが同じということは、

ただの平民だったその少年は、『ガンダールヴ』になった、ということになるんじゃないかな」

「どうでしょう」

「しかし、それだけで、そう決めつけるのは早計かもしれん」

「それもそうですな」

すると、ドアがノックされた。

「だれじゃ？」

扉の向こう側から、ミス・ロングビルの声が聞こえてきた。

「私です。オールド・オスマン」

「なんじゃ？」

「ヴェストリの広場で、決闘をしている生徒がいるようです。止めに入った教師も、生徒たちに邪魔されて、止められないようです」

「まったく。で、誰が暴れておるんだね？」

「一人は、ギーシュ・ド・グラモン」

「あの、グラモンとこのバカ息子か。オヤジも色の道では剛の者じやったが、息子も輪をかけて女好きじゃ。おおかた女の子の取り合いじゃろう。相手は誰じゃ？」

「・・・それがメイジではなく、ミス・ヴァリエールの使い魔の少年のようです」

オスマンとコルベールは顔を見合わせた。

「教師たちは、決闘を止めるために『眠りの鐘』の使用許可を求めております」

俺は刀を抜いた瞬間、体が羽のように軽くなった。

普段から人間離れた身体能力があるが、それを上回るくらい体の調子上がるのだ。

やはり左手のルーンが光っており、『ガンダールヴ』の能力は凄いなと思った。

こうして考えている時も、『ガンダールヴ』の能力により刀の情報が分かる。

刀の扱い方が分かったところで、俺はこちらに向かってくる一体のワルキューレにむかって、

刀を振り上げた状態から、そのまま振り下ろした。

ザスンッ！！

自分のゴーレムが、粘土のように純耶に切り裂かれるのを見て、

ギーシュは声にならないうめきをあげた。

ぐしゃっと音を立て、真つ二つになったゴーレムが地面に落ちた。

俺はそのままギーシュめがけて旋風のように突っ込んだ。

ギーシュは慌てて薔薇を振る。すると周りのゴーレムが、純耶めがけて突っ込んできた。

俺は向かってきたゴーレムを、目にも止まらぬスピードで細切れにすると、

ギーシュの盾となって突っ立っている最後のゴーレムも、切り裂いた。

見物していた連中から歓声が届く。

（あんまり、強く感じなかったな……。まあ、これで負け
たら最悪だな）

すると、観客の中からルイズとシエスタがこちらへと走ってくるの
が見えた。

「「ジュンヤ（さん）！」」

「おう！二人とも！どうだった？」

「どうだったって、あんた強すぎよ！！」

「そうですよ！！ほとんど、何も見えませんでした！！」

二人は俺の決闘を見たためか、凄く興奮したみたいだ……。。
するとシエスタが、はにかんだように顔を伏せた。

「どづした？」

「あの……、すいません。あのとき、逃げようとしちゃって」

食堂で、ギーシュを怒らせたとき、彼女は逃げ出そうとしていたのだろう。

それを言っているのであらう、彼女は。

「いや、別に謝ることではない。むしろ、そっちの方が普通だろう」

「ほんとに、貴族は怖いんです。私みたいな、魔法が使えないただの平民にとっては……」

シエスタは、ぐっと顔を上げた。その目がスターを見るようにキラキラと輝いている。

「でも、もう、そんなに怖くないです！私、ジュンヤさんを見て感激したんです。

平民でも、貴族に勝てるんだって！」

「そうか……、貴族に負けないう、頑張れよ」

「はい！」

すると後ろのギーシュが立ち上がり、こちらへと向かってきた。

「ルイズ。彼は何者なんだ？この僕の『ワルキューレ』を倒すなんて……」

「ただの平民でしょ」

「ただの平民に、僕のゴーレムが負けるわけなんて思えない」

「なに。俺が強かったに過ぎない」

「ああ、君か。先程はすまなかったね。僕も熱くなりすぎたようだ」

「いや、こちら言いすぎた。それに、俺の事はジュンヤでいい」

「ああ。これからよろしく、ジュンヤ。僕の名はギーシュ・ド・グラモン。ギーシュと呼んでくれ」

「よろしく、ギーシュ」

オスマン・コルベール

オスマンとコルベールは、『遠見の鏡』で一部始終を見終えると、顔を見合わせた。

コルベールは震えながらオスマンの名を呼んだ。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの平民、勝ってしまいましたが……」

「うむ」

「ギーシュは一番レベルの低い『ドット』メイジですが、それでもただの平民に遅れをとるとは

思えません。そしてあの動き！あんな平民見たことない！やはり彼は『ガンダールヴ』！」

「うむむ……」

「オールド・オスマン。さっそく王室に報告して、指示を仰がない

ことには……」

「それには及ばん」

オスマンは、重々しく頷いた。白いひげが、厳しく揺れた。

「どうしてですか？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇った『ガンダールヴ』！」

「ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』はただの使い魔ではない」

「そのとおりです。始祖ブリミルの用いた『ガンダールヴ』。その姿形は記述がありませんが、

主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在だと伝え聞きます。

「

「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文を唱える時間が長かった……。その強力な呪文ゆえに。

知ってのとおり、詠唱時間中のメイジは無力じゃ。そんな無力な間、己の体を守るために、

始祖ブリエルが用いた使い魔が『ガンダールヴ』じゃ。その強さは・

……」

その後を、コルベールが興奮した様子で引き取った。

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力を持ち、あまつさえ並みのメイジではまったく歯が立たなかったとか」

「で、ミスタ・コルベール」

「はい」

「その少年は、ほんとうにただの人間だったのかね？」

「はい。どこからどう見ても、ただの平民でした。すこし、魔力を持っていました。まあ、先祖にメイジがいたでしょう。」

「そんなただの少年を、現代の『ガンダールヴ』にしたのは、誰なんじゃね？」

「ミス・ヴァリエールですが……」

「彼女は、優秀なメイジなのかね」

「いえ、というか、むしろ無能というか……」

「さて、その二つが謎じゃ」

「ですね」

「無能なメイジと契約したただの少年が、何故『ガンダールヴ』になったのか。

まったく、謎じゃ。理由が見えん」

「そうですね……」

「とにかく。王室のボンクラどもに『ガンダールヴ』とその主人を渡すわけにもいくまい。

そんなオモチャを与えてしまつては、またぞろ戦でも引き起こすじやろつて。宮廷の奴らは

戦が好きじゃからな」

「ははあ。学院長の深謀には恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃ。ミスタ・コルベール」

「は、はい！かしこまりました！」

オスマンは杖を握ると窓際へと向かった。遠い歴史の彼方へ、思いを馳せる。

「伝説の使い魔『ガンダールヴ』か……。いったい、どのような姿をしておったのだろっうなあ」

コルベールは夢見るように呟いた。

「『ガンダールヴ』は、あらゆる『武器』を使いこなし、敵と対峙したとありますから……。」「

「ふむ」

「とりあえず腕と手はあったんでしょっうなあ」

続く

第5話 ギーシュとの決闘！？後編（後書き）

今回でギーシュ戦は終わりです。

純耶とギーシュは結構仲がよくなります。

次回は外伝です。

次回『外伝 純耶の一日！？』

お楽しみに！！

外伝 純耶の一日！？（前書き）

今回は純耶の一日を紹介します。

ではどうぞー！

外伝 純耶の一日！？

- - - - - side 純耶

俺の朝は早い………。

大体ルイズが起きる3時間前には、起きることにした。
何故かというと、先日のギーシュ戦である。

先日のギーシュ戦で俺は学んだことがある。

俺はギーシュとの戦いで『ガンダールブ』を使って勝負したのだが、正直楽しくなかった。当然、殺すことが楽しい、とかではない。

男として戦いは、正々堂々と戦いたいと思ったのだ。

俺だけチートすぎると、不公平だと思う。

なので、俺は『能力』を、神に限定封印してもらうことにした。
ちなみに神にどうやって連絡したかというと、森の中に入り、両手を上げて、

『か～～～み～～～さ～～～ま～～～！！！！！！』

とか適当に叫んだら、

『呼ばれて、飛び出て、じゃじゃじゃ～～ん！！何かようかい？純
耶くん！！』

とか言つて、目の前に画面が出てきた。

．．．．．少しウザイと思ってしまった俺は悪くない。．．．
．．．．．と思う。

とりあえず、俺は用件を話して、神様に聞いてみた。そしたら、軽い
い感じに、

『君が良いなら、良いんじゃない？』

とか言ってきた。

なので俺は神に限定封印してもらった。

封印した物は、

・漫画等の技は、俺が武器を使っているのもそれ武器関係だけ。それ以外、封印。

封印を解除するには、首飾りを貰い、それに封印してもらったので、外すと封印が解除。

・身体能力10倍は段階に分けて、通常時を1として2倍、2を4倍、3を8倍、4が10倍。

これは左手首に貰った腕輪がある。腕輪にはダイヤルがついており、

これを回す事によって、身体能力を上下させることにした。

ちなみに身体能力は鍛えるほど、上がっていくのでどんどん強くなっていくと思う。

あと俺はなるべく『能力』は使わないようにした。貰った『能力』より、自分で鍛えた『業』の方が、勝ったときの気分いい。と俺は思う。

まあ、流石に勝てない相手が来たときは、『能力』を使う。なるべく、仲間を傷つけない。

そんな感じで俺は朝からまずランニングをした。

身体能力は最低ランクの『1』。と言っても一般人の2倍だけど。

まあ、体力は戦いにおいて大事なところだろう。

俺は一時間ほど走った後、ガンダールヴを発動しないようにして、刀で素振りを始めた。
一応、神様にガンダールヴも自由にオン・オフできるようにしてもらった。

素振りを十分した後、今度はガンダールヴの能力を使い、素振りをした。
綺麗に素振りができるように、これを交互にし、一時間ほど素振りをした。

あと一時間あるが、これはルイズの服を洗ったり、部屋を掃除したりとそんな時間だ。
シエスタが、自分がします、といっていたが、丁重に断った。
これは一応使い魔の俺の仕事だ。これぐらいした方が良かったらう。

俺は準備が終わると、ルイズを起こす。
まずルイズは顔を洗い、顔を拭いた後、俺が服を着させる。

その後ルイズは食堂、俺は厨房へと向かう。

ルイズが食堂で食べていいと言っていたが、俺には厨房の方が落ち着くので、厨房にした。ルイズが少し頬を膨らませていたが……。

昼食を終えるとルイズは、教室に向かう。

俺は授業中あまりすることが無いので、文字を覚えるため、図書館に向かう。

図書館は生徒しか使えないが、ルイズに頼んで、許可を貰ってきてもらった。

けっこう英語に文法が似ているので、すぐに覚えられるだろうし、俺には天才程度の“理解力”がある。5日もすれば覚えられるだろう。

俺は二時間ほど勉強すると、本をしまい、森へと向かった。

森へと付くと、すこしだけ能力を使い、結界を張った。

昼の子の時間は、能力をもし使う事になったとき、扱えきれないと俺が危ない。

なので、能力のコントロールや、“魔力”や“霊力”、“チャクラ”を増やすため、ここで修行している。

流石に人には見させれないので、結界だけは使えるようにしといた。“気”は普通に体を鍛えれば自然に付くと思うので、気楽にいいこうと思う。

ちなみにこの結界、認識阻害と魔力などを通さないための結界である。

授業が終わるころにルイズを迎えに行き、俺たちは昼食を食べるため広場に行く。

広場のテーブルで昼食を食べた後は使い魔と触れ合うための自由時間なのだが、

俺たちは使い魔が人間なので、昼寝や読書などで時間をつぶした。

その後は、夕食を食べ、ルイズと俺は風呂に入る。

まあ、さすがに風呂は別々だが……。

部屋に戻ると、ルイズの着替えを俺がする。

ルイズはベットに入ると、すぐに寝息をたてはじめた。

俺はその後もう一度広場へ行き、夜の鍛錬をする。

夜は、『能力』を使つての『武器』の扱いかたや『業』の練習。

軽く素振りを三十分ほどすると、俺は鍛錬を終え、汗を流してから、部屋へと戻った。

そして部屋へと戻った俺は、結局ルイズのベットで寝ていいことになったので、

ベットに入り、俺も疲れから、すぐの寝息をたてはじめた……。

続く

。

外伝 純耶の一日！？（後書き）

今回は純耶の1日でした。

次回『第6話 ロングビルの思惑！？』

お楽しみに！！

第6話 ロングビルの思惑！？（前書き）

とうとうロングビルが動き出します。

これからどうなっていくか……………。

ではどうぞ

第6話 ロングビルの思惑！？

- - - - - side

純耶

純耶がトリステイン魔法学校でルイズの使い魔として生活を始めてから、一週間が経った。

その日の朝も洗濯や修行をした後、ルイズを起こして、朝食を食べるために厨房にやってきた。

ヴェストリ広場で、貴族のギーシュをやっつけた純耶は、大変な人気である。

「『我らの剣』が来たぞ！」

そう叫んで、純耶を歓迎したのは、コック長のマルトー親父である。四十過ぎの太ったおっさんである。

もちろん貴族ではなく、平民であるのだが、魔法学院のコック長ともなれば、

収入は身分の低い貴族なんか及びもつかなく、羽振りはいい。

丸々と太った体に、立派なあつらえの服を着込み、厨房を一手に切り盛りしている。

マルトーは、羽振りがいい平民の例に漏れず、

魔法学院のコック長のくせに貴族と魔法を毛嫌いしていた。

彼はメイジのギーシュを剣（刀）で倒した純耶を『我らの剣』と呼び、

まるで王様を扱うように純耶をもてなしてくれるのであった。

純耶が専用の椅子に座ると、シエスタがさつと寄ってきてにつこりと笑いかけ、

温かいシチューの入った皿と、ふかふかの白パンを出してくれた。

「ありがとう」

「今日のシチューは特別ですわ」

シエスタは嬉しそうに微笑んだ。純耶は一口シチューをほお張ると、顔を輝かせた。

「うまい！本当においしいよ。」

そう言っただけで感謝すると、包丁を持ったマルトーがやってきた。

「そりゃそうだ。そのシチューは、貴族連中に出してるものと、同じもんさ」

「おいおい、そんなもん俺に出しても良いのか？確かにおいしいが・

「.....」

純耶がそういうと、マルトーは得意げに鼻を鳴らした。

「ふん！あいつらは、なに、確かに魔法は出来る。土から鍋や城を作ったり、とんでもない炎の玉を

吐き出したり、果てはドラゴンを操ったり、たいしたもんだ！でも、こうやって絶妙の味に料理

料理を仕立て上げるのだって、言うなら一つの魔法さ。そう思うだろ、ジュンヤ」

俺は頷いた。

「確かにそのとおりだ。マルトー親父もつまい事を言っな！」

「いいやつだな！お前はまったくいいやつだ！」

マルトーは、俺の首根っこにぶっとい腕を巻きつけた。

「なあ、『我らの剣』！俺はお前の額に接吻するぞ！こら！いいな！」

「その呼び方と接吻はやめろ。俺にそんな趣味は無い」

純耶は言った。

「どうしてだ？」

「俺はそんなたいした奴じゃないさ」

マルトーは、純耶から体を離すと、両腕を広げてみせた。

「お前はメイジのゴーレムを切り裂いたんだぞ！わかってるのか！」

「ああ」

「なあ、お前はどこで剣を習った？どこで剣を習ったら、あんな風に振れるのか、

俺にも教えてくれよ」

マルトーは、純耶の顔を覗き込み、尋ねてきた。マルトーは飯を食いに来た純耶に、

毎回こうやって尋ねてきたのであった。その度に純耶は同じ答えを繰り返してきた。

「知らないな。剣を握ったのは、ここ最近だ。体が勝手に動いただけさ」

「お前たち！聞いたか！」

マルトーは、厨房に響くように怒鳴った。
若いコックや見習いたちが、返事を寄越す。

「聞いてますよ！親方！」

「本当の達人というのは、こういうもんだ！決して己の腕前を誇ったりしないものだ！

見習えよ！達人は誇らない！」

コックたちが嬉しげに唱和する。

「達人は誇らない！」

するとマルトーがぐるりと振りむき、純耶を見つめるのだ。

「やい、『我らの剣』。俺はそんなお前がますます好きになっただぞ。どうしてくれる」

「どうしてくれるといわれてもな……………」

（まあ、ぜんぶ本当の事なんだが……。サイトも困っただろうに……………）

ぜんぶ本当の事なのだが、マルトーは、それを謙遜と受け取っている。

気さくなマルトーを騙しているようだが、言ってしまうえば大問題だ。純耶はそんな事を思いながら、左手のルーンを見つめた。マルトーは、シエスタの方を向いた。

「シエスタ！」

「はい！」

そんな二人の様子を、ニコニコしながら見守っていた気のいいシエスタが、元気よく返事を返す。

「我らの勇者に、アルビオンの古いの注いでやれ」

シエスタは満面の笑みになると、ぶどう酒の棚から言われたとおり
ワインテージを取り出してきて、純耶のグラスに並々と注いでくれ
た。

純耶はアルコールに強いのか、平気な顔をしてぶどう酒を飲み干す
純耶を、

シエスタはうつとりとした面持ちで見つめている。こんなことが毎
回繰り返される。

純耶が厨房を訪れるたびに、マルトーはますます純耶のことが好き
になり、

シエスタはさらに純耶のことを尊敬するのであった。

（とうとう、シエスタフラグが立っちまったか……。どうすっ
かね〜）

そしてその日は……。そんな純耶を厨房の窓の外から覗き込む赤
い影があった。

若いコックが窓の外にいる影に気付いた。

「おや、窓の外に何かいるぞ」

当然純耶も気付いていた。

（そうか次はキュルケか……）

学院長室で、秘書のロングビルは書き物をしていた。

ロングビルは手を止めるとオスマンの方を見つめた。オスマンは、セコシアの机に伏せて居眠りをしていた。

ロングビルは薄く笑い、それから立ち上がった。低い声で『サイレント』の呪文を唱える。オスマンを起こさないように、

自分の足音を消して学院長室を出た。

ロングビルが向かった先は、学院長室の一階下にある、宝物庫がある階である。

階段を下りていくと、鉄の巨大な扉がある。門はぶつとい門があり、門はこれまた巨大な鍵前で守られている。

ここには魔法学院成立以来のの秘宝が収められているのだ。

ロングビルは辺りを慎重に見回すと、ポケットから杖を取り出した。

ロングビルは低く呪文を唱え、詠唱が完成させると、杖を鍵前に向かって振った。

しかし、鍵前からはなんの音もしなかった。

「まあ、ここの鍵前に『アン・ロック』が通用するとは思えないけどね」

くすつと妖艶に笑うと、ロングビルは自分の得意な呪文を唱えだした。

それは『鍊金』。呪文を唱え、分厚い扉に杖を振るが、扉に変わったところは見られない。

「スクウェアクラスのメイジが、『固定化』の呪文をかけているみたいね」

『土』系統のエキスパートのロングビルの『鍊金』を受け付けないこの扉は、
そうとう高位のメイジに『固定化』をかけられたに違いない。

かけたメガネを持ち上げ、扉を見ていたロングビルに、階段を上ってくる足音が聞こえた。
杖をポケットにしまい、そこに現れたのは、コルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここでなにを？」

コルベールが間の抜けた声で尋ねると、ロングビルは愛想のいい笑みを浮かべた。

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているのですが・・・」

「

「はあ、それは大変だ。一つ一つ見て回るだけで、一日がかりです

よ。何せここには

お宝ガラクタひつくるめて、所狭しと並んでいますからな」

「でしょうね」

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか」

ロングビルは微笑んだ。

「それが……。ご就寝中なのです。まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし……。」

「なるほど。ご就寝中ですか。あのジジイ、じゃなかったオールド・オスマンは、
寝ると起きませんからな。では、僕も後で伺うことにしましょう」

コルベールは歩き出すと、それから、立ち止まり、振り向いた。

「その……、ミス・ロングビル」

「なんでしょっ？」

「もしよかったら、なんですけど……。昼食を一緒にいかがですか？」

ロングビルは少し考えたあと、にっこりと微笑んで、申し出を受けた。

「ええ、喜んで」

二人は並んで歩き出した。

「ねえ、ミスタ・コルベール」

「は、はい？　なんででしょう」

自分の誘いが、あっさり受け入れられたことに気をよくしたコルベールは、
跳ねるような調子で答えた。

「宝物庫の中に、入ったことはありません？」

「ありますとも」

「では、『破壊の杖』をご存知？」

「ああ、あれは、奇妙な形をしておりましたなあ」

ロングビルの目が光った。

「と、申されますと？」

「説明のしようがありません。奇妙としか。はい。それより、何を
お召し上がりになります？」

本日のメニューは、平日の香草包みですが……。なに、僕
はコック長のマルトー親父に
顔が利きましてね、僕が一言言えば、世界の珍味、美味を……
」

「ミスタ」

ロングビルは、コルベールの言葉を遮った。

「は、はい？」

「しかし、宝物庫は、立派なつくりですわね。あれでは、どんなメイジでも連れてきても、

あけることは不可能でしょうね」

「そのようすな。メイジには、あけるのは不可能と思います。なんでもスクウェアクラスの

メイジが何人も集まって、あらゆる呪文に対抗できるように設計したようすから」

「ほんとに感心しますわ。ミスタ・コルベールは物知りでいらつしやる」

ロングビルは、コルベールを頼もしげに見つめた。

「え？ いや……。はは、暇にあかせて書物に目を通すことが多いもので……。、

研究一筋と申しましょうか。はは。おかげでこの年になって独身ですて……。、はい」

「ミスタ・コルベールのおそばにいられる女性は、幸せでしょうね。だって、誰も知らないようなことを、たくさん教えてくださるんですから……。、」

ロングビルは、うつとりしたためで、コルベールを見つめた。

「いや！もう！からかつてはいけません！はい！」

コルベールはかちこちに緊張しながら、禿げ上がった額の汗を拭いた。

それから、真顔になってロングビルの顔を覗き込んで。

「ミス・ロングビル。ユルの曜日に開かれる『フリッグの舞踏会』はご存知かな？」

「なんですの？それは」

「ははあ、貴方は、ここに来てまだ二ヶ月ほどでしたな。その、なんてことない、ただのパーティーです。ただ、ここでいっしょに踊ったカップルは、結ばれるとか何とか！そんな伝説がありましてな！」

「で？」

ロングビルはにっこりと笑って促した。

「その……、もしよければ、僕と踊りませんか、そういう
はい」

「喜んで。舞踏会も素敵ですが、それより、もっと宝物庫のことに
ついて知りたいわ。」

私、魔法の品々にとっても興味がありますの」

コルベールはロングビルの気を引きたいがため、頭の中を探った。
やっとロングビルの興味を引けそうな話を見つけたコルベールは、
もったいぶって話し始めた。

「では、ちょっとご披露しましょう。たいした話ではありませんが・
……」

「是非とも、伺いたいわ」

「宝物庫は確かに魔法に関しては無敵ですが、一つだけ弱点がある
と思うのですよ」

「はあ、興味深いお話ですわ」

「それは……。物理的な力です」

「物理的な力？」

「そうですね！例えば、まあ、そんなことはありませんのですが、巨大なゴーレムが……」

「巨大なゴーレムが？」

コルベールは、得意げに。ロングビルに自説を語った。
聞き終わったあと、ロングビルは満足げに微笑んだ。

「大変興味深いお話でしたわ。ミスタ・コルベール」

続く

第6話 ロングビルの思惑！？（後書き）

今回はロングビルが動き出しました。

次は純耶について書きたいと思います。

次回『人物紹介 挿絵あり』

お楽しみに！！

人物紹介 挿絵あり（前書き）

今回は人物紹介をしたいと思います。

といっても純耶ぐらいしかいませんが・・・

純耶の絵も貼ったので見ていてください

人物紹介 挿絵あり

主人公設定

《名前》

ハガネノ
鋼乃 純耶
ジュンヤ

《年齢》

17歳

《容姿》

転生前はカッコよくも、悪くも無かったが、
転生後、神によってイケメンになる。

転生後の容姿は生前の黒目黒髪と日本人と変わらないが、
身長は元々の身長より高くなり174?、顔はイケメン。

人外的な身体能力も腕につけている腕輪のダイヤルにより、
段階ごとに分けて封印している。

人物紹介 挿絵あり（後書き）

今回は人物紹介だけでしたが、

次投稿するときは本編になりますので、

お楽しみにしててください

次回『第7話 微熱のキュルケ!? 挿絵あり』

お楽しみに!!

第7話 微熱のキュルケ！？

挿絵あり（前書き）

今回はキュルケとの絡みです！

少しエロが入りますが別にキス程度なのでご勘弁ください。

後は途中で絵が入っているのでお楽しみに。

第7話 微熱のキュルケ！？

挿絵あり

- - - - - side 純耶

ロングビルが動き出した日の夜……。

俺は夜の修行をしてから、部屋に戻っている時だった。

(季節的には春だが、まだまだ冷えるな……。)

俺はそんな事を考えなら階段を進んでいた。

そして、俺がルイズの部屋のドアを開けようとしたとき、キュルケの部屋の扉ががちゃりと開いた。

出てきたのは、サラマンダーのフレイムだった。燃える尻尾が実に温かそうだった。

サラマンダーはちょこちょこと俺の方へ近づいてきた。

「なんだ、フレイム(やはり今日はキュルケイベントか……。)
」

きゅるきゅると、人懐っこい感じで、サラマンダーは鳴くと、俺の上着の袖をくわえると、ついてこいというように首を振った。

「ついてこいつてか？」

キュルケの部屋のドアは開けっぱなしだ。あそこの連れ込むつもりだろう。

俺は先に進むサラマンダーを追うように、キュルケの部屋のドアをくぐった。

入ると、部屋は真っ暗だった。サラマンダーの周りだけ、ぼんやり明るかった。
暗がりから、キュルケの声がした。

「扉を閉めて？」

俺はキュルケの言われたとおり、扉を閉めた。

「ようこそ。こちらにいらっしやい」

「真っ暗なんだが」

キュルケが指を弾く音がきこえた。

すると、部屋の中に立てられたロウソクが、一つずつ灯っていく。俺の近くに置かれたロウソクから順に火は灯り、キュルケのそばのロウソクがゴールだった。

道のりを照らす街頭のように、ロウソクの灯りは浮かんでいる。

ぼんやりと、淡い幻想的な光の中に、ベットに腰掛けたキュルケの悩ましい姿があった。

ベビードールというのか、いかにも、私誘惑してます、といった下着を着けている。

というかそれしかつけていなかった。

キュルケの胸が、上げ底でないことが確認された。

メロンのようなそれが、レースのベビードールを持ち上げている。

「そんなところに突っ立ってないで、いらっしやいな」

キュルケは、色っぽい声で言ってきた。

俺的には、正直行きたいが原作だとこの後、ルイズがやってくる。

どうしたものか……、と考えていたが、まあどうにかなるだろうと思う、

俺はキュルケの方へと向かった。キュルケはにっこり笑って言った。

「座って？」

俺は言われたとおりに、キュルケの隣に腰掛けた。

裸に近いキュルケの体をみて、俺はちよつと興奮した。

「それで何のようだ？」

俺がそう聞くと、燃えるような赤い髪を優雅にかきあげて、キュルケは俺を見つめた。

ぼんやりとした口ウソクの灯りに照らされたキュルケの褐色の肌は、野性的な魅力を放っていた。

（やはり原作組みのヒロインはすごい魅力を持っているな・・・）

俺がそんな事を考えていると、キュルケは大きくため息をついた。そして、悩ましげに首を振った。

「あなたは、あたしをはしたない女だと思つてしょうね」

「キュルケ？」

「思われても、しかたがないの。わかる？あたしの二つ名は『微熱』

」

「何故なんだ？」

下着の隙間から見える谷間が、なんとも注意を引いた。

「わたしはね、松明みたいに燃え上がりやすいの。

だから、いきなりこんな風にお呼び出してしまふの。
わかってる。いけないことよ」

「そうだな」

俺は原作どおりだな、とか思いながら相槌を打った。

こんな風に、異国の女の子に打ち明け話をされても、普通に困った。

「でもね、あなたはきつとお許しくださると思うわ」

キュルケは潤んだ瞳で俺を見つめてきた。

どんな男だろうと、キュルケにこんな風に見つめられたら、
瞬時に襲ってしまっだろう。俺はぐつと襲うのを抑えながら聞いた。

「何を許すんだ？」

キュルケは、俺の手を握ってきた。キュルケの手は温かった。
そして、一本一本、俺の指を確かめるように、なぞり始めた。

顔には出さなかったが、けっこう動揺した。

「恋してるのよ。あたし。あなたに。恋はまったく、突然ね」

「まったく突然だ」

俺はサイトと違ってあまり、混乱はしなかった。

からかっていると思ってしまうが、キュルケの顔は真剣そのものだった。

「あなたがギーシュを倒した姿……。かつこよかったわ。まるで伝説のイーヴァルディの勇者みたいだったわ！あたしはね、それを見て痺れたのよ。

信じられる！痺れたのよ！情熱！ああ、情熱だわ！」

「情熱か（いつも思うが貴族は芝居をしてるみたいだな……。）」

「二つ名の『微熱』はつまり情熱なのよ！その日から、あたしはほんやりとして

マドリガルを綴ったわ。マドリガル。恋歌よ。あなたの所為なのよ。

ジュンヤ。あなたが毎晩あたしの夢に出てくるものだから、フレームを使って

様子を探らせたり……。ほんとに、あなしってば、みつと

もない女だわ。

そう思うでしょう？でも、全部あなたの所為なのよ」

「そうだな、俺が責任を取らなければいけないな」

俺がそう言つと、俺の言葉をイエスと受け取ったのか、ゆっくりと目をつむり、唇を近づけてきた。

キュルケは魅力的だ。ルイズには無い色気がある。しかし、ルイズは色気の代わりに可愛さがあるが。

> i 1 4 8 9 0 — 2 0 6 2 <

俺はサイトとは違う。こんなチャンスを逃す男はバカだ。

俺はキュルケの肩をつかむと顔を寄せ、唇を重ねた。

「・・・・・・・・んんう」

俺からキスをしたので、キュルケは少し驚いたようだが、キスを再開した。

そして、俺が舌を入れようとしたその時、窓の外が叩かれた。

そこには、恨めしげに部屋の中を覗く、一人のハンサムな男の姿があった。

「キュルケ・・・・・・・・。待ち合わせの時間に君が来ないから来てみれば・・・・・・・・。」

「ペリッソン！ええと、二時間後に」

「話が違う！」

こんな感じに話しているが、一応ここは三階である。ペリッソンは魔法で浮かんでいるらしい。

まあ、俺も身体能力を戻せば、余裕で跳んで来れるがwww。

キュルケは煩そうに、胸の谷間に差し込んだ派手な魔法の杖を取り上げると、

そちらの方を見ないで杖を振った。

ロウソクの火から、炎が大蛇のように伸び、窓ごと男を吹っ飛ばした。

実際に見ると、さっきの男が死んでないか心配になってしまう。

まあ、俺には関係ないのでどうでもいいが・・・・・・・・。

「まったく、無粋なフクロウね」

流石にフクロウはないと思った。

「さあ、続きをしましょう」

「さっきのは誰なんだ？」

「彼はただのお友達よ。とにかく今、あたしが一番恋してるのはあなたよ。ジュンヤ」

キュルケは再び唇を近づけてきた。むせるような色気が俺を襲う。

すると……、今度は窓枠が叩かれた。

見ると、悲しそうな顔で部屋の中を覗き込む、精悍な顔立ちの男がいた。

「キュルケ！その男は誰だ！今夜は僕と過ごすんじゃないのか！
というか男！キュルケの胸を揉むな！」

ちなみに俺は原作で邪魔が来ると分かって暇なので、さっきからキュルケの胸を揉んでいる。

キュルケは顔を赤くはしているが、あまり動じてはいなかった。

「／／／スティックス！ええと、四時間後に」

「そいつは誰だ！キュルケ！というか胸から手を離せ！」

怒り狂いながら、スティックスと呼ばれた男は部屋の入ってこようとした。

なので今度は、俺は胸から手を離し、男の前まで瞬時に移動すると吹っ飛ばした。

「ぶぎゃッ！！！」

スティックスはそう言って窓の下まで吹っ飛んでいった。

そして俺はキュルケのほうに戻ると、再び胸を揉んだ。

俺は揉みながらキュルケに尋ねた。

「今のも友達か？」

「ノノノん・・・、彼は友達というより・・・ん・・・ただの知り合いね。」

とにかく時間を・・・あ・ん・・・無駄にしたくないの。

夜が長いな・ん・・・ん・うう・・・て誰が言ったのかしら」

キュルケは、俺に唇を近づけた。

すると窓だった壁の穴から、悲鳴が聞こえた。俺はうんざりして振り向いた。

窓際で、三人の男が押しあいへいさいしている。
三人は同時に、同じセリフをはいた。

「『キュルケ！そいつは誰なんだ！恋人はいないって言ってたじゃないか！』というかキスするな！」「」

「んむ！んんむうむ！ぬぬむ！（訳：マニカン！エイジャックス！ギムリ！）」

正直めんどくさくなってきたので、俺は男達を見た瞬間、キュルケに口づけした。

キュルケは唇を離すと、うんざりした声で、サラマンダーに命令した。

「……ぷはっ、フレイム！」

きゆるきゆると部屋の隅で寝ていたサラマンダーが起き上がり、三人が押し合っている窓だった穴に向かって、炎を吐いた。
三人は仲良く地面に落下していった。

「今のは？」

「さあ？知り合いでもなんでもないわ。とにかく！愛してる！」

キュルケは俺の顔を両手で挟むと、まっすぐ唇を奪った。

「む、むぐ……」

俺はキュルケの口に下を入れてディープキスをした。

キュルケは舌まで入れられるとは思わなかったらしく、すこし動揺していた。

しかし、そうしているとドアの外に気配を感じた。

俺は気配を感じた瞬間、キュルケから離れた。

俺が離れた瞬間、物凄い勢いでドアが開けられた。

そこには、ネグリジエ姿のルイズが立っていた。

ルイズはすこしこちらを見た後、キュルケのほうを向いた。

「キュルケ！」

ルイズはキュルケの方を向いた後、怒鳴った。

キュルケはいつのまにか俺の腕に絡み付いていたが、俺から体を離し、振り返った。

「取り込み中よ。ヴァリエール」

「ツエルプストー！誰の使い魔に手を出してんのよ！」

俺は口を挟んだらややこしくなると思い、俺は黙っていた。

「仕方ないじゃない。好きになっちゃたんだもん」

キュルケは両手を上げた。いろいろしたが、いたくルイズを怒らせたようだ。

「恋と炎はフォン・ツエルプストーの宿命なのよ。身を焦がす宿命よ。」

恋の業火で焼かれるなら、あたしの家系は本望なのよ。あなたが一番ご存知でしょう？」

キュルケは両手をすくめてみせた。ルイズの手が、わなわなと震えた。

「来なさい。ジュンヤ」

ルイズは俺をじろりと睨んできた。

「ねえルイズ。彼は確かにあなたの使い魔かもしれないけど、意思

だつてあるのよ。

そこを尊重してあげないと」

とキュルケはもつともな事を言つて、助け船を出した。

「まあ、そうだな。もつともな意見だ」

ルイズは硬い声で言つた。

「あんた、明日になったら十人以上の貴族に、魔法で串刺しにされるわよ。それでもいいの？」

「平気よ。あなただつてヴェストリ広場で、彼の活躍を見たでしょう？」

「うぐ！？で、でも後ろから『ファイヤーボール』を撃たれたりしたら、さすがに危ないわよ」

「いや、俺は大丈夫だが？」

「あんたはどつちの味方よ！」

唇をぎゅっと噛み締めると、両目が吊り上った。

「まるでサカリのついた野良犬じゃないの~~~~~ッ!」

声が震えている。ルイズは、怒ると口より先に手が動き、手より先に足が動く、もっと怒ると声が震えるのであった。

俺はルイズの怒りを静めるために、ルイズをぎゅっと抱きしめた。

「／／／／な!? なによ、こ、こんなので騙されないんだからね!／／／／」

「ごめん、ルイズ。ちょっと断りにくくてな」

「もう。今回だけだからね! べ、べつに抱きしめられて嬉しかったわけじゃないからね!／／／／(ぷいッ)」

「ああ。これからは誘われても行かないさ。それに行ったら可愛いご主人様が怒っちゃうからな」

「(か、かわいい!?) も、もう遅いから、ね、寝ましよ!／／／／」

ルイズはベットの方にいき、ベットに横たわると俺のほうを向いた。

「ほら、早く入りなさい／＼／＼」

「ああ、わかった」

俺はベットに入るとルイズに一応知っているが、キュルケの事を聞いた。

フォン・ツェルプストー家の事、二百年前から隣同士で戦争をしていること、

恋人を取られたりしていること、などいろいろ説明してもらった。

「ふん。貴族も大変だな。いろいろと」

「貴族というより、ヴァリエールとツェルプストーが特別なのよ」

「そっか。しかし、二百年も続くと歴史を感じるな」

「というわけで、キュルケはダメよ！というか他にも嫌だけど・・・」

「まあ、わかった。あとさ、ルイズ……………」

「なによ」

「剣くれないか。剣」

「持ってたじゃない」

「あれじゃダメなんだ」

「あれじゃなんでダメなの？」

「まあ、いろいろな……………」

「ふうん」

ルイズは少しばかり考えて納得すると頷き、俺に向かって言った。

「そうね…………。わかったわ」

「何がわかったんだ？」

「あんたに、剣、買ってあげる」

「そうか、ありがとう（ニコッ）」

「べ、べついいわよ／＼／＼使い魔の世話も主人の役目だからね／＼／＼
わかったら、さっさと寝る！明日は虚無の曜日だから、街に連れてってあげる」

「ああ、そうだな。おやすみ、ルイズ」

「お、おやすみ／＼／＼」

とうとうデルフリンガーとご対面か．．．．とか考えていると、眠気が襲ってきた。

今日も長い一日だったと思いながら、純耶は眠りについた。

続く

第7話 微熱のキュルケ!?

挿絵あり(後書き)

どうでしたか？

すこし純耶がエロくなってしまいました

男子ならここまでしてしまいたい!とか思っちゃいますね・・・

流石に出来ませんけどねww

次はとうとうデルフが登場します!

次回『第8話 デルフ登場!?!』

お楽しみに!!

第8話 デルフ登場!?

挿絵あり(前書き)

今回はデルフ登場です。

そろそろフーケが出てきます。

楽しみに。

とうとう PV78 / 769アクセス ユニーク9 / 532人
まできました。

こんなに読んでくれて、ありがとうございます!!
これからも頑張っていきたいと思いますので、よろしく願いします!!

第8話 デルフ登場！？ 挿絵あり

- - - - - side キュルケ

キュルケは、昼間に目覚めた。今日は虚無の曜日である。

窓を眺めて、窓ガラスが入っていないことに気づいた。周りが焼け焦げている。

しばらくぼんやりと寝ぼけた気分で見つめて、昨晚の出来事を思い出した。

「そうだわ、ふあ、色んな連中が顔を出すから、ふっ飛ばしたんだっけ。

ジュンヤもふっ飛ばしてたけど・・・」

そして、窓のことなどまったく気にせずに、起き上がると化粧を始めた。

今日は、どうやって純耶を口説こうか、と考えるとウキウキしてくる。

キュルケは、生まれつきの狩人なのだ。

化粧を終え、自分の部屋から出て、ルイズの部屋の扉をノックした。そのあと、キュルケは顎に手を置いて、にっこりと笑った。純耶が出てきたら、抱きついてキスをする。

ルイズが出てきたらどうしようかしら、と少しだけ考える。

そのときは、そうね……、部屋の奥にいるであろう、純耶に流し目を送って中庭でもブラブラしていれば、向こうからもアプローチしてくれるだろう。

キュルケはこのときすでに、純耶によって骨抜きにされている。昨晚の純耶とのキスはキュルケに情熱を与えた。

純耶自身もキュルケをハゲにやるつもりは無い。自分のハーレムに加えたい、とも思っていた。純耶も男、そういうちよつとした野望も持っていた。

それはさておき、キュルケはノックしたのだが、返事がない。あけようとしたが、鍵がかかっていた。

キュルケはなんの躊躇いもなく、ドアに『アンロック』の呪文をかけた。

すると鍵の開く音が聞こえた。

ほんとなら、学院内で『アンロック』の呪文を唱えることは、重大な校則違反なのだが、

キュルケは気にしない。恋の情熱はすべてのルールに優越する、というのがツエルプストー家の家訓なのであった。

しかし部屋はもぬけの殻だった。二人ともいない。キュルケは部屋を見回した。

青みがかった髪と、ブルーの瞳を持つ彼女は、
メガネの奥の目つをキラキラと海のように輝かせて本の世界に没頭
していた。

タバサは年より四つも五つも若く見られるほど、身長が低く体も細
い。

タバサはそんなこと気にしない。他人からどう見られるか、という
ことより、
とにかく放つといておいて欲しい、と考えるタイプの少女であった。

タバサは虚無の曜日が好きだった。

何故なら、自分の世界に好きだけ浸っていられるからである。
彼女にとっての他人は自分の世界に対する無粋な闖入者である。

その日も、どんどんとドアが叩かれたのでタバサはとりあえず無視
した。

そのうちに、激しく叩かれたので、タバサはめんどくさそうに
ルーンを呟き、
自分の身長より大きい杖を振った。

タバサは風属性の魔法を得意とするメイジなのである。

『サイレント』によって、彼女の集中を妨げるノックの音は消え去
った。

タバサは満足して本に向かったが、ドアが勢いよく開かれた。

タバサは闖入者に気づいたが、本から目を離さなかった。

入ってきたのは、キュルケだった。彼女は二言、三言、大げさに何かを喚いたが、

『サイレント』呪文が効果を發揮しているため、声はタバサに届かない。

するとキュルケはタバサの本を取り上げた。そして、タバサの肩を掴んで自分に振り向かせる。

キュルケはタバサの友人である。いくら歓迎していないとはいえ、魔法で吹き飛ばすのは躊躇われる。

他の相手なら『ウィンド・ブレイク』でも使って吹き飛ばすところなのだが、

キュルケは数少ない例外であった。

しかたなく、タバサは『サイレント』の魔法を解いた。

「タバサ。今から出かけるわよ！早く支度をしてちょうだい！」

タバサは短くぼそとした声で自分の都合を友人に述べた。

「虚無の曜日」

タバサはそれだけ言つと十分といわんばかりに、キュルケから本を

取り返そうとした。

しかしキュルケは本を高く掲げた。それだけでタバサの手は本に届かない。

「わかってる。あなたにとって虚無の曜日がどんな日だか、あたしは痛いほどよく知ってるわよ。」

でも、今はね、そんなこと言ってられないの。恋なのよ！恋！」

それでわかるでしょ？と言わんばかりのキュルケの態度であるが、タバサは首を振った。

キュルケは感情で動くが、タバサは理屈で動く。対照的な二人であるが、そんな二人は仲がよい。

「そうね。あなたは説明しないと動かないのよね。ああもう！あたしね、恋したの！」

その人が今日、あのヴァリエールと出かけたの！わかった？」

タバサは首を振った。それで何故自分に頼むのか、理由がわからなかった。

「出かけたのよ！馬に乗って！あなたの使い魔じゃないと追いつかないのよ！助けて！」

タバサはやつと頷いた。自分の使い魔じゃないと追いつかない。

なるほど、と思った。それに今回のキュルケは何かちがう気がした。

これまでキュルケの恋はどこか遊びな感じがしたが、今回のそれはいつもより本気さが感じられたのである。

タバサはキュルケをこんなにした相手に、少し興味を持った。

「ありがとう！じゃ、追いかけてくれるのね」

タバサは再び頷いた。タバサは窓を開け、口笛を吹いた。

それから、窓枠によじ登り、外に向かって飛び降りた。

キュルケもタバサに続いて窓から外に身を躍らせた。ちなみにタバサの部屋は五階にある。

タバサは、外出の際あまりドアを使わない。こっちの方が早いからである。

落下する二人をその理由が受け止めた。

ぱっさぱっさと力強く両の翼を陽光にはためかせ、二人をその背に乗せて、

ウィンドドラゴンが飛び上った。

「いつ見ても、あなたのシルフィードは惚れ惚れするわね」

キュルケが突き上げた背びれにつかまり、簡単の声をあげた。

シルフィードは、竪塔に当たって上空に抜ける上昇気流を器用に捕らえ、

一瞬で二百メートルも空を駆けのぼった。

トリスティンの城下町を、純耶とルイズは歩いてた。
魔法学院から乗ってきた馬は町の門のそばにある駅に預けてある。

俺は今回始めて馬に乗ったわけではない。

前世では子供の頃、じいちゃんに乗馬をさせてもらった事がある。
じいちゃんにはいろんな事をさせてもらった。

まあ、このことは機会があれば、話していこうと思う。

「あんたって意外に乗馬がうまいのね。見直したわ」

「まあな。いろいろしてたんだ」

俺はそんな話をしながら、周りを見回した。

白い石造りの街は、まるでテーマパークのようだった。

転生してから俺は魔法学院から出たことがなかったので、けっこう
わくわくしていた。

やはり街を見回していると、つくりは中世ヨーロッパのような街並
みだった。

ここにはいろんな人たちが賑わっているが、やはり純耶のような黒
髪はほとんど見かけない。

しかも原作でもサイトが言っていたが、この大通りは狭い。

「狭いな」

「狭いって、これでも大通りなんだけど」

「これでか？」

道幅は五メートルもない。そこを大勢の人が行き来するもんだから、歩くのも一苦労である。

「ブルドンネ街。トリステインで一番大きな大通りよ。この先にトリステインの宮殿があるわ」

「そうか」

純耶はこの世界に地球の物が召喚されるのを知っているため、商店などにある商品を

いろいろ見回しながら歩いていた。

そんな事をしていたらルイズに耳を引っ張られた。

「ほら、寄り道しない。スリが多いんだから！あんな、上着の中の財布は大丈夫でしょうね？」

ルイズは、財布は下僕が持つものだ、といって、財布をそっくり純

耶に持たせていた。
中には金貨がぎっしり詰まっていた。

「大丈夫だ。というか逆にスツてやった」

純耶はにやりと笑いながら、いくつかの財布を見せた。

純耶は財布を盗られそうになったら、相手の手首の関節を外してから、

相手のポケットにある財布をスツていた。

メイジの場合は、杖をへし折った後、関節をはずし、財布をスツた。

純耶の通った道は、何人かの人を手首を抑えて倒れていたり、財布がなくなっていたりと、結構な騒ぎになっていた。

ルイズはため息をはくと、純耶に言った。

「はあ、あんたってほんと規格外だわ」

「誉めんなよ。照れるじゃねえか」

「誉めてないわよ!」

「わかったよ。というか剣屋はどこなんだ?」

「こつちよ。剣だけ売ってるわけじゃないんだけど」

ルイズは、さらに狭い路地裏に入っていった。悪臭が鼻をつく。ゴミや汚物が、道端に転がっている。

「きたねえな」

「だからあんまり来たくないのよ」

四辻に出た。ルイズは、立ち止まると、辺りをきょろきょろと見回した。

「ピエモンの秘薬屋の近くだったから、この辺なんだけど……」

それから、一枚の銅の看板を見つけ、嬉しそうに呟いた。

「あ、あった」

見ると、剣の形をした看板が下がっていた。そこがどうやら、武器屋であるらしい。

ルイズが扉を開けようとしていたが、その前に俺はさっきから覗い

ている二人組みを
こちらへ呼ぶ事にした。

「キュルケ！出てきたらどうだ！あと一人も」

[illegible]

side タバサ

！？驚いた。まさかこちらに気付いてるとは思わなかった……

私たちは街に着くと、大通りを歩くルイズとその使い魔を見つけた。キルケはその二人がどこに行くのか尾行するらしく、私から見れば稚拙な尾行だが、それでも素人に見つかるような失敗はしていないはずだった。

それにあの使い魔は、彼の持っている財布を盗ろうとしていた人間達を撃退していた。

しかも撃退するだけでなく相手の財布を逆にスッていた。

あんな見事に財布を盗れる人間は早々いないだろう。

それに彼はギーシュとの決闘で、見事な剣技を見せていた。

あの時からかもしれない。わたしは少し彼に興味を持っていた。

「ああ。この子は私の友達よ」

「そうか。俺は鋼乃純耶だ。純耶と呼んでくれ」

「タバサ」

「タバサか。よろしく」

「………よろしく」

やはりタバサはあまり喋らないようだ。

これがクーデレか。まあ、まだデレはないが、好感度を上げるとデレが出てくるだろう。

少しタバサがデレるところを見たくなった。

俺達が話し合っていると、ルイズがプルプル震えながらキュルケに怒鳴りだした。

「ツエルプストー！何であんたがここにいるのよ！」

キュルケは燃えるような赤髪をかきあげながら言った。

「あゝら、ヴァリエールじゃない。いたの？気付かなかったわ」

「いたに決まってるでしょう！それより何でここにいるのよ」

「別にいいじゃない。私がここにいても。ねえダーリン」

「俺に振るな。それとダーリン言っな」

「ダーリンは私といたくないの？（うるうる）」

キュルケは目を潤おせながら、すこし上目使いで俺を見てきた。

「……ぐはッ！！な、なんという女だ。普通に可愛いじゃねーか、このヤロー！！！！」

するとそれを見たルイズが怒り出した。

「なに人の使い魔、誘惑してんのよ！」

「べつにいいじゃない。私が誰を誘惑しようとか、関係ないでしょ」

「関係あるわ！私の使い魔ですもの！」

壁や棚に、所狭しと剣や槍が乱雑に並べられ、立派な甲冑が飾ってあった。

店の奥には、パイプをくわえていた五十がらみの親父が、入ってきた俺達を胡散臭げに見てきた。

紐タイ留めに描かれた五芒星に気づくと、パイプをはなし、ドスの利いた声を出した。

「貴族の旦那。うちはまっとうな商売してまさあ。

お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽちもありませんや」

「客よ」ルイズは腕を組んで言った。

「こりやおったまげた。貴族が剣を！おったまげた！」

「使うのはわたしじゃないわ。使い魔よ」

主人は、純耶をジロジロ見ながら聞いた。

「剣をお使いになるのは、この方です？」

ルイズは頷いた。俺は主人の話を聞きながら、デルフを探していた。ルイズは、そんな純耶を無視していった。

「わたしは剣のことなんかわからないから。ジュンヤ！ちょっと来て！」

ルイズが呼んだので俺はとりあえずデルフを探すのを中断し、ルイズのいる所へ向かった。

「どうした？ルイズ」

「あんたって剣の事わかる？」

「まあ、少しくらいならな」

「そう。じゃ自分で探して。買ってあげるから」

「ああ。わかった」

俺はとりあえず主人に何かあるか聞いてみた。

「主人。この店でいい武器は何だ？」

「へい。わかりやした（こりゃ、鴨がネギをしょってきたわい）」

主人はいそいそと奥の倉庫に消えた。

彼は一メートルほどの長さの、細身の剣を持って現れた。

ずいぶん華奢な剣である。片手で扱うような剣で、ハンドガードがついていた。

主人は思い出すように言った。

「そついや、昨今は宮廷の貴族の方々の間で下僕に剣を持たすのはやっておりましてね。

その際にお選びになるのが、このようなレイピアでさあ」

なるほど、きらびやかな模様がついていて、貴族に似合いの綺麗な剣だった。

「貴族の間で、下僕に剣を持たすのがはやってる？」

ルイズは尋ねた。主人はもっともらしく頷いた。

「へえ、なんでも、最近このトリステインの城下町を、盗賊が荒らしてまして……」

「盗賊？」

「そうでき。なんでも『土くれ』のフーケという、

メイジの盗賊が、貴族のお宝を散々盗みまくってる噂で。

貴族の方々は恐れて、下僕にまで剣を持たせる始末で。へえ」

ルイズは盗賊の話には興味がなかったので、じろじろと剣を眺めた。
純耶が選ぶのでルイズは何も言わないが、尋ねてみた。

「どうするの？ ジュンヤ」

「これは細すぎる。主人。もっと大きくて太いのにしてくれ」

「そうですか」

そういうと、主人は奥に消えた。

今度は立派な剣を油布で拭きながら、主人は現れた。

「これなんかいかがです？」

見た目は見事な剣だった。一・五メートルはあろうかという大剣だった。

柄は両手で扱えるように長く、立派な拵えである。所々に宝石が散りばめられ、

鏡のように両刃の刀身が光っている。見るからに切れそうな、頑丈な大剣であった。

「店一番の業物でさ。貴族にお供をさせるなら、このぐらいは腰から下げて欲しいものですな。」

「いっても、こいつを腰から下げるには、よほどの大男でないと無理でさあ。」

「やっそこさんなら、背中にしよわんといかんですな」

俺は近寄って、剣を見つめた。

剣を見つめると、キュルケが近寄ってきた。

「あら、良さそうな剣じゃない。おいくら？」

「何せこいつを鍛えたのは、かの有名なゲルマニアの錬金術師シュペー卿で。」

魔法がかかっているから鉄だって一刀両断でさ。ごらんなさい、ここにその名が

刻まれているでしょう？おやすかあ、ありませんぜ」

主人はもったいぶって柄に刻まれた文字を指差した。

「わたしは貴族よ」

キュルケは胸を両腕で支えながら言った。主人は淡々と値段を告げた。

「エキュー金貨で二千。新金貨なら三千」

「立派な家と、森つきの庭が買えるじゃないの」

横で聞いていたルイズが呆れて言った。俺はあまり相場と貨幣価値がわからないが、多分高いことぐらいはわかった。

「名剣は城に匹敵しますぜ。屋敷で済んだらやすいもんでさ」

「新金貨、百しか持ってきてないわ」

ルイズは貴族なので、買い物の駆け引きがへたくそだった。あっけなく財布の中身をばらしてしまう。主人は話にならない、というように手を振った。

「まともな大剣なら、どんなに安くても相場は二百でさ」

ルイズは顔を赤くした。剣がそんなに高いとは知らなかったのだ。

「あらら、ヴァリエールたらそんな剣も買えないの？ずいぶん貧乏なのね」

キュルケはルイズを挑発するように言った。

それを聞いたルイズは、キュルケを睨みながら言った。

「うつさいわね！そんなに高いと思わなかったのよ！」

「そんなことも知らないの？ねえダーリン。この剣私が買ってあげるわよ」

キュルケは、ルイズの怒鳴り声をさらっと受け流すと、俺の腕にその豊満な胸を押し付けながら言った。

「やめとけ、キュルケ」

「あら、どうして？」

「この剣は見た目は立派だが、ただの儀礼剣だ。すぐに折れるぜ、これ」

そのとき……、乱雑に積み上げられた剣の中から、声がした。低い、男の声だった。

「へえ、わかってんじゃねえか。坊主」

俺と他の三人は声のほうを向いた。主人は、頭を抱えていた。

「おめえ、意外に見所あるじゃねえか。それに結構体も鍛えていそうだ。」

おめえさん、どうだ。俺を振ってみる気はねえか？」

俺は声が聞こえている方に、歩いていった。

すると樽の中に置いてある一本の剣がかたかた震えていた。

というか意外にデルフに好評でおでれーた！（笑）

俺はその剣を掴み、持ち上げてみた。

見た目は錆の浮いたボロボロの剣で、長さはさっきの大剣と一緒に位で、

刀身が細く、薄手の長剣である。あまり見栄えがいいとは思えなかった。

> i 1 5 2 5 1 — 2 0 6 2 <

「インテリジェンスソードか……」

「インテリジェンスソード？」

俺が呟くと、ルイズが当惑した声をあげた。

「そうでさ、若奥さま。意志をもつ魔剣、インテリジェンスソードでさ。

いったい、どこの魔術師が始めたんでしょうかねえ、剣をしゃべらすなんて……」

とにかく、こいつはやたらと口は悪いわ、客にケンカは売るわけで閉口しまして……」

やいデル公！これ以上失礼があったら、貴族に頼んでてめえを溶かしちまうからな！」

「おもしれーやってみろ！どうせこの世にやもう、飽き飽きしてたところさ！」

溶かしてくれるんなら、上等だ！」

「やってやらあー！」

主人が歩き出したので、俺はそれを遮った。

「まあ、まで。お前、なんていうんだ」

俺は知っているが、まだ知り合っていないのでデルフに名前を聞いてみた。

「デルフリンガーさまだ！覚えやがれ！」

「名前だけは、一人前でさ」

「そうか。俺は鋼乃純耶だ。よろしく」

俺はOFFにしていたガンダールブをONにした。
するとデルフは小さな声でしゃべり始めた。
なので俺も小さく喋った。

「おでれーた。あんた、『使い手』か」

「ああ。今代の伝説さ。主人はまだ知らないがな」

「今回の『使い手』は、ずいぶん強そうじゃねえか。まあいい。ため、俺を買え」

「了解した」

俺はルイズに、デルフを買うことを伝えた。

「ルイズ。これにするわ」

ルイズはいやそうな声をあげた。

「え~~~~。そんなのにするの？もつと綺麗でしゃべらないのしなさいよ」

「まあまあ。そついなよ。ちゃんと理由はある」

「理由？」

「時がきたら教えてやるから」

ルイズは一応納得してくれたのか、ぶつくさ文句を言っていたが、主人に尋ねた。

「あれ、おいくら？」

「あれなら、百で結構でさ」

「安いのね」

「こつちにしてみりゃ、厄介払いみたいなもんでさ」

主人は手をひらひらと振りながら言った。

俺は上着の財布を取り出すと、ルイズに渡した。中身をカウンターにぶちまけると、

主人が慎重に枚数を確かめると、頷いた。

「毎度」剣を取り、鞘に収めると俺に渡した。

「どうしても煩いと思ったら、こつやって鞘に入れればおとなしくなりますあ」

俺は頷くと、デルフを肩からしよった。

買ってもらった時、ルイズがキュルケにつつかかていたが、まあいつもの事なのでいいだろう。

「ありがとな、キュルケ。いろいろ買ってもらって」

「そんなのいいのよ。愛しのダーリンのためですもの」

俺はとりあえず露天を周った時に買った物をキュルケに渡した。

「キュルケ。これ」

「なにこれ？」

俺が渡したのは、燃えるように赤いルビーの入った首飾りである。これはキュルケにいろいろ買ってもらったので感謝の気持ちだ。

「感謝の気持ちだ。受け取ってくれ、キュルケ（にこッ）」

「あ、ありがとう／＼／＼／＼／」

キュルケはプレゼントを受け取ると、顔を赤くして俯いてしまった。

あれ？何で顔赤くしてんだ？プレゼントとか結構貰って慣れてそう
なんだけどな……。そんな事を考えてるとルイズが怒鳴ってきた。

「ちょっと！キュルケにはあつて、主人の私には無いって言つの！」

「そんなことはないさ」

俺はルイズのプレゼントをポケットから出すと、
ルイズの後ろに回り、首にかけてあげた。

「え？／／／／／」

「ルイズも剣を買ってくれて、ありがとう。これは感謝の印だ」

俺がルイズに渡したのは、何の鉱石かわからないが、
綺麗なピンク色の宝石が埋め込まれている首飾りだ。

「あ、ありがとう／／／／／」

何故か、ルイズまで顔を赤くして、俯いてしまった。
最近風邪でも流行っているんだろうか……………。

すると今度は後ろから上着の裾を引っ張られた。
振り返ってみると、あまり変わってないが、何となく目を輝かせて
いるタバサがいた。

しかし無言だ。これは俺に期待しているのであろつか……………。

「いや、じつはタバサには……………」

「（しゅん）」

あ、へこんだ……………。
まあ、当然あるんだけどね。

「っと冗談、冗談。そんなに凹むなよ、タバサ」

「／／／／（ぽか、ぽか）」

「いたッ！うおーやめて！ごめんって！」

ちょっといじめ過ぎたようだ。あのでかい杖で殴られてしまった。
俺は急いでプレゼントを取り出した。

「はい、これ。プレゼントだ。これから世話になる」

「・・・・・・・・・・？」

「これは調理本だ。ハシバミ草について書いてある。マルトーさんに料理してもらってくれ」

「（きらきらきら）」

「喜んでもらって、よかった（にっ）」

「・・・・・・・・・・／／／／」

頭を撫でながら、感謝の気持ちを伝えると、何故か少し赤くなって俯いてしまった。

タバサもか、みんな風邪を引くとはこれは急いで帰るか。

「よし。とりあえず暗くなる前に、学院に帰ろうぜ」

「そ、そうね。早く帰らないと暗くなるわ／／／／」

「そうだね。さ、タバサ早く行きましょ／／／」

「・・・・・・・・帰る／／／」

何故かみんな焦っているようだ。

ま、いいか・・・・・・・・。

俺達は暗くなる前に帰るため、ルイズと俺は馬を急がせ、キュルケとタバサはシルフィードに乗って上を飛んでいた。

今夜はフーケ事件がある日だが、俺は吊るされるのか？
俺は少し不安になりながら学院への道を急いだ・・・・・・・・。

ちなみにプレゼントを買った金は、昼間にスツた財布から提供してもらっている。

続く

第8話 デルフ登場!?

挿絵あり(後書き)

今回は結構書きました。

つ、疲れた……。

まだ挿絵はありませんが、絵が出来たらまた入れたいと思います。

次回『第9話 土くれのフーケ!?’』

お楽しみに!!

第9話 土くれのフーケ！？前編

トリステインには『土くれ』の二つ名を持つ、大怪盗土くれのフーケがいる。

『土くれ』の名のとおりフーケは、『土』系統の魔法を得意とするメイジである。

フーケは宝石があれば、どこにも現れる。まさに神出鬼没。それが土くれのフーケなのであった。

そしてフーケの盗み方は、慎重だったり、大胆だったり、その行動にパターン性がない。

トリステインの治安を預かる王室衛士隊の魔法衛士たちも、振り回されているのだった。

しかし盗み方には共通の点があった。

フーケは狙った獲物が隠れたところに忍び込むときには、主に『鍊金』の魔法を使う。

『鍊金』に魔法で壁や扉を粘土や砂に変え、穴をあけて忍び込むのである。

貴族も『固定化』によって対策はとっているが、フーケの『鍊金』は強力で、

大抵の場合は、そのまま砂や粘土に変えられてしまうのだ。

巨大な二つの月が、五階に宝物庫がある魔法学院の本塔の外壁を照らしている。

二つの月の光が、壁に垂直に立った人影が浮かび上がらせていた。

土くれのフーケであつた。

長い、蒼い髪を夜風になびかせ悠然と佇む様に、国中の貴族を恐怖に陥れた怪盗の風格が漂っている。

フーケは足から伝わってくる、壁の感触に舌打ちした。

「さすがは魔法学院本塔ね……。物理衝撃が弱点？こんなに厚かったら、

ちよつとやそつとの魔法じゃどうしようもないじゃないの！」

『土』系統のエキスパートであるフーケにとって壁の厚さを測るのは、そうさでもなかった。

「確かに、『固定化』の魔法以外はかかってないみたいだけど……。

これじゃ私のゴーレムの力でも、壊せそうにないね……………

「

フーケは、腕を組んで悩んだ。

強力な『固定化』の呪文がかかっているため、『鍊金』の呪文で壁に穴をあけるわけにいかない。

「やっとここまで来たの……」

フーケは歯噛みをした。

「かといって、『破壊の杖』を諦めるわけにやあ、いかないね・・・」

フーケの目がきらりと光った。そして腕組みをしたまま、じっと考えていると、こちらに向かって来る気配を感じた。

とんとと壁を蹴り、すぐに地面に飛び降りる。

地面にぶつかる瞬間、小さく『レピテーション』を唱え、回転し勢いを殺し、羽毛のように着地する。

それからすぐに中庭の植え込みに消えた。

[illegible]

side

純耶

やあ、こんばんわ。純耶です。

えっ？いま何をしてるかって？

ふ・ふ・ふ教えて欲しいか？教えてほしいだろう・・・・・・・・。。

いま俺は・・・・・・・・。。、

・・・・・・・・・・ロープで縛られ、吊るされ、空中にぶら下がっている。

ふうー！！！！→、なんでやねん！！！！

ぜんぜん、吊られる要素、無かったちゅうねん！！

なんでこうなった・・・・・・・・orz

何故こうなったのか気になった人は、俺の説明を聞いて欲しい・・・・・・・・。

簡単に説明しよう。

まず俺達はあの後、何とか日が暮れるまでに帰ることが出来た。

帰ってきた俺達は、ルイズの部屋に直行。

部屋に入って休んでいるとキュルケが、

「それにしても、ダーリンがプレゼントをくれるとは思わなかったわ。ありがとね!」と言った。

するとルイズもそれに同意した。まあここまではいいだろう。吊るされる要因は無い。

しかしキュルケがこのあと、爆弾を投下したのだ!!

「この首飾りはダーリンの愛として受け取っておくわ」

ズガッーーーーーッ!!!!!!

といった感じでルイズの感情が爆発した。

「ジュンヤがあんたに愛なんて送るわけないでしょ！」

「あら、嫉妬？女の嫉妬は醜いわよ」

「ななななな、なにいつてんのかしら！？嫉妬？そんなわけないでしょ！」

それを聞いたキュルケはにやりと笑いながら、俺に絡み付いてきた。

「じゃあ、ダーリンは私のものね！ルイズは愛してないんでしょ？」

「あたりまえでしょ！でもジュンヤは私の使い魔よ！あんたなんかにあげないわ！」

「ダーリンは使い魔でも人でしょ？ダーリンの意思を尊重しなくちゃ」

「それじゃあ、ジュンヤにどっちがいいか決めてもらおうじゃないの！」

「それはいいわね。ねえダーリン。ルイズと私どっちをとるの?」

「どっちなのよジュンヤ! さっさと選りなさい!」

ルイズはこっちを上目使いで睨んでくる。

睨んでいるといっても、ルイズの目はすこし弱気になっていて不安の色が漂っている。

ルイズは捨てられそうな子犬のように見えた。正直可愛い……。

たいてはキュルケは強気で負ける事を知らないように見える。こういうことには慣れているのか、幾分か余裕があった。

正直こんなこと言われても、どっちも可愛いので選べない。

「「さあ、どっち!」」

「どつ……ちもと言うのは無しか?」

俺が答えると、ルイズが切れた。

「なによ! どっちもって! どちらかにしなさい!」

「どっちかって言われても、どちらも可愛いのに選べないさ」

俺がそういうと、ルイズの顔が一瞬で赤く茹でダコみたいになった。

「ななな、なにいつてんよ！そんなこと言っても騙されないんだから！」

「そんなこと言っても……」

俺達が行き詰まっていると、キュルケがひらめいた。

「決闘しない？」

「ちょうどいいわ。あんたの事だいつきらいだったのよ」

「あたしもよ。叩きのめしてあげる」

「おいおい。危ないからやめとけ」

俺は呆れながら言った。

しかし二人はすでに俺の話を聞いていない。

「もちろん、魔法ですよ？」

ルイズは唇を噛み締めたが、すぐに頷いた。

「ええ。望むところよ」

「いいの？ゼロのルイズ。魔法で決闘で、大丈夫なの？」

小ばかにした調子で、キュルケが呟く。ルイズは頷く。自信は無いが、

ツエルプストー家の女に魔法で勝負と言われては、引き下がれない。

「もちろんよ！誰が負けるもんですか！」

俺はつい溜め息をはいてしまった。

それで広場に來たが決闘は危ないと言って、このざまだ。

正直言って、わらえん……。

はるか地面の下には、小さくルイズとキュルケの姿が見える。
夜とはいえ、二つの月のおかげで視野は明るい。まあ暗くても見えるが。

塔の屋上には、シルフィードに跨ったタバサの姿が見えた。

[illegible]

キュルケとルイズは、地面に立って純耶を見上げている。

ロープに縛られ、上から吊るされた純耶が、小さく揺れているのが二人の目に見えた。

キュルケが腕を組んで言った。

「いいこと？ヴァリエール。あのロープを切って、ジュンヤを地面に落とした方が勝ちよ。」

勝った方にジュンヤの愛が貰えるわ。いいわね？」

「わかったわ。わ、私は愛はいらないけどね／／／／／」

ルイズは顔を赤くしながら頷いた。
ちなみにキュルケにはジュンヤと呼んでもらう事にした。
さすがにいつまでもダーリンは嫌だ。

「使う魔法は自由。ただし、あたしは後攻。そのぐらいはハンデよ」

「いいわ」

「じゃあ、どうぞ」

ルイズは杖を構えた。屋上のタバサが、俺を吊ったロープを振り始めた。

魔法が使えれば、命中させることは簡単だ。

しかし、命中する、しないの前に、ルイズには問題があった。

ルイズは魔法が使えない。正確には虚無が使えるが、四系統の魔法が使えない。

ルイズは悩んだが、短くルーンを呟く。

失敗したらキュルケに純耶をとられてしまう。べ、べつに愛して欲しいわけじゃなんだからね！

とか考えていると、呪文詠唱が完成する。気合を入れて、杖を振った。

すると、一瞬遅れて、純耶の後ろの壁が爆発した。
爆風で純耶の体が揺れる。

ロープはなんともない。しかし本塔の壁にヒビが入っている。俺は何も言わないが、キュルケは腹を抱えて笑っていた。

「ゼロ！ゼロのルイズ！ロープじゃなくて壁を爆発させてどうするの！器用ね！」

ルイズは無然とした。

「あなたって、どんな魔法を使っても爆発させるんだから！あつはっは！」

ルイズは悔しそうに拳を握り締めると、膝をついた。

「さて、わたしの番ね……………」

キュルケは、狩人の目で純耶を吊るしたロープを見据えた。タバサがロープを揺らしているので、狙いがつけづらい。

それでもキュルケは余裕の笑みを浮かべた。ルーンを短く呟くと、手馴れた仕草で杖を突き出す。『ファイヤーボール』はキュルケの十八番である。

杖の先から、メロンぐらいの火球が現れ、純耶のロープめがけて飛

んだ。

火球はロープに当たると、一瞬で燃やし尽くした。

純耶はロープが切れた瞬間、体のロープを引きちぎり、身をひるがえした。

その下にはタバサのシルフィードがいたので、背中に着地した。

キュルケは勝ち誇って、笑い声をあげた。

「あたしの勝ちね！ヴァリエール！」

ルイズはしょんぼりとして座り込み、地面の草をむしり始めた。

[illegible]

side

フーケは、中庭の植え込みの中から一部始終を見守っていた。ルイズの魔法で、宝物庫の壁にヒビが入ったのを見届ける。

「いったい、あの魔法は何なのだろう？ 唱えた呪文は『ファイヤーボール』だぞ？」

俺は別にルイズを慰め様とは思わない。こういつとき慰めるのは逆効果だ。

そのときである。

背後に巨大な何かの気配を感じて、キュルケと純耶は振り返った。我が目を疑う。

「な、なにこれ！」

キュルケは大きな口をあけた。巨大なゴーレムがこちらに歩いてくるでわないか！

というか俺は最初からフーケがいることは、気がついていた。やっとか、といった感じである。

「きゃああああああ！」

キュルケは悲鳴をあげて逃げ出した。

とりあえず俺はルイズを肩にしょって、キュルケの方に向かった。

俺はキュルケに追いつくと、もう片方の肩にキュルケをしようと俺は逃げた。

一対一だと普通に勝てると思うが、ルイズとキュルケがいると巻き込む可能性があるため、

とりあえず二人を離れたところまで非難させた。

タバサのシルフィードに二人を乗せると、俺はゴーレムの方に向かった。

「ちょっとジュンヤ！どこに行くのよ！」

「少し様子を見てくる。お前達は上空から犯人を見ていてくれ」

「ちよっ「わかった」タバサ！」

俺はタバサの返事を聞くと、ゴーレムの方に向かった。

ゴーレムの方に向かうと、ゴーレムの肩に黒いローブのメイジがいた。

宝物庫の壁は大きな穴が開いている。

ゴーレムは歩き出すと、魔法学院の城壁をひとまたぎで乗り越え、ずしんと地響きを立てて草原を歩いていく。

俺は上空からやってきたシルフィードの背に乗ると、ゴーレムの上空を旋回し始めた。

「あれって宝物庫の壁に穴あけてたよな。泥棒か？ずいぶん派手に盗むんだな……」

草原に真ん中を歩いていた巨大なゴーレムは、突然ぐしゃと崩れ落ちた。

巨大なゴーレムは大きな土の山になった。

地面に降りたが、そこには月明かりに照らされたこんもりと小山のような盛り上がった土山以外、何もない。

そして、肩に乗った黒ローブのメイジの姿は、消えうせていた。

続く

第9話 土くれのフーケ！？前編（後書き）

今回は前編です。

次で1章は終わります。

次回『第10話 土くれのフーケ！？後編』

楽しみに！！

第10話 土くれのフーケ！？後編 挿絵あり（前書き）

内容が矛盾していたので、編集しました。どうもすいませんでした

第10話 土くれのフーケ!?後編 挿絵あり

- - - - - side 純耶

翌朝・・・。。。

トリステイン魔法学院では、昨夜からの蜂の巣をつついた騒ぎが続いていた。

何せ、秘宝の『破壊の杖』が盗まれたのである。

それも、巨大なゴーレムが、壁を破壊するといった大胆な方法で。宝物庫には、学院中の教師が集まり、壁にあいた大きな穴を見て、口をあんぐりあけていた。

ちなみに、昨日、犯行現場にいた俺達四人も、この部屋に集められている。

壁には、『土くれ』のフーケの犯行声明が刻まれていた。

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

教師達は、口々に好き勝手な事を喚いている。

「土くれのフーケ！貴族たちの財宝を荒らしまくっているという盗賊か！」

魔法学院にまで手を出しおって！随分とナメられたもんじゃないか！」

「衛兵はいつたい何をしていたんだね？」

「衛兵などあてにならん！所詮は平民ではないか！それより当直の貴族は誰だったんだね！」

ミセス・シュヴルーズは震え上がった。

自分は昨晚の当直をサボって、部屋でぐうぐう寝ていたのだ。まさか魔法学院を襲う盗賊がいるとは、夢にも思わなかったのだ。

「ミセス・シュヴルーズ！当直はあなたなのではありませんか！」

教師の一人が、さっそくミセス・シュヴルーズを追求し始めた。オスマンが来る前に責任の所在を明らかにしておこうというのだろう。

確かあれはギトーという教師だったはずだ。さすがギトー！最低だな。

ミセス・シュヴルーズはボロボロと泣き出してしまった。

「も、申し訳ありません……」

「泣いたって、お宝は戻ってこないのですぞ！それともあなた、『破壊の杖』の弁償できるのですかな！」

「わたくし、家を建てたばかりで……」

ミセス・シュヴルーズは、よよと床に崩れ落ちた。

ギトーは凄いネチツこいな。はつきり言つてめんどくさい。すると、そこにオスマンが現れた。

「これこれ。女性を苛めるものではない」

ギトーはオスマンに訴えた。

「しかしですな！オールド・オスマン！ミセス・シュヴルーズは当直なのに、

ぐうぐう自室で寝ていたのですぞ！責任は彼女にあります！」

オスマンは長い口ひげをこすりながら、口から唾を飛ばして興奮するギトーを見つめた。

「ミスタ……、なんだっけ？」

「ギトーです！お忘れですか！」

「そうそう。ギトー君。そんな名前じゃったな。君は怒りっぽくて

いかん。

さて、この中でまともに当直をしたことのある教師は何人いるかな？」

オスマンは、辺りを見回した。

教師たちはお互い、顔を見合わせると、恥ずかしそうに顔を伏せた。名乗り出るものはいなかった。

「さて、これが現実じゃ。責任があるとするなら、我々全員じゃ。

この中の誰もが……、

もちろん私も含めてじゃが……、まさかこの魔法学院が賊に襲われるなど、

夢にも思っていなかった。ほとんどがメイジじゃからな。誰も好き好んで、

虎穴に入るのかっちゅうわけじゃ。しかし、それは間違いじゃった」

オスマンは、壁にぼっかりあいた穴を見つめた。

「このとおり、賊は大胆にも忍び込み、『破壊の杖』を奪っていきおった。

つまり、我々は油断しておったのじゃ。責任があるとするなら、我々全員にあるといわねばなるまい」

ミセス・シュヴルーズは、感動してオスマンに抱きついた。

「おお、オールド・オスマン、あなたの慈悲のお心に感謝いたします！

わたくしはあなたをこれから父と呼ぶことにいたします！」

オスマンはそんなシュヴルーズの尻を撫でた。

「ええのじゃ。ええのよ。ミセス……」

「わたくしのお尻でよかったですら！そりやもう！いくらでも！はい！」

オスマンはこほんと咳をした。誰も突っ込んでくれない。

場を和ませるつもりで尻を撫でたのである。

皆、一様に真剣な目でオスマンの言葉を待っていた。いや、俺だけは笑いを我慢していた。

「で、犯行の現場を見ていたのは誰だね？」

オスマンは尋ねた。

「この三人です」

コルベールがさっと進み出て、自分の後ろに控えていた三人を指差した。

ルイズにキュルケにタバサの三人である。俺は使い魔なので数に入っていない。

「ふむ……、君たちか」

オスマンは、興味深そうにこちらを見つめてきた。
少しオスマンの視線がウザイので睨み返してやった。

「詳しく説明したまえ」

ルイズが進み出て、見たままを述べた。

「あの、大きなゴーレムが現れて、ここの壁を破壊したんです。
肩に乗ってた黒いメイジがこの宝物庫の中から何かを……」

その『破壊の杖』だと思えますけど……、盗み出した後、
またゴーレムの肩に乗りました。

ゴーレムは城壁を越えて歩き出して……、最後には崩れて土になっちゃいました」

「それで？」

「後には、土しかありませんでした。
肩に乗ってた黒いローブを着たメイジは、影も形もなくなってました」

「ふむ……」

オスマンはひげを撫でた。

「後を追おうにも、手がかりナシというわけか……」

それからオスマンは、気づいたようにコルベールに尋ねた。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたね？」

「それがその……、朝から姿が見えませんが」

「この非常時に、どこに行ったのじゃ」

「どこなんですよっ？」

そんな風に噂していると、ロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル！どこに行ってたんですか！大変ですぞ！事件ですぞ！」

興奮した調子で、コルベールがまくし立てる。

しかし、ロングビルは落ち着き払った態度で、オスマンに告げた。

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの」

「調査？」

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。

そして、宝物庫はこのとおり。すぐに壁のフーケのサインを見つけたので、

国中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査をいたしました」

「仕事が早い。ミス・ロングビル」

コルベールが慌てた調子で促した。

「で、結果？」

「はい。フーケの居所がわかりました」

「な、なんですと！」

コルベールが、素っ頓狂な声をあげた。

そりゃあフーケは自分なのだから、居所ぐらいわかるだろう。それより、自分で自分を大怪盗って言うのって、恥ずかしくないのだろうか。

「誰に聞いたんじゃね？ミス・ロングビル」

「はい。近所の農民に聞き込んだところ、近くの森の廃墟に入っていた黒ずくめのローブの男を見たそうです。」

おそらく彼はフーケで、廃墟はフーケの隠れ家ではないかと」

ルイズが叫んだ。

「黒ずくめのローブ？それはフーケです！間違いありません！」

オスマンは、目を鋭くして、ロングビルに尋ねた。

「そこは近いのかね？」

「はい。徒歩で半日。馬で四時間といったところでしょいか」

「すぐに王宮に報告しましょう！王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けてもらわなくては！」

コルベールが叫んだ。

オスマンは首を振ると、年寄りとは思えない迫力で、目をむいて怒鳴った。

「ばかもの！王室なんぞに知らせている間にフーケは逃げてしまっ
わ！」

その上……、身にかかる火の粉を己で払えぬようで、なにが
貴族じゃ！

魔法学院の宝が盗まれた！これは魔法学院の問題じゃ！当然我ら
で解決する」

フーケ、この部屋にいますけどね（笑）www
まあ、皆知らないから、しょうがないんだけど。

ロングビルのほうを見てみると、微笑んでいた。そりゃそうだろう。そうじゃないと『破壊の杖』の使い方がわかんないんだからな。

まあどっちみち、俺が行かないと使い方なんて、この世界の人間にわかるはずないけどな！

オスマンは咳払いをすると、有志を募った。

「では、搜索隊を編成する。我と思う物は、杖を掲げよ」

しかし誰も杖を掲げない。困ったように、顔を見合すだけだ。なんというヘタレ教師共だろう。ハゲが行けば、フーケぐらい勝てるだろうに。

「おらんのか？おや？どうした！フーケを捕まえて、名をあげようと思う貴族はおらんのか！」

ルイズは俯いていたが、それからずっと杖を顔の前に掲げた。

「ミス・ヴァリエール！」

シュヴルーズが、驚いた声をあげた。

「何をしているのです！あなたは生徒ではありませんか！ここは教師に任せて……」

「誰も掲げないじゃないですか」

ルイズはきつと唇を強く結んで言い放った。
最もである。そんなこと言うなら、早く杖を掲げてみる。

ルイズが杖を掲げたのを見て、しぶしぶキュルケも杖を掲げた。
コルベールが驚いた声をあげた。

「ツエルプストー！君は生徒じゃないか！」

キュルケはつまらなそうに言った。

「ふん。ヴァリエールには負けられませんわ」

キュルケが掲げたのを見て、タバサも掲げた。

「タバサ。あんたはいいのよ。関係ないんだから」

キュルケがそう言ったら、タバサは短く答えた。

「心配」

キュルケは感動した面持ちで、タバサを見つめた。
ルイズも唇を噛み締めて、お礼を言った。

「ありがとう……。タバサ……」

そんな三人の様子を見て、オスマンは笑った。

「そうか。では、頼むでしょうか」

「オールド・オスマン！わたしは反対です！生徒たちをそんな危険にさらすわけには！」

「では、君が行くかね？ミセス・シュヴルーズ」

「い、いえ……。わたしは体調がすぐれませんので……」

「彼女たちは、敵を見ている。その上、ミス・タバサは

若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いているが？」

タバサは返事もせず、ぼけっと突っ立っている。教師たちは驚いたようにタバサを見つめた。

「本当なの？タバサ」

キュルケも驚いている。それもそうだろう。

なんといっても、『シュヴァリエ』は爵位としては最下級だが、タバサの年でそれを与えられるというのが驚きである。

それにシュヴァリエは純粋に業績に対して与えられる爵位……。実力の称号なのだ。

宝物庫の中がざわめいた。オスマンはそれからキュルケを見つめた。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、

彼女自身の炎の魔法も、かなり強力と聞いているが？」

キュルケは得意そうに、髪をかきあげた。

それからルイズは自分の番だとばかりに可愛らしく胸を張った。

オスマンは困った。誉めるところがなかなか見つからないのである。こほん、と咳をすると、オスマンは目を逸らした。

目を逸らしたらダメだろう、と俺は心の中で思った。まあ、俺でも目を逸らすと思うが……。

「その……、ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で、

その、うむ、なんだ、将来有望なメイジと聞いているが？しかもその使い魔は！」

誤魔化しかたが、ひどい。

それでもルイズは喜んでいた。おい！それでいいのか、ルイズ！

それからオスマンは俺のほうを熱っばい目で見つめてきた。

「平民ながらあのグラモン元帥の息子である、

ギーシュ・ド・グラモンと決闘して勝ったという噂だが」

オスマンは思った。彼が、本当に、本当に伝説の『ガンダールヴ』なら……。

土くれのフーケに、遅れを取ることはあるまい。

それに遠見の鏡で見た彼の動きは、常人の動きを逸脱していた。あれなら王室の魔法衛士でも勝てるものはいまい。

コルベールは興奮した調子で、後を引き取った。

「そうですぞ！なにせ、彼はガンダー……」

オスマンは慌ててコルベールの口を押さえていた。
あぶねー！。コルベール、ドジすぎるぞ！お前もうしゃべんな！

「むぐ！はあ！いえ、なんでもありません！はい！」

教師たちはすっかり黙ってしまった。オスマンは、威厳のある声で言った。

「この三人に勝てるという者がいるのなら、前に一步出たまえ」

誰もいなかった。オスマンは、俺を含む四人に向き直った。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

ルイズ、キュルケ、タバサの三人は、真顔になって直立すると、「杖にかけて！」と同時に唱和した。

それからスカートの裾をつまみ、恭しく礼をした。

俺はと言うと三人が礼をする時に合わせ、手を胸のところにおいて礼をした。

「では、馬車を用意しよう。それで向かうのじゃ。

魔法は目的地につくまで温存したまえ。ミス・ロングビル！」

「はい。オールド・オスマン」

「彼女たちを手伝ってやってくれ」

ロングビルは頭を下げた。

「もとよりそのつもりですわ」

さあ、どう料理してやろうか。ミス・ロングビル……。

[illegible]

四人はロングビルを案内役に、早速出発した。

馬車といっても、屋根ナシの荷車のような馬車である。

俺的には、この馬車の方が太陽光を浴びれて、気持ちいいのでよかったです。

まあ、本当の理由は、この方が襲われても、すぐに外へ飛び出せるからだけど。

ロングビルは御者をやっていて、俺達は荷車に乗っている。

俺の右にキュルケ、左にルイズ、何故か膝の上にタバサがいる。
キュルケとルイズは俺を取り合って、俺を挟んで言い合っていた。
とりあえず俺は膝の上にいるタバサに疑問をぶつけてみた。

「なあ、タバサ」

「なに？」

「なんで膝の上なんだ？」

「……特に理由はない」

「そうか……」

すると、とりあえず言い合いは終わったのか、
キュルケが、黙々と手綱を握るロングビルに話しかけた。

「ねえ、ミス・ロングビル……、手綱なんて付き人にやらせ
ばいいじゃないですか」

ロングビルは、にっこりと笑った。

「いいのです。わたしは、貴族の名をなくした者ですから」

キュルケはきよとした。

「だって、貴方はオールド・オスマンの秘書なのでしょ」

「ええ、でも、オスマン氏は貴族や平民だということに、あまり拘らないお方です」

「差しつかねなかつたら、事情をお聞かせ願いたいわ」

ロングビルは優しい微笑みを浮かべた。まあ言えないだろうし、言いたくないだろう。

「いいじゃないの。教えてくださいな」

キュルケは俺の腕から離れると、ロングビルににじり寄った。するとルイズがその肩を掴んだ。キュルケが振り返ると、ルイズを睨みつけた。

「なによ。ヴァリエール」

「よしなさいよ。昔のことを根掘り葉掘り聞くなんて」

それからキュルケとルイズはぎゃいぎゃい騒ぎ始めた。

二人が騒いでる間も、膝の上ではタバサは本を読んでいる。

まあここからは原作どおりなので飛ばさしてもらおう。

俺は二人を静めるため、タバサに膝から退いてもらい、いまだに騒いでいる二人に話しかけた。

「二人とも、静かにしとけ。近くにフーケがいたらどうする」

「そうね。わかったわ、ジュンヤ。まあ、せいぜい怪我しないことね。ゼロのルイズ」

キュルケはそういうと、手をひらひらと振ってみせた。
ルイズはぐつと唇を噛んでいる。

最初の位置に戻ると俺達は、そのまま森に向けて馬車を走らせた。

なんか、平和だな……。俺はそうとしか思えなかった。

くと、

何故か二人とも俺の上着の裾を持っていた。
女の子に頼られるのはいいが、めっちゃ歩きにくかった。

一行は開けた場所に出た。

森の空き地といった感じで、真ん中に廃屋があった。
五人は小屋の中から見えないように、森の茂みに身を隠したまま廃屋を見つめた。

「わたくしの聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

ほうほう、フーケはあの中にいるのかー（笑）www

誰の情報だか知らないが、とんだガセネタだな。
だって目の前にフーケいるし。

まあ、とりあえず皆で相談した結果、
中の様子を確認するため一番早いものが偵察兼囷をすることになった。

「で、偵察兼囷は誰がやるんだ？」

俺が聞くと、タバサが短く答えた。

「すばしっこいの」

すると全員が一斉に俺を見つめてきた。
やっぱり俺か…………。

「わかったよ…………」

俺は肩にかけてあったデルフを鞘から抜いた。すると左手のルーンが光りだした

「おっと、とうとう出番か！相棒！」

「そうだ。偵察だから黙つとけよ」

俺はデルフに短く返すと、廃屋へと目にも止まらぬスピードで近づいた。

周りから見ると、瞬きした瞬間には廃屋の近くにいたように見えただろう。

窓から中を覗くが、中に人の気配はしなかった。まあ、いるはずないけどな。

俺は確認すると、皆を呼ぶため頭の上で、腕を交差させた。

隠れていた四人はおそろおそろ近寄ってきた。

「誰もいなかった」

するとタバサは、ドアに向けて杖を振った。

「ワナはないみたい」そう呟いて、ドアをあけ、中に入っていく。キュルケと俺も後に続いた。

ルイズは外で見張りをすると、後に残った。

ロングビルは辺りを偵察してきましたと言って、森の中に消えた。

[illegible]

グビル

いま私はあのガキどもから偵察と言って離れ、森の中から廃屋を見ている。

まさか教師じゃなくて、あのガキどもが来るとは思わなかった。

『破壊の杖』の使い方がわからないから、教師を連れて来ようと思
っていたのに、

こりゃ大誤算だよ。こまつたねえ。

まあ、ここまで言ったらわかんと思うけど、私の正体は『土くれ』のフーケ！

トリスティン中の貴族どもを恐怖に陥れた張本人さ！

にしても魔法学院に秘書として入って、あのくそジジイのセクハラに耐えて、

苦勞して盗んだ『破壊の杖』が使えないんだったら、いままでの苦勞が水の泡だよ。

とりあえず搜索隊として教師を連れてくる作戦は思いついたのはいいけど、

まさかガキが来るとは、どうしようかね。

まあそろそろガキどもが『破壊の杖』を見つけるころだねえ。
じゃあゴーレムで襲うとしようかねえ。

そう思っただけで私は呪文を詠唱し始めた。
すると私の首に冷たい刃物のような物が当てられた。

「その杖を置いてもらおうか。『土くれ』のフーケさん」

男の声だった。しかも私の正体を知っている！？
私はその名を言われた瞬間、前に飛びのき、後ろの人物を見るため、振り返った。

そこには廃屋に残ったはずの、あの男がいた……。

[illegible]

二
号

廃屋に近づくとき、一瞬で影分身した俺は廃屋の裏の森へ隠れ、ロングビル、というかフーケが来るのを待っていた。

何故俺が影分身出来るかと言うと、いま俺の首には封印の首飾りがかかっておらず、

一時的に封印を解いているからである。

俺が待っているとフーケが森の中に入ってきて、すぐ身を隠した。フーケはぶつぶつ何か言っていたが、やがて廃屋を見据えると、杖を構え、呪文を詠唱し始めた。

俺は詠唱を完成させる前に、フーケの後ろに移動すると、首にデルフを添えた。

> i 1 5 3 0 4 — 2 0 2 6 <

「その杖を置いてもらおうか。『土くれ』のフーケさん」

俺がそうフーケに言うと、フーケは前に飛びぬくと、こちらに振り返った。

こちらを向いたフーケの顔は驚愕に染まっていた。

「! ? あんたは」

「どうしたんだ? フーケさんよ」

「 なんのことです。私はロングビルですが? 」

フーケは少し動揺していたが、すぐに冷静になって微笑みながら言ってきた。

しかしもう遅い。誤魔化そうが俺にはわかっていたのだ。無理に誤魔化そうとも無駄である。

「無駄だフーケ。あんたの正体はわかっていた」

「へえ」。その証拠はなんだい？」

フーケは諦めたのか、素を出して聞いてきた。

「あんた。今朝に調査を始めたって言ったよな？そんなの無理だろ。馬で四時間だ。行き帰りで八時間だぜ？どうやったらそんなところまでいけるんだ？」

夜から始めないと、学院には帰って来れないんだよ！土くれのフーケ！」

俺がそう言つとフーケは、はっとした顔になった。

「よくわかったじゃないか、坊や。それでどうするんだい？」

「いや。別にどうもしないさ」

「・・・・・・は？」

俺がフーケの疑問に答えると、フーケはきよとした顔になった。

「ただ、あんたにはやってもらうことがある」

「大怪盗に命令だなんて傲慢な坊やだねえ」

「しらんな。やってもらうことだが、とりあえずトリステインにある酒場にでもいろ」

「はあ？なんでだい」

「たぶんあんたのところに、仮面をした黒ずくめのメイジが来るはずだ。」

あんたはそいつに着いていつて、スパイをしてくれ。もし殺されそうだったら

勝手に逃げてくれてもいい。ただし、一度俺のところへ来てくれ。以上だ」

俺がそう言うతోフーケは少し考え、こちらに向かって言った。

「まあいいだろう。捕まりたくはないからねえ。でも、その組織の名はなんていうんだい？」

名前も知らない組織なんか、行きたきやないよ。わたしは。」

「実はフーケと会ってしまい、そのまま戦かって、フーケは森の中に倒れています……」

「フーケがいたんですか!？」

「ええ。誰か見に行ってください。倒れているはずですよ」

「じゃあ、俺が見に行こう」

フーケの傷は俺の二号くんがつけた傷だ。

ちなみに、実は服しか切れていないので、実際は無傷である。

そして、倒れているフーケは俺の二号くんが変化したもので、牢屋に入ったら消えることになっている。

偽フーケをおぶって帰ってきた俺はフーケと目があつたので、俺は三人に気づかれないように、ウィンクしてやった。

するとフーケは頬を赤らめ、俯いてしまった。

????どうしたのだろうか………。

とりあえず俺は騒いでる女子どもに話しかけた。

「とりあえず、この事をオスマン氏に報告しよう。急いで変えるぞ！」

俺の話を聞いた女子は急いでかえる準備をした。

俺は一応、怪我をした風に見せているので、フーケをおぶって馬車の方に走った。

「！？きゃッ」

「きゃって、可愛いこというな、フーケは……」

俺が小さな声で言うと、フーケは顔を赤らめ、言い返してきた。

「か、可愛いって、変なこと言うんじゃないよ！／＼／＼／」

「ぐはッ！な、殴らんでも……」

まさか後頭部を殴られるとは……。

とりあえず俺は、向こうの方で待っているルイズたちの所へと急いだ。

「はあ、また秘書をどこかで探さなきゃいかんのお」

「ところでミス・ロングビルはどこで採用したの？」

「街の居酒屋じゃ。私は客で、彼女は給仕をしておったのだが、
つついこの手がお尻を撫でてしまつてのお」

「で？」

コルベールは促した。オスマンは照れたように告白した。

「おほん。それでも怒らないので、秘書にならないかと、言つてしまつた」

「なんで？」

ほんとに理解できないといった口調でコルベールが尋ねた。

「カァーッ！」

オスマンは年寄りとは思えない迫力で怒鳴った。

それからオスマンは、こほんと咳をして、真顔になった。

「オマケに魔法も使えるというもんでな」

「死んだほうがいいのでは？」

コルベールはぼそつと言った。

オスマンは、軽く咳払いをすると、コルベールに向き直り重々しい口調で言った。

「居酒屋でくつろぐ私の前に何度もやってきて、愛想よく酒を勧める。」

魔法学院長は男前で痺れます、何度も媚を売り売り言いおって・
・・・

終いにや尻を撫でて怒らない。惚れてる？とか思っじやる？な
あ？ねえ？」

コルベールはロングビルにそんな感じに言われたことがあったので、
オスマンに合わせた。

「そ、そうですね！美人はただそれだけで、いけない魔法使いです
な！」

「そのとおりじゃ！君はうまいこと言うな！コルベール君！」

俺を含め四人は呆れて、そんな二人の様子を見ていた。

生徒達の冷たい視線に気づき、オスマンは照れたように咳払いする
と、

厳しい顔つきにしてみせた。

「さてと、君たちはよくぞフーケを捕まえ、『破壊の杖』を取り返
してくれた」

誇らしげに、俺を除いた三人が礼をした。

「フーケは城の衛士に引き渡した。『破壊の杖』は、無事に宝物庫
に収まった。一件落着じゃ」

オスマンは一人づつ頭を撫でた。

「君たちの、『シュヴァリエ』の爵位申請を、宮廷に出しておいた。
追って沙汰があるじやろう。

といっても、ミス・タバサはすでに『シュヴァリエ』の爵位を持
っているから精霊勲章の授与を
申請しておいた」

三人の顔が、ぱあつと輝いた。

「本当ですか？」

キュルケが、驚いた声で言った。

「ほんとじゃ。いいのじゃ、君たちは、そのぐらいのことをしたんじゃないからな」

ルイズはさっきからぼけーと突っ立っている純耶を見つめた。

「・・・オールド・オスマン。ジュンヤには、何もないんですか？」

「残念ながら、彼は貴族ではない」

なので俺は人差し指と親指をくっ付けながら言った。

「俺はこれだけでいいですよ」

「そうじゃの。わしの貯金から出そう」

オスマンは、ぽんぽんと手を打った。

「さてと、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。このとおり、『破壊の杖』も戻ってきたし、予定どおり執り行っ」

キュルケの顔がぱつと輝いた。

「そうでしたわ！フーケの騒ぎで忘れておりました！」

「今日の舞踏会の主役は君たちじゃ。用意していきたまえ。せいぜい、着飾るのじゃぞ」

三人は礼をするとドアに向かった。

ルイズはチラッと俺のほうを見つめてきた。

「先に行ってくれ」

ルイズは心配そうに見つめてきたが、頷いて部屋を出て行った。オスマンは俺に向き直った。

「なにか、聞きたいことがおありのようじゃな」

俺は頷いた。

「言ってごらんさい。できるだけ力になろう。
君に爵位は授けることはできんが、報酬にくわえ、せめてものお
礼じゃ」

それからオスマンは、コルベールに退出を促した。
わくわくしながら純耶の話を待っていたコルベールは、しぶしぶ部
屋を出て行った。

コルベールが出て行ったあと、俺は口を開いた。

「あの『破壊の杖』は、俺が元いた世界の兵器だ」

オスマンの目が光った。

「ふむ、元いた世界とは？」

「俺は、この世界の人間ではない」

「本当かね？」

「本当だ。俺はルイズの『召喚』によって、こちらの世界にやってきた」

「なるほど、そうじゃったか……」

オスマンは目を細めた。

「あの『破壊の杖』は、俺たちの世界の武器だ。あれを持ってきた奴は誰なんだ？」

俺は知っているが面倒なので知らない事にして話を進めた。
するとオスマンは、溜め息をついた。

「あれを私にくれたのは、私の命の恩人じゃ」

「ほう！その人はどうなったんです？」

「わしを助けた後、死んでしまった。三十年も前の事じゃ」

「な、なんだって——！（笑）」

ここからはダイジェストで送ろう（べ、別に作者が面倒になったわけじゃないんだからね！）

オスマン、三十年前ワイバーンに襲われる。

↓『破壊の杖』の持ち主登場！

↓『破壊の杖』でワイバーンを倒す

↓しかし怪我をしていた男は看護の甲斐なく死亡。

↓その後使った一本を彼と一緒に墓へ埋める。

↓もう一本を『破壊の杖』と名づけ、宝物庫へしまう。

ダイジェスト終了

オスマンは遠い目になった。

「彼はベットの上で、死ぬまで『ここはどこだ。元の世界に帰りたい』と言っておったよ。

きつと、彼は君と同じ世界からきたんじゃないかな」

「そうですか……」

言っておくが俺は元の世界に戻るつもりはないし、帰ったところで俺の居場所はないだろう。

なんせ死んでからこつちの世界に来たんだ。まあ、違う地球かもしれないが……。

するとオスマンは、俺の左手を掴んだ。

「おぬしのこのルーン……………」

「ガンダールヴ。あらゆる武器や兵器を自在に扱える使い魔……………」

「！？なんじゃ。知っておったのか……………」

「ええ。いろいろあるんでね……………」

オスマンなら言ってもいいが、説明は面倒なので適当に誤魔化した。

「ふむ……………。まあそのことはいいじやろつ。それで報酬の事じやが……………」

その後俺とオスマンは報酬のことで舞踏会が始まるまで話しあった。

俺はバルコニーの枠にもたれ、華やかな会場を見ていた。中では生徒や教師たちが、料理が盛られたテーブルの周りで歓談している。

「相棒、さっきから飲みすぎじゃねえのか」

「心配すんな。俺はめっぽう酒に強いんだ」

まあ別に困ることはないのです、よかったです。

つかじゃねえか」

タバサはさつきからテーブルにくっ付いて、ハシバミ草のサラダばかり食べている。

キュルケの周りには、ダンスの誘いをする男子で賑わっている。大変なこった。

ちなみに俺にも何人か女の子からお誘いがあつたが、面倒なので丁重に断らせてもらった。

やはり男子は顔なのだろう。イケメン万歳！

するとホールの壮麗な扉が開き、ルイズが姿が現した。門に控えた呼び出しの衛士が、ルイズの到着を告げた。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢の

おな~~~~~~~~り~~~~~~~~！」

主役が全員揃ったこと確認した楽士たちが、小さく、流れるように音楽を奏で始めた。

ルイズの周りには、その姿と美貌に驚いた男たちが群がり、さかんにダンスを申し込んでいた。なんて馬鹿な男たちであろう。いままで気づかなかったなんて、目ん玉腐ってたんじゃないか？

ホールでは、貴族たちが優雅にダンスを踊り始めた。

しかしルイズは男達の誘いを全部断ると、バルコニーにいた俺に気づき、近寄ってきた。

ルイズは俺の目の前に立つと、腰に手をやって、首をかしげた。

「楽しんでるみたいね」

「まあな。料理はうまいから、ある程度は楽しませてもらっている」

デルフはルイズに気づき、「おお、馬子にも衣装じゃねえか」と言った。

「うるさいわね」

ルイズはデルフを睨むと、腕を組んで首をかしげた。

「まあ、実際綺麗だと思うぜ。俺は」

「そ、そう？ありがと……／＼／＼」

俺がそう言つと、顔を赤くして俯いた。
やっぱ可愛いな、ルイズは……。

「それで踊らないのか？」

「相手がいないのよ」

ルイズは手を広げた。

「いっぱい誘われていなかったか？」

俺はそう言ったが、ルイズは答えず、すつと手を差し伸べた。

「踊ってあげても、よくつてよ」

目を逸らし、ルイズはちょっと照れたように言った。

「踊ってくださいじゃねえのか（素直じゃねえな）」

ルイズはドレスの裾を恭しく両手で持ち上げると、膝を曲げて俺に一礼した。

「わたくしと一曲踊ってくださいませんか。ジェントルマン」

そう言って顔を赤らめるルイズは可愛かった。

「よろこんで」

俺はそう言つとルイズの手を取って、ホールへと向かった。

俺はダンスは踊ったことはなかったが、人間離れした動体視力によつて、

ルイズのダンスを真似て踊った。最初はぎこちなかったが、徐々によくなっていった。

今日ほど自分の能力に、感謝した日はないだろう……。

踊っていると、突然ルイズが話しかけてきた。

「ねえ、ジュンヤ。信じてあげるわ。あなたが異世界から来たってこと」

「なんだ。まだ信じてなかったのか」

「まったく言うわけじゃないけど、半信半疑だったわ」

ルイズは軽やかに、優雅にステップを踏みながら、そう呟いた。

「あの『破壊の杖』……。あんたの世界の武器なんでしょう。
オールド・オスマンに聞いたわ」

そう破壊の杖のことはオスマンから、ルイズへ話してもらった。
いつまでもこのままだと面倒くさいので、ぶっちゃけた。

それからルイズは、少し俯いた。

「ねえ、帰りたい？」

「いや。別にあっちの世界に未練があるわけじゃねえからな」

そう……、と呟いて、ルイズはしばらく無言で踊り始めた。
それからルイズはちよつと頬を赤らめると、俺の顔から目を逸らした。

そして、思いきったように口を開いた。

「ありがとう」

なんのことだろう？俺は正直何の事に感謝を述べたのかわからなか

った。

「その……、いままで短い間だけど、いろいろ助けてくれたじゃない」

「気にすんな。当然じゃねえか」

「どうして？」

「俺はルイズの使い魔だぜ！」

俺はそう言って、ルイズに笑いかけた。

そんな様子をバルコニーから見たデルフは、こそつと呟いた。

「おでれーた！」

二つの月がホールに月明かりを送り、ロウソクと絡んで幻想的な雰囲気をつくりあげている。

「相棒！てーしたもんだ！」

踊る相棒と主人を見つめながら、デルフは、おでれーた！と繰り返した。

「主人のダンスの相手をつとめる使い魔なんて、初めて見たぜ！」

続く

第10話 土くれのフーケ!?後編 挿絵あり(後書き)

けっこう長くなっていしまいました。

つ、疲れた……。

とうとう今回で一章は終わりです。

次回からはアルビオン編をお送りしたいと思います。

次回『第11話 陰謀と王女!?』

お楽しみに!!

第11話 陰謀と王女！？（前書き）

少し過激になったかも。と言っても、キス程度ですが……

アルビオン編からはどんどん原作ブレイクしたいと

思っていますので楽しみに！

では、ご覧ください……………

第11話 陰謀と王女！？

- - - - - s i d e フ
イ
ケモといマチルダ

いま私はトリステインにある某酒場にいる。

それもあの男、ジュンヤにレコン・キスタとかいう組織のスパイをするためだ。

最初スパイをしると言われたときは、驚いたがスパイは私にぴったりの仕事だと思う。

なんせあのトリステイン魔法学院にも秘書として潜りこめたのだ。たかが一組織なんかに、わたしが見つかるとは思えない。

ジュンヤは仮面の男が私を勧誘するため、私に接触してくるとか言っていたが、

なかなか仮面の男は現れない……。いつ来るのだろうか。

私が酒を飲みながらそう考えていると、違和感に気づいた。

いつも喧騒としている酒場が、いつのまにか静まっているのだ。

私が振り返ると、店内にいた客達が眠っていた。

こんなことが出来るのは、魔法しかない。たぶん効果からして『スリープ・クラウド』。

すると店の扉から、長身の黒マントをまとった人物が現れた。

白い仮面に覆われて顔が見えないが、マントの中から長い魔法の杖が突き出ている。

どうやらメイジのようだ。性別がわからないが、あいつは男と言っていたし、男なんだろう。多分こいつなんだろうが、油断は禁物。私を狙う刺客かもしれない。

これは流石にあやしいねえ、と私が考えていると黒マントの男が話しかけてきた。

「『土くれ』だな？」

「誰がつけたかは知らないけど、確かにそう呼ばれているわ」

すると男は両手を広げた。手を動かした瞬間、杖に手をかけたが、男は手を広げたまま動かない。たぶん敵意のないことを、私に示したのであろう。

「話をしにきた」

「話？」

わたしは、怪訝な声で聞き返した。たぶん組織への勧誘、なのだろうが知らないフリをした。

「話なんてする必要があるのかい？」

「聞いてもらわないと困るのだよ。マチルダ・オブ・サウスゴータ」

その名を聞いた瞬間、私の顔は蒼白になった。

その名は、かつて捨てた、いや、捨てることを強いられた貴族の名であつた。

その名を知るものは、この世にいないはずだ。

「あんた、何者？」

平静を装つたが無理だつた。震える声で尋ねてしまった。

男はその問いに答えずに、笑つて言った

「再びアルビオンに仕える気はないかね？マチルダ」

「まさか！父を殺し、家名を奪つた王家に仕える気なんかさらさらないわ！」

私はスパイの事を忘れ、怒鳴つた。

「勘違いするな。何もアルビオンの王家に仕えろと言っているわけではない。」

アルビオンの王家は倒れる。近いうちにね」

「どういうこと？」

「革命さ。無能な王家はつぶれる。そして、我々有能な貴族が政を行うのだ」

この組織は王家をつぶすきなのか、なのならばアルビオンは戦争になるだろう。

だとしたら、あの森にいる妹が巻き込まれるかもしれない。

もしそうになったら組織を抜けて、妹と一緒に非難しないとねえ。

「でも、あんたはトリステインの貴族じゃないの。アルビオンの革命とやらと、

なんの関係があるっていうの？」

「我々はハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて繋がった貴族の連盟さ。我々に国境はない。

ハルケギニアは我々の手で一つになり、始祖ブリミルの光臨せし『聖地』を取り戻すのだ。」

「バカ言っちゃいけないね」

わたしは薄ら笑いを浮かべた。

「で、その国境を越えた貴族の連盟とやらが、このこそ泥になんの用？」

「我々は優秀なメイジが一人でも多く欲しい。協力してくれんかね？『土くれ』よ」

「ふん、どうしようかねえ……………」

わたしは少し躊躇った。

スパイを頼まれたが、『聖地』を取り返すだって？あの、強力なエルフどもから？

それにハルケギニアを一つにまとめるなんて、夢物語だ。

「『土くれ』よ。お前は選択することができる」

「言ってくらん」

「我々の同士となるか……………」

わたしは後を引き取った。

「ここで死ぬか、でしょ？」

「そのとおりだ。我々のことを知ったからには、生かしてはおけんからな」

「最初から選択なんてないじゃない。これだから貴族ってやつは、困った連中だわ。選択じゃなくて、強制でしょ？」

「そうだ」

「だったらはつきり、味方になれって言いなさいな。命令もできない男は嫌いだわ」

「我々と一緒に来い」

わたしは腕を組むと、尋ねた。

「あんたらの貴族の連盟とやらは、なんていうのかしら」

ここで名前が間違っていたら、お笑いものだ。

っていたが、
三人があまり喋らないので、徐々に散っていった。

そんな事をしていると、教室の扉がガラツと開き、ギトーがやってきた。

そう今日は姫さんがやってくる日なのだ。とうとう戦争が近づいてきた。

そう思うと、鍛錬もより厳しくしなければ、と思っている。

そんな俺が何故、教室にいたって言う、キュルケがギトーにふっ飛ばされるからである。

ギトーはバカじゃないかと思う。まず、教室で攻撃魔法を使うのをどうかと思うし、

貴族に魔法をぶつけるのも頭が腐っているとしか思えない。

しかもキュルケは、ゲルマニアの大貴族の息女である。

怪我でもさしたら、ギトーの所為で戦争が始まってしまう。まずギトーは処刑にされるだろう。

そんなことはおいといて、ギトーが来ると生徒は一斉に席についた。ギトーは若いのに、その容姿が不気味で生徒から人気がない。

「では授業を始める。知つてのとおり、私の二つ名は『疾風』。疾風のギトーだ」

それがどうしたのだろうか。ここの教師は、二つ名を名乗るのがはやりなのか？

教室はしーんとした雰囲気包まれた。そんな様子に、ギトーは満足そうである。

「最強の系統は知っているかね？ミス・ツェルプストー」

「『虚無』じゃないんですか？」

「伝説の話をしているわけではない。現実的な答えを聞いているんだ」

残念！俺の横にいますwww

すごい現実的だよ、ギトー君。君の頭はどうしてあるのだね（笑）まあギトーの言い方に、キュルケはかちんときたんだろう。

「『火』に決まっていますわ。ミスタ・ギトー」

キュルケは不適な笑みを浮かべて言い放った。

「ほほう。どうしてそう思うね？」

「すべてを燃やしつくせるのは、炎と情熱。そうじゃないかもしれません」と。

「残念ながらそうではない」

ギトーは腰の杖を抜くと、言い放った。

「試しに、この私にきみの得意な『火』の魔法をぶつけてきたまえ」

ギトー、きみはマゾだったか……。さすが変態は、一味違うぜ！！！

キュルケはぎょつとしていた。そりゃそうだろう実はマゾなんだから（笑）

「どうしたね？きみは確か、『火』系統が得意なのはなかったかな？」

マゾー（笑）くんは、挑発するように言った。

「火傷じゃすみませんわよ？」

キュルケは、目を細めて言った。

「かまわん。本気できたまえ。その、有名なツエルプストー家の赤毛が飾りではないのならね」

キュルケの顔から笑みが消えた。

胸の谷間から杖を抜くと、杖を振った。

すると目の前に出した右手の上に、小さな火の玉が現れる。

キュルケが呪文を詠唱すると火の玉は次第に膨れ上がり、

直径一メートルほどの大きさまで、膨れ上がった。

生徒達は慌てて机の下に隠れた。

もちろん俺はギトーを見ている。

どうやって防ごうか考え中だ。

キュルケは手首を回転させると、右手を胸の目にひきつけ、炎の玉を押し出した。

ギトーは自分に向かって来る炎の玉を避ける仕草も見せず、一度しまっていた杖を抜こうとしたが………、

「!?!?なに!?!?!」

杖がなかった。

ちなみに杖は俺の右手の中にあったりする。ギトー、ざまあwww
そんな事をしているうちに、炎の玉はギトーに迫り、直撃した。

「ぐわあああああ!?!」

もちろん火達磨である。

魔法を放ったキュルケもぽかーんとした表情で固まっている。悲鳴を聞いたほかの生徒達もギトーの火達磨姿を見て固まっていた。まあ、何人かざまあwwwの表情をした奴もいたが……。

当然だろう。こんな教師、好きになる奴の方が少ない。

こんなことを考えている間も、ギトーは床を転がりまわっている。

すると教室の扉がガラツと開き、コルベールが現れた。

しかし見た目が残念である。カツラをのせるのはいいが、少しづれている。

格好もどっかのバカ王子みたいな格好だった。

「あやあや、ミスタ・ギトー！つて、なにしてるんです？……」

「

「バカなんで燃えました！」

誰も答えなさそうなので、俺が答えてやった。

「そ、そうですか……。ま、まあ、いいでしょう！今日の授業はすべて中止であります！」

コルベールは重々しい調子で告げた。生徒達はギトーを忘れ、教室中から歓声上がる。

その歓声に抑えるように両手を振りながら、コルベールは続けた。

「えー、皆さん、本日はトリステイン魔法学院にとって、よき日があります。」

始祖ブリミルの降臨祭に並ぶ、めでたい日であります」

コルベールは横を向くと、後ろ手に手を組んだ。

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリステインがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花、
アンリエッタ姫殿下が本日ゲルマニアご訪問からのお帰りにこの魔法学院に行幸なされます」

教室がざわめいた。ギトーはやっと静まった。

「したがって、粗相があつてはいけません。急なことです、
今から全力を上げて、歓迎式典の準備を行います。
そのために今日の授業は中止。生徒諸君は正装し、門に整列すること」

生徒たちは緊張した面持ちになると一斉に頷いた。

コルベールは重々しげに頷くと、目を見張って怒鳴った。

「諸君が立派な貴族に成長したことを、姫殿下にお見せする絶好の

機会ですぞ！

御覚えがよくなるように、しっかりと杖を磨いておきなさい！
 よろしいですかな！」

あなたは頭を磨きましょう！（笑）

というか姫がバカだからなあ。天辺がバカだと下もバカになっちゃうわ。

なんで授業中止にさしちゃうかな。そんなんだと、未来の臣下がバ力になるぞ。

急に来すぎだぜ。せめてその辺考えとけよ。

ちなみに床に転がっていたギトーは、みんなに踏まれていきました。

ざ
ま
あ
w
w
w

[illegible]

-
-
-
-
-
そしてその日の夜……。

俺とルイズは部屋にいた。

しかしルイズは、昼間アンリエッタ姫を見てから、激しく落ち着きがなかった。

立ち上がったと思ったら、部屋を歩き回ったり、

またベットに座ったら枕を抱いてぼけーとしている。

俺はこの後、姫が来るのを知っているの、

紅茶の準備や、昼間シエスタに頼んで持ってきてもらった、クックベリーパイをお皿に盛って、テーブルに並べたりしている。

ある程度準備を済ますと、ルイズの行動が鬱陶しくなってきたので、ルイズの目の前に行って、顔を近づけるとキスをした。

しかしルイズは無反応だった。なので次は舌を入れてみた。

十秒間ぐらい入れてみたが、やっぱり無反応だった。ここまでくると重症だ。

流石の俺も無視されると傷ついた。

俺が崩れ落ちていると、ドアの向こう側に気配を感じた。

俺はドアに近づくと、ドアを開けた。

ドアを開けてみると、真っ黒な頭巾をすっぽりと被った少女が、右手を胸の前に上げたまま固まっていた。

まあ、ドアを叩こうとして、先に開いたら驚くわな……。

「ようこそ。お嬢さん」

俺の言葉を聞くと、その少女は驚いたようだった。

「!?!?あなたは……」

「まあ、とりあえず中に入りませんか？紅茶とデザートも準備してあります」

「ま、まあ、そうですね」

俺はそう言つと少女を引き連れ、部屋へと入った。

「ルイズ。お客さんだ」

「へ？・・・あなたは？」

頭巾を被つた少女は、しつと言わんばかりに口元に指を立てた。それから魔法の杖を取り出すと軽く振った。同時に短くルーンを呟く。

「ディテイクトマジック？」

ルイズが尋ねた。頭巾の少女は頷く。

「どこのに耳が、目が光ってるかわかりませんかね」

どこにも魔法や覗き穴がない事を確かめると、少女は頭巾を取るつた。

すると現れたのはアンリエッタだった。

こつやって簡単に抜けられるなら、魔法衛士の護衛は意味ないだろう。

「姫殿下！」

ルイズは慌てて膝をつく。

俺は面倒なので、ぽけっと突っ立っていた。

アンリエッタは涼しげな、心地よい声で言った。

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

ここからは少し芝居くさいので飛ばさしてもらおう。

俺はある程度二人が感動の再会したのを見届けると、二人を止めることにした。

「二人とも。とりあえず、座って話すといい」

「そ、そうね」

「そうしましょう」

二人はそう言うと、椅子に座り紅茶を飲みながら話し始めた。

「結婚するのよ。わたし」

「……おめでとうございます」

その声の調子に、なんだか悲しいものを感じたルイズは、沈んだ声で言った。

そこでアンリエッタは、ルイズの後ろに立っている俺を見てきた。

「あら、ごめんなさい。もしかして、お邪魔だったかしら」

「お邪魔？どうして？」

「だって、その彼、あなたの恋人なのでしょう？いやだわ。わたくしったら、つい懐かしさにかまけて、とんだ粗相をいたし

てしまったようね」

「／／／えええ！？べ、別にそんなんじゃないです！／／／」

「まあ、そういう関係ではないな。使い魔だし」

「使い魔？人にしか見えませんが・・・」

「実はあなたを狙う、悪魔かもしれませんよ？（にやり）」

「ふふふ。じゃあ、わたくしは貴方に食べられちゃうのね。怖いわ」

「ガオーーーーッ！！（笑）ｗｗｗ」

「なにやってんの。二人とも・・・」

ふざけているとルイズに呆れられた。

「はあ、それにしても、あなたって昔からどこか変わっていたけれど、相変わらずよね」

「好きであいつを使い魔にしたわけじゃありません」

アンリエッタは、再び溜め息をついた。

「姫さま、どうなさったんですか？」

ここからは芝居がかった会話が進むのだが、正直呆れた。
なので適当に説明すると、

姫さんはゲルマニアの皇帝に嫁ぐことになった。それは同盟のためである。

しかし、アルビオンの貴族は二国の同盟を望んでいない。
なので婚姻の妨げになる物を探している。

アルビオンのウェールズ皇太子が、婚姻の妨げになる手紙を、ちゃっかり持っていたりする。

それをルイズに取ってくるよう頼みに来たと言った感じである。

まあ、原作どおりの展開なので、驚きはしないが、
二人の芝居がかった会話にちょびつとイラッとした

というか幼馴染の公爵家の娘に、戦争中のアルビオンに行かすとか、
この姫ばかりじゃねえの。

こいつバカだろ。普通死ぬわ。何でこんなが姫なんだろ……。

ルイズとアンリエッタの話がある程度終わると、
アンリエッタがこちらに向き直り話しかけてきた。

「頼もしい使い魔さん」

「なんだ？ 姫さん」

「わたくしの大事なおともだちを、これからもよろしくお願いしま
すね」

大事なら戦争中のアルビオンに行かせないでください。

そして、ずっと左手を差し出した。そう、キスです。アンリエッタ
とのキスです。羨ましいだろう。

ルイズは驚いた声で言った。

「いけません！ 姫さま！ そんな、使い魔にお手を許すなんて！」

「いいですよ。この方はわたくしのために働いてくれるのです。
忠誠には報いるところがなければなりません」

いや、忠誠心はないけど。あんたに忠誠誓うと、破滅しそうだ。
まあアンリエッタも徐々に成長すると思うけど。

「ルイズいいのか？」

「姫様がいいって言うんなら、いいんじゃない？……」

「そうか……。じゃあ、いただきます！」

そういうと俺はアンリエッタの手を取り、こちらに引き寄せると、首の後ろに右手を回すと、顔を近づけ、唇を重ねた。

「！？ツな！！？？」

「！？んうう~~~~~//////」

ちなみに舌も入れてます。てへッ

「……ぴちゅ……ぴちゃ……ちゅ……ぷはッ！ふ
う~~~~。ごちそうさまでした」

「きゅ~~~~~……」

あ、気絶した……。

「なななな、なんてことしてんのよ!!!!」

「なんだ。嫉妬してんのか？ルイズ。はあ、しゃあねえな」

俺はそう言つと、ルイズの顔を両手で挟む。

「え？」

「いただきます」

ぶちゅっ~~~~~。

「んんう!?!?!」

「んぶ。びちゅ……びちゃ……」

「んんう~~~~~!!?!?」

ばたッ!!!

あ、ルイズも気絶した。

まだ途中だったんだが……。

まあ、とりあえず二人が気が付くまで待つか。

- - - - -十分後

「……………// // //」

「どうした？二人とも」

「いえ、なんでも……………ねえ、ルイズ？」

「は、はい。姫さま……………」

二人とも激しいキスをしたので、消極的だ。
これはこれでいい……………。

「ま、まあ、忠誠には報いるところがなければいけませんから／＼／＼」

勤めて平静を装いながら、アンリエッタは頷いた。

そのとき、ドアがぱたーんと開いて、鼻血を垂らしたギーシュが飛び込んできた。

「きさまーッ！姫殿下にーッ！羨まし……じゃなくて、なにしてるかーッ！」

「うっさいわ、ボケッ！ー！」

ボキヤッ！！

「ぐぼらッ！？！」

うっさいのでぶん殴ってやった。後悔はしてないし、反省もしていない。

ギーシュはぶっ飛ぶと、そのままドアをくぐり、部屋の外にぶっ飛んでいった。

しばらくすると頭からドバドバ血を垂らしたギーシュが帰ってきた。

「決闘だ！バカチンがああああああ！」

俺は面倒なので、首をしめて気絶させると、ロープでぐるぐる巻きにした。

「…………ルイズ」

「…………なに？」

「こいつ、どうしようか？」

「とりあえず、起きるまで待つときましよう！」

「それもそうだな」

「……………あの、この方の、治療は？……………」

アンリエッタの呟きは、無視した。

……………二十分後

「姫殿下！その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・ドラえも・
・・・じゃなく、

グラモンに仰せつけますよう」

「グラモン？あの、グラモン元帥の？」

「息子でございます。 姫殿下」

かっこつけてもギーシュの顔は血だらけで、まったく締まらない。
それでもアンリエッタは感動したようだ。

「あなたも、わたくしの力になってくれるのね」

「はい！姫殿下！このギーシュ・ド・グラモン！命にかえましても、
任務を遂行してみせます！」

「まあ！なんて立派な方なんでしょう。この不幸な姫をお助けくだ
さい。ギーシュさん」

「姫殿下が僕の名前を呼んでくださった！（ぶしゅーーーーー）」

ギーシュは興奮のしすぎで、傷が開いたようだ。

バカすぎて目も当てられない。

アンリエッタは気になるようだが、俺たち二人は気にしない。

「あの、この方は、どうしましょう………」

「ほっときましょう」

「そ、そうですか……」

アンリエッタは顔を引き攣らせながら言った。

その後ギーシュをほっといたまま、アンリエッタはアルビオンのウエルズへ送る手紙を書いた。

手紙を書いている間、俺はアンリエッタの手紙をちら見したり、ギーシュを部屋の外に投げ出したりしていた。

書き終えた手紙に封蝋をして、花押を押すと、アンリエッタは手紙をルイズに手渡した。

「ウエルズ皇太子にお会いになったら、この手紙を渡してください。」

すぐに件の手紙を返してくれるでしょう」

それからアンリエッタは、右手の薬指から指輪を引き抜くと、ルイズに手渡した。

「母君から頂いた『水のルビー』です。せめてものお守りです。お金が必要なら、売り払って旅の資金にあててください」

ルイズは深々と頭を下げた。

「この任務はトリステインの未来がかかっています。母君の指輪が、アルビオンに吹く猛き風から、あなたがたを守りますように」

未来がかかってるなら、恋文なんかO・K・U・N・N・A!!!!

さて、あのワルドをどう料理してくれようか……。俺はこれからやってくる戦いに、どう対応していこうか考えながら、長い一日を終えた。

続く

第11話 陰謀と王女！？（後書き）

今回も長くなりました。

少し過激になったかもしれませんが

まあ、気にしないでください。

次回『第12話 港町ラ・ロシエール！？』

楽しみに！！

第12話 港町ラ・ロシエール!? (前書き)

ワルド初登場!!

今回純耶がどうワルドをイジメぬくかは、ご想像にお任せします。

では……………。

ときどき挿絵が増えたりしますので、見てくれるのなら、見てや
ってください。

第12話 港町ラ・ロシエール！？

- - - - - side 純耶

おっす！！オレ、純耶！！

いま俺はアンリエッタのバカが送りやがった手紙を取りに、アルビオンへ行く準備をしている。

どうやらルイズは馬に乗るらしいが、まあ、ワルドが来るなら、その準備も無駄になるだろう。

そんな風に出発の用意をしていると、ギーシュが、困ったように言った。

「お願いがあるんだが………」

「無理」

「はやッ！？ちょ、ちょっと、待ちたまえ！まだ何も言っていないじゃないか！」

「冗談だよ。で、なんだよ」

まあ、ヴェルダンデだろうがな。

あれは脱出するときに必要だから、何があっても連れて行くがな。

「僕の使い魔を連れて行きたいんだ」

「いねえじゃん」

「いまから呼ぶよ……。ヴェルダンデ！」

ギーシュが名前を呼ぶと、地面が少しずつ盛り上がり、でかいモグラが出てきた。

「……きも。予想以上にでかい。たぶん熊ぐらの大きさだろう。」

「ヴェルダンデ！ああ！ぼくの可愛いヴェルダンデ！」

流石にモグラと少年のくんずほぐれつは見たくない。なので俺は、ギーシュを蹴飛ばした。

「グボツ!？」

「こら、変態。何してんだ……。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ………。

「すいませんでした!!!!!!」

どうやら昨日の制裁がトラウマになったようだ。
俺が少し怒気を放つと一瞬で土下座の体勢になった。

「まあいい。とりあえず、それは地面の下でも潜らせときゃいいだろっ」

そう言いながら俺はルイズを襲っているモグラを蹴飛ばした。

もぐーーーーーッ!!

何か聞こえたが気にしない。後悔もしないし、反省もしない……。

ふざけていると少し離れた所に、杖を構えたまま固まったワルドがいた。

どうやらしよっぱなから、ワルドの数少ない活躍を潰してしまったようだ。

どうせ魔法でルイズを助けて、好感度を上げようとしたんだろう……
……ロリコンめ。
するとワルドが近づいてきた。

「どなたでしょう。僕らはいまから出かけるんですが」

俺はとりあえず初対面なので、丁寧な話しかけた。

俺の隣のルイズは、俺の話し方に気持ち悪い奴を見るような目で見えた。

失礼な。俺だって最初くらいは、丁寧な話し方をするさ。ロリコンは別だが……。

「僕は仲間だ。姫殿下より、きみたちに同行することを命じられてね。」

きみたちだけではやはり心もとないらしい。しかし、お忍びの任務であるゆえ、

一部隊つけるわけにもいかぬ。そこで僕が指名されたってワケだ」

裏切りですね、わかります。

にしてもアンリエッタもいらん事をしてくれる。

ここまで来るとバカもすがしく感じる。ああ、なんてバカなんだろう。

それから各自自己紹介したり、なんか話しかけてきたり、

ルイズがワルドに「ワルドさま！」みたいな感じで抱きついていたりしていた。

いろいろ話が終わると、アルビオンへ出発することになった。

ちなみにルイズはワルドとグリフォンに乗って、俺ら二人は馬だ。

まあ急ぐのも面倒なので、ある程度のスピードで走ることにした。

私は首を振った。

そのとき、扉がどんと叩かれた。「入りなさい」とオスマン氏が呟くと、

慌てた様子の輝かしい、はげ……もとい、ミスタ・コルベールが飛び込んできた。

「誰がハゲでつるつるですか！」

「は？」

「い、いえ。なにか嫌な事を思われた気がしたので。それより、一大事ですぞ！オールド・オスマン！」

「きみはいつでも一大事ではないか。どうもきみはあわてんぼでいかん」

「慌てますよ！わたしだってたまには慌てます！城からの知らせです！なんと！

チエルノボーグの牢獄から、フーケが脱獄したようです！」

「ふむ」

オスマン氏は、口ひげを捻りながらうなった。

「門番の話では、目を離れた瞬間、牢獄から突然いなくなったらしいです！」

さる貴族を名乗る怪しい人物がいたようらしいですが、『風』の魔法で気絶させられたようです！

何者かが手引きしたに違いありません！つまり、城下に裏切り者がいることです！

これは一大事ですぞ！これが大事じゃなくてなんなのですか！」

知らせを聞いた私は顔が蒼白になりました。

オスマン氏は手を振ると、コルベールに退室を促した。

「わかったわかった。その件については、あとで聞こうではないか」

コルベールがいなくなると、私は、机に手をついて、溜め息をはいた。

「城下に裏切り者が！間違いありません。アルビオン貴族の暗躍ですわ！」

「そうかもしれませんな。あいだっ！」

オスマン氏は、鼻毛を抜きながら言った。その様子を、私は呆れ顔で見てしまった。

「トリスティンの未来がかかっているのですよ。なぜ、そのような余裕の態度を……」

「すでに杖は振られたのですぞ。我々ができることは、待つことだけ。違いますかな？」

「そうですが……」

「なあに、彼ならば、道中どんな困難があろうとも、やってくれますでな」

「彼とは？あのギーシュが？それとも、ワルド子爵が？」

オスマン氏は首を振った。

「ならば、あのルイズの使い魔の少年が？まさか！彼はただの平民ではありませんか！」

「姫は始祖ブリミルの伝説をご存知かな？」

「通り一遍の事なら知っていますが……」

それがどうしたのだろうか……。
オスマン氏にはっこりと笑った。

「では『ガンダールヴ』のくだりはご存知か？」

「始祖ブリミルが用いた、最強の使い魔のこと？まさか彼が？」

「えーおほん、とにかく彼は『ガンダールヴ』並、いや、それ以上に使えると、

そういうことですな。ただ、彼は異世界から来た少年なのです」

「異世界」

「そうですね。ハルケギニアではない、どこか。『ここ』ではない、どこか。

そこからやってきた彼ならばやってくれと、この老いぼれは信じておりますでな。

余裕の態度もその所為なのですじゃ」

いま俺は港町ラ・ロシエールへと続く道を馬で走っている。

ラ・ロシエールはトリスティン南側にある一都市で、魔法学院から馬で二日ほどの距離にある。

浮遊大陸アルビオンが定期的に接近するので空飛ぶフネの港町となっていて、

古代の世界樹の枯れ木をくり抜いた立体型の棧橋に多数のフネを係留できる。
イグドラシル

その近くにある、スクウェアアクラスのメイジが岩から切り出して作った建物群が特徴である。

正直二日もかかるところへ馬で行くのは面倒だ。

しかし俺はルイズを守る義務があるので帰れない。

それにワルドを倒す気なので、俺は帰ることはしない。倒した後のことは、秘密だ。

原作ではフーケが雇った奴らに道中襲われるが、現在俺たちとワルドたちの距離は離れている。

襲われるにしてもまだまだ後だし、ワルドが奴らを倒すことはないだろう。

なんせ自分の仲間というわけではないが、敵でもないのである。

まあワルドだけ襲うのもあるかもしれないが、あれはガンダールヴの力量を測るためであって、

べつにルイズの好感度を上げるため、とかではないと思う。もし上げるためならロリコンだ。

なので襲われるにしても、俺たちだけだろう。

俺が考え事をしていると、ギーシュが話しかけてきた。

「なあ、ジュンヤ。急がなくていいのかい？」

「いいんだよ。どうせ乗れる船はないだろう」

「なんでわかるんだい？」

「秘密だ」

「ふーん。まあ聞かないことにするよ」

「まあ情報は確かだ。気にすんな」

原作知ってます、とか言ってもしやあないしな。

俺達はそのあと、ちよくちよく会話をはさみながら走りつづけた・
・
・
・

馬を何度も替えながら、走りつづけると、その日の夜にラ・ロシェ
ールの入り口についた。

ちなみにワルドとルイズの乗ったグリフォンもいる。

何故かという、途中馬で走っていると、道の横の草原で待っていたのだ。

ワルドの顔が不服そうだったので、ルイズが待つよう言ったのだらう。

俺たちが近寄ると、「急ぎの密命なんだ！船が出てしまったらどうする」とか言ってきたので、

「六日後まで船なんか出ませんよ？知らなかったんですか！？」と言いつ返してやった。

ワルドは恥をかいて顔を赤くしていた。バカめ、ワルド。

ルイズにも笑われてしまって、悔しそうだ。ワルド、ざまあwww

入り口について俺達が話しながら俺そのまま走っていると、

俺たちの跨った馬めがけ、崖の上から松明が何本も投げ込まれた。

ギーシュが奇襲だとか騒いでるが、俺はデルフを一瞬で抜き去ると、すべて切り裂いた。

馬は少し暴れたが、すぐに鎮めると馬から下り、崖を一気に駆けのぼった。

駆け上っている間、何本も矢が降ってきたが、こちらに向かってきた物は、すべて弾いた。

上りきるとそこには四、五十人の男たちがいた。こいつらは雇われた奴らなので、殺さない。

俺は人と人の間をすり抜けるように走る。そして横を通るとき、武器を折ったり、

峰打ちで気絶さしたり、どんどん男たちを倒していった。

すると上空の方に影が見えた。
次の瞬間人が集まってるところに、小型の竜巻が起こり男達を吹き飛ばしていた。

あの竜はシルフィードだろう。すると背中に乗ってるのはタバサとキュルケだろう。

シルフィードは俺を見つけるとこちらに降りてきた。
着地した瞬間、キュルケがその豊満な胸を揺らしながら、俺に対して抱きついてきた。

「おまたせ。ジュンヤ」

「ああ。それはいいが離れてくれ……」

じやないとあちらの方から、ルイズの怒気が俺に対して向かってくる。

早くしないと爆発する。それだけは勘弁してくれ。

「あらそう?」

そういうとやっとキュルケは離れてくれた。

キュルケが離れると、ルイズがこちらに向かってきた。

「お待たせじゃないわよッ！何しにきたのよ！」

「助けにきてあげたんじゃないの。朝がた、窓から見てたらあんたたちが馬に乗って

出かけようとしてるもんだから、急いでタバサを叩き起こして後をつけたのよ」

キュルケはシルフィードの上のタバサを指差した。

寝込みを叩き起こされたらしく、パジャマ姿である。

それでもなぜかタバサは気にした風もなく、本のページをめくっている。

「ツエルプストー！あのねえ、これはお忍びなのよ？」

お忍びなら、言っちゃいかんだろう。ルイズさんや……。あんたもバカだったか……。

「お忍び？だったら、そう言いなさいよ。言ってくれなきゃわからないじゃない。

とにかく、感謝しなさいよね。あなたたちを襲った連中を、捕まえたんだから」

「まあ、ほとんど俺が倒したかな」

転がっている男たちは、罵声を浴びせてくるが無視だ。

尋問はギーシュに任せ、俺はルイズとキュルケの罵り合いをほっておくと、

いまだに本を読んでいるタバサに話しかけた。

「タバサ」

「なに？」

「その格好、さむくないのか？」

「大丈夫」

「そうか・・・」

会話が終わってしまった・・・。

俺にクール少女と会話を続ける技術を持っていない。

なのでギーシュの尋問が終わり、ルイズとキュルケの罵り合いを止めると、

ラ・ロシエールが一番上等な宿屋『女神の杵』亭へ泊まるため、馬を連れ歩を進めた。

続く

第12話 港町ラ・ロシエール！？（後書き）

今回はいつもより少し短くなりました。

まだあまりワルドは弄られていませんが、

これからどんどん弄られていくことでしょうwww

次回『第13話 宿屋での決闘・戦い、そして出港！？』

楽しみに！！

第13話 宿屋での決闘・襲撃、そして出港！？

挿絵あり（前書き）

今回とうとうアルビオンへ出航します。

楽しみに・・・。

第13話 宿屋での決闘・襲撃、そして出港！？

挿絵あり

- - - - - side 純耶

いま俺たちは『女神の杵』の食堂にいる。

船はやはりまだ出れないらしく、船が出港できるまで一時休憩するらしい。

まあ俺は明日ぐらいにフーケが襲撃するのを知っているし、フーケは俺の協力者だ。

そんなに心配ではないので俺は、ワルドとの決闘の事を考えていた。

べつに負ける必要がないのだが、勝ってしまうとワルドにアルビオンで警戒されてしまう。

なのでここは負ける必要があるのだが、正直言ってあのロリコンには負けたくない。

あんな雑魚に負けたという結果が気にいらないので、なにか策がないか考え中だ。

どうしようか……………。

と、俺が考えていたら、ワルドがルイズに大事な話がある、とか言っ

って部屋に行ってしまった。

まあ、婚約の話だろう。正直どうでもいいので、ほっといた。結局ルイズは結婚しないし……………。

俺がワルドを嵌める策を考えようとした時、ギーシュが話しかけてきた。

「なあジュン「黙れ」や、ってまだ何も言っていないよ!？」

「いやめんどくさいし。バカだし」

「バカは関係ないじゃないか!バカは!」

「うるさい。死ね」

「死なないよ!？」

「・・・・・・・・ちっ」

「あれ!？舌打ち!？なんで!？ねえ、なんで!？」

「冗談だ。で、なんだよ。バカ野郎」

「もういいよ・・・・。まあ、ルイズの事なんだけど、君はいいのかい？」

「何がだ？もしかして婚約の事か？」

「そうさ。君はルイズの事が好きではないのかい？」

「俺がルイズを好きかは置いて、婚約の事はルイズ自身の問題だ。」

俺達が関わっていい事ではない」

「それはそうだが……。まあこれ以上は言わないさ」

「心配してもらってすまないな。バカ野郎」

「あれ！？いい雰囲気だったのに！？」

うるさい奴だ。まあどうでもいいので、ギーシュ（バカ）はほっといて、部屋に戻るか……。

俺はギーシュをほっといて、部屋に戻ると明日の決闘に備えるため寝ることにした。

寝る前にルイズに婚約のことを相談されたり、

その後、部屋に戻ると何故かキュルケとタバサが俺のベットにいたり、

ギーシュは俺の部屋から放り出され、キュルケ、タバサ部屋に一人で寝たり、

俺が二人を追い出すのを諦め、ベットの真ん中に寝ると二人が両腕に引っ付いたり、

朝早く起きてみると、何故かルイズが俺の上にいたり、といろんな事があつたが、

いまは朝食を終え俺は、中庭でワルドと対峙している……。

何故かという朝、俺の部屋に来てみるとルイズが俺の部屋にいて、それに一緒のベットで重なって寝ているのだ。

それを見たワルドは婚約者の自分でも一緒に寝たことはない、とか言つて決闘を申し込んできた。

俺は面倒なので断ろうとしたのだが、後ろから服を引っ張られたので振り向いてみると、

キュルケとタバサに期待したような瞳で見つめられた。

何故か婚約者のはずのルイズも一緒にだ。

それを見たワルドは、中庭で待っていると言つて、部屋を出て行つてしまった。

とりあえず俺は、ややこしくさせた三人に、チョップという制裁を加えた。

「使い魔くん。準備はいいかい？」

俺が現実逃避していると、ワルドが話しかけてきた。

面倒なので来たくはなかったが、朝食を食べた後逃げようとしたら、

三人に腕や体に絡みつかれて捕まってしまった。
右腕にルイズ、左腕にキュルケ、後ろから胴にタバサといった感じである。

そのまま中庭に来たのだが、ワルドがそれを見て益々闘志を高めた。もう殺気と言ってもいいだろう。並みの人間なら気絶してしまうのではないだろうか。

その証拠に着いて来たギーシュは後ろでプルプル震えている。

俺に引っ付いている三人は、俺が対抗して殺気をだし、ワルドの殺気を相殺しているので、

けろっとしていて、なんともないように見える。

俺は昨日考えた策がいろいろ没になったので、もうワルドに勝つことにした。

とりあえず引っ付いている三人が邪魔である。

「（はあ、めんど）ほら三人とも、離れとけ。邪魔だ」

そういうと三人とも俺の体から離れ、何メートルか離れたところで決闘を見ている。

俺は鞘からデルフを抜くと、正面に構えた。

「準備はできたようだな。ギーシュ君。審判を頼めるかい？」

「は、はい!!」

緊張しすぎて、声が裏返っているぞ。ギーシュ。

「では、始めるとしよう」

ワルドは腰から、杖を抜きさると、フェンシングの構えのように、前方に突き出している。

> i 1 7 0 1 3 — 2 0 6 2 <

「手加減はしないので、そこんところよろしく！」

俺がそう言つと、ワルドは薄く笑った。

「かまわん。全力できたまえ」

俺はデルフを構えなおすと、一足で飛び、ワルドに切りかかった。俺は左肩から右腰まで切り裂こうとしたが、ワルドはそれを後ろへとび、ぎりぎり避けた。

ワルドは後ろへ飛ぶとともに、呪文を一瞬で唱え、詠唱を完成させると、

俺の右肩を狙い、杖を突き出してきた。飛んできたのは『エア・ハ
ンマー』。

空気を固めて不可視の槌とする魔法である。

俺はそれを左に避けると、ワルドの懐へもぐると、デルフを杖の下
から振り上げた。

少し油断していたワルドはそれを捌くことができず、杖は無残にも
吹き飛ばされた。

俺はデルフをワルドの首に寸止めすると、

原作でワルドがサイトの言うた言葉であろっ言葉と言ってやった。

「勝負あり、だ」

ワルドは動こうとしたがデルフが首に添えられている。

勝負が決まったことで、三人がおそろおそろ近づいてきた。

「わかっただろう。あんたではルイズを守れない」

ワルドは悔しそうに顔を歪める。

そりゃ悔しいだろう。婚約者の前でたかが平民の使い魔に倒された
のだ。

ワルドは憧れの魔法衛士のグリフォン隊長だ。負けたショックは
大きいだろう。

しかし俺は、ワルドざまあwwwとしか思えなかった。

一回、キュルケが誘いに來たが、断らせてもらった。

「にしても、今朝はおでれーた！

魔法衛士の隊長を瞬殺たあ、今回の相棒はめっぽう強いじゃねえか！」

「よせよ。おだてても、何もでねえぜ」

「事実をいったままでさ」

伝説の剣に誉められると、けっこう照れる。

こんな剣でも六千年は生きている。

豊富な経験もあるこいつに誉められるのは、結構なことだろう。とりあえず俺は、前々から思っていた事を、デルフに伝えることにした。

「なあ、デルフ」

「なんだあ？相棒」

「お前の記憶はいま、どこまで戻っている」

「そうだな……。なんとって六千年は生きてたら、細かいことは忘れちゃう。あんま昔の事は覚えてねえ。すまねーな、相棒」

「とりあえず昔の事はいい。だが……………」

そついうと俺はデルフを鞘から抜くと、魔力を込めた。

「昔の姿に戻ってもらうぞ。デルフリンガー」

「おおおっ！？きたきたきたーッ！」

魔力はデルフにどんどん吸い込まれる。

するとデルフの刀身はいま研がれたかのように、光り輝いていた。

「思い出した！これがほんとの俺の姿さ！相棒！いやあ、てんで忘れてた！」

そついや飽き飽きしてたときに、テムエの体を変えたんだった！なにせ、面白いことはありゃあしないし、つまらん連中ばかりだったからな！」

「なあに、これから忙しくなる。頼むぞ、相棒！」

「合点だ！このデルフリンガー様にまかしとけい！」

デルフとの会話が終わると同時に、ルイズが部屋にやってきた。
少しルイズの顔は暗い。何かあったのだろうか？

「ねえ、ジュンヤ」

「なんだ？ルイズ。なんかようか」

「少し相談があつて。婚約の事なんだけど・・・」

そのことが・・・悩んでいるのだろう。婚約なんか、急に言われても困るだろうしな。

「ああ。昨日の続きか。それがどうした？」

「どうしたらいいかな。わたし」

「そうだな。昨日も言ったが、結婚とは一生を過ごすことになる相手と結ばれることだ。

これは人それぞれの人生が決まってくることだし、他人の俺が関

わっていいことではない。

こういうことは自分で判断していくしかない。まあ、貴族にはあまり関係ないかもしれないがな」

貴族や王族には政略結婚など政治に関係してきたりする。

その辺は俺にはわからないので、ルイズ自身で考えて欲しい。

「そんな急には決められないわ」

「まあ、悩むしかないな。悩んで悩んで、決められないなら、友達や俺に頼ればいい」

「・・・うん。ありがと／＼／＼」

まあ酷かもしれんが、こればっかはしょうがない。

俺は少し寒くなったので部屋の中に戻ることにした。

「ルイズ。とにかッ!!?」

ルイズに部屋の中に戻ろうと、言おうとしたら、ベランダに大きな影が出来た。

俺は気づいた瞬間、ルイズをお姫抱っこすると、部屋の中に飛び込んだ。

「!?!?きゃあっ!?!ど、どうしたの／＼／＼」

「ゴーレムだ!」

そう、俺たちの背後には巨大なゴーレムがいた。
こんな巨大なゴーレムを操れるのは……、

「フーケか!」

「フーケですって!?!フーケは城の牢屋にいるはずよ!」

俺達が喋っているとフーケが話しかけてきた。

俺は正体を知っているが、ルイズはフーケの正体を知らない。
ルイズにはれない為だろうか、なにか魔法を使っているのか、姿、
声が男のものだった。

捕まったフーケを演じているのであろう。

「君たちとは、初めましてかな」

フーケの隣には黒いマントをした貴族が立っている。
多分あれはワルドの『偏在』だろう。

「よくも私の宝を奪い返してくれたな。その恨みここで晴らしてくれよう」

そういつとフーケはゴーレムを操り、腕を振りかぶるとベランダを破壊した。

俺たちはキュルケたちと合流するため、一階へと向かうことにした。

「ルイズ！とりあえず一階のみんなと合流しよう！」

「わかったわ！」

俺達が階段を下り、酒場に向かうとそこはもう争いが起こっていた。酒場の所々は無残にも傷ついたり、破壊されていた。

「キュルケ！状況はどうなっている！」

キュルケは俺に気付くと、抱きついてきた。

「よかったわ、ジュンヤ。無事だったのね！」

「ありがとう。それで状況は？」

「私たちがお酒を飲んでたら、突然奴らが入ってきて、攻撃してきたのよ。」

数も多いし、何人がメイジも混じってて、すこし面倒な状況ね」

「俺たちのほうには、フーケが襲ってきた。もう一人いたが・・・」

「フーケ？たしか牢屋にいるんじゃない・・・」

「脱獄したんだろう。とりあえずここは二手に分かれたほうがいい」

そこでやっとワルドが会話に入ってきた。

「僕とルイズ、それと使い魔くんが船へと向かおう。それ以外はここへ残り、敵を足止めしてくれ」

「あなたにルイズは任せられませんので、俺が守るとしましょう」

「君に負けたのは事実だ。任せるとしよう」

を出していた。

敵に追われることなく俺たちはそのまま棧橋へと着いた。
いまはワルドが船長と話しをしている。
俺は腕の中にいるルイズに話しかけた。

「大丈夫か？ルイズ」

「ええ。大丈夫。そ、それより、そろそろ降ろしてくれないかしら
／／／／／」

そこに話を終えたワルドがやってきた。

「僕が風石の代わりをして、飛ぶことになった。すぐに出航するか
ら乗り込んでくれ」

俺たちが船へと乗り込むと、船員達が慌しく出航の準備をしていた。
準備が終わると、帆をはり、船が風石の力で浮き始めた。

船は棧橋から離れていき、どんどん地面が離れていき、高く上空ま
で浮かび上がった。

俺は明日の昼過ぎには着くだろうと思い、忙しくなるので休息とる
ことにした俺は、

船の舷側に座りこむと、ルイズを抱き枕にして深い眠りについた。

俺がルイズを抱き枕にしたとき、ワルドは悔しそうに見ていた。

続く

第13話 宿屋での決闘・襲撃、そして出港！？

挿絵あり（後書き）

今回は船に乗ってアルビオンに向かう途中です。

次にウェールズが出る予定です。

次回『第14話 皇太子と空の国！？』

楽しみに！！

第14話 皇太子と空の国！？ 挿絵あり（前書き）

今回はウェールズ皇太子初登場！！

ウェールズが生きるか死ぬかは、純耶次第。

気になる方は本編へ！

第14話 皇太子と空の国！？ 挿絵あり

- - - - - s i d e 純耶

船員たちの声と眩しい光で、俺は目を覚ました。

目の前には青空が広がっている。

体を起こそうとしたが、俺の腕の中にはルイズが未だに寝ていた。

いろいろあつて疲れたのであろう。俺はルイズを起こさないように立ち上がると、

体にかかっていた毛布を、ルイズの体にかけてあげた。

舷側から下を覗き込んでみると、白い雲が広がっていた。船は雲の上を進んでいるようだ。

「アルビオンが見えたぞ！」

すると鐘楼の上に立った見張りの船員が、大声を上げた。

俺は空中を見てみると、雲の切れ間から、黒々とした大陸が覗いていた。

実際見たことはなかったが、見てみると一つ思ふことがあった。

（ラピュ。じゃん！！）

そう。見た感じ。ピュタにしか見えない。と言っても、あんなにでっかい木はないが……。

どこかに飛行石でもあるんじゃないか、とか思ってしまう。あるのは風石だけ。

「驚いた？」

声のした方を見ると、いつのまにか起きていたのか、ルイズがいた。

「ああ。聞いたことはあるが、見た事はなかったんでな。正直驚いた」

そんな様子を見たルイズは笑っていた。

ルイズは、純耶の驚くところを見たことが、あまりない。というかないだろう。

そんなに純耶についつい笑ってしまった。

そんな感じで二人でほのぼの話していると、見張りの船員が、大声を上げた。

「右舷上方の雲中より、船が接近してきます！」

言われた方を見てみると、確かに船が一隻近づいてくる。

俺達に乗っている船より、一回り大きく、大砲のついた黒船だった。

あれはウェールズの船だろう。あんな大砲のついた商船はないだろうしな。

俺たち二人の周りでは、船員や船長がいろいろやっているが無駄だ。あれは船に旗がついていない。一応、空賊として活動している奴らだ。

周りの船員も気づいたようだ。

相手側から威嚇のための大砲がうたれ、その後、停船命令がでた。

船長はワルドに見つめているが、

ワルドは船を浮かべるために魔法を使ったため、魔法は使えない。なので俺たちの乗った船は、仕方なく止まった。

[illegible]

いきなり現れて大砲をぶつ放した黒船と、行き足を弱め、停泊した自船の様子に怯えて、ルイズはこちらに寄り添ってきた。俺はルイズを安心させるため、肩に手を回すと、抱き寄せた。そうするとルイズもだいぶ落ち着いたようだ。

「安心しろ。何があっても、俺が守ってやる……」

「ジュ、ジュンヤ／＼／＼／」

ルイズは俺の言葉が恥ずかしいのか、顔を赤らめ、俯いてしまった。さすがルイズ。そんな姿も可愛らしいぜ！

ルイズとピンクな世界を作り出していると、黒船から、メガホンを持った男が大声で怒鳴った。

「空賊だ！抵抗するな！」

「空賊ですって？」

ルイズは驚いたような声で言った。

黒船の舷側にはいろんな武器を構えた男たちが並んでいる。そこから鉤のついたロープが放たれ、自船に引っかかった。そこを武器を持った男たちが、伝ってきた。

ここはおとなしく従った方がいいだろう。

俺たちは黒船に乗せられると、武器や杖を取り上げられ、船倉に閉じ込められた。

「だりゃああ！」

ぼーああー——————ああん！！！！

鍵のかかっていた扉は、原形を残さず碎け散り、向こう側の扉まで破壊してしまった。

俺は船長室まで行くために、未だにぼーんとしている二人に声をかけた。

「おら、いくぞ。二人とも」

そして船長室。

ここに来るとき遭遇した男たちは、みんななかよく気絶してもらった。

殺してしまったのは、ウェールズへの印象が最悪だ。

そしていま、俺の目の前には、変装したウェールズがいる。

正直思っていたのだが、空賊の頭が、あんな派手な杖を持っているわけないだろうに。

それでは貴族かなんかが、変装しているのがまるわかりである。

「そんで船長さん。覚悟はいいか？」

俺がそう言つと、そばに仕えていた男たちが、ウェールズの前に立ちふさがつた。

面倒なので一瞬で背後に回り、首に手をとんと当て、男たちの意識を刈り取る。

もうすでに立っているのはウェールズだけである。すこし冷や汗をかいている。

すこし苛めてやろう。俺は来る途中で見つけたデルフを抜きさると、振り上げ、

ウェールズめがけて、振り下ろした。

「てえんちゅううーッ！！！」

「うわあああああ——ッ!!!!」

俺は振り下ろす途中で、デルフを左手に持ち帰ると、寸止めし、右手の中指を親指に引つ掛けると、ウェールズのデコにそえ、中指を解き放った……。

「ふつとベツ!! ウエールズ!!」

「え？いまウェーるぶげらッ！！？」

俺の言葉に驚いたウェールズはこちらを向いたが、次の瞬間には俺のデコピンによりふっ飛んだ。

ふっ飛んだウェールズは面白いぐらい飛んで、壁に激突し、その衝撃でカツラが取れた。

ルイズたちは俺の言葉と、その行動に驚いていた。

「うえ？ウェールズ皇太子なの？その人……」

例のその人はカツラがずれたまま、倒れている。十秒ほどすると気がついたようだ。

起き上がると赤くなったデコ摩りながら、こちらに向かってきた。

「いやはや、まさか気づかれているとは。いったい君は何者だい？」

「なあに。ただの使い魔だ」

「使い魔？トリスティンでは人を使い魔にするのかい？」

「いや。俺が特別なだけだ」

俺とウェールズが話し合っていると、ルイズがおそろおそろ話しかけてきた。

「あの……。ほんとにウェールズ皇太子なんですか？」

するとウェールズは、ルイズに向き直ると、自己紹介を始めた。

「これはすまなかった。自己紹介が遅れたが、私はアルビオン王立空軍大将、

本国艦隊司令長官……、まあ、そんな肩書きよりこちらのほうが通りがいいだろう」

居住まいをただすと、威風堂々、名乗った。

「アルビオン王国皇太子、ウェールズ・デューダーだ」

そこからはルイズが密書を渡し、手紙がここにはないと言うので、手紙を取りに、手紙の置いてあるニューカッスルの城へと行くことになった。

ここから戦いが激しくなるだろう。俺はそう思うと、つつい溜め息をついてしまった。

俺たちを乗せた軍艦『イーグル』号は、浮遊大陸アルビオンのジグザグした海岸線を、雲に隠れるようにして航海した。三時間ばかり進むと、大陸から突き出た岬が見えた。

しかし、『イーグル』号は真つ直ぐニューカッスルに向かわずに、大陸の下側に潜りこむような進路を取り、雲の中をとおり、大陸の下に開いている穴に入る。

着艦するとウェールズを先頭に、艦に取り付けられたタラップを降りていった。

「ほほ、これはまた、たいした戦果ですな。殿下」

「喜べ、パリー。硫黄だ、硫黄！」

ウェールズがそう叫ぶと、集まった兵隊が、うおおーっと歓声をあげた。

「おお！硫黄ですと！火の秘薬ではござらぬか！これで我々の名誉も、守られるというものですな！」

老メイジは、おいおいと泣き始めた。

「先の陛下よりおつかえして六十年……。こんな嬉しい日はありませぬぞ、殿下。

反乱が起こってからは、苦渋は舐めっぱなしでありましたが、なに、これだけの硫黄があれば……。」

につこりとウェールズは笑った。

「王家の誇りと名誉、叛徒どもに示しつつ、敗北することができるだろう」

「栄光ある敗北ですな！この老骨、武者震いがいたしますぞ。して、ご報告なのですが、

叛徒どもは明日の正午に、攻城を開始するとの旨、伝えて参りましたよ。

まったく、殿下が間に合って、よかったですわい」

「してみると間一髪とはまさにこのこと！戦に間に合わぬは、これ武人の恥だからな！」

「して、その方たちは？」

「トリスティンからの大使殿だ。重要な用件で、王国に参られたのだ」

「これはこれは大使殿。殿下の侍従を仰せつかっておりまする、パリーでございます。

遠路はるばるようこそこのアルビオン王国へいらっしゃった。たいたもてなしはできませんが、

今夜はささやかな祝宴が催されます。是非とも出席くださいませ」

俺たちは、ウェールズの居室へと足を運んだ。

ウェールズの居室は、王子の部屋とは思えない、質素な部屋であった。

ウェールズは宝箱から手紙を出すと、一度それを読むと、ルイズに渡した。

「これが姫からいただいた手紙だ。このとおり、確かに返却したぞ」

「ありがとうございます」

ルイズは深々と頭を下げると、その手紙を受け取った。

その後、ルイズがウェールズに亡命しろとか言っていたが、ウェールズは亡命はせず、真っ先に死ぬつもりらしい。

王族つてのは、大変だ。誇りやら責任やら、いろいろあるだろう。しかし俺はただ一つ、認めることができないもんがあった。

「ウェールズ。お前は馬鹿か」

「何故そう思うんだい？」

王子を馬鹿って言ったからか、ルイズが怒鳴って注意してきた。

「何いってんのよ！ジュンヤ！すぐに謝りなさい！」

「あのな。誇りとかは、しらねえよ。でもな真っ先に死ぬだど？ふ

ざけんなっ！」

「！？き、君に何がわかる！」

「わからんなあ、そんなもん。誇りを守りたいんなら真っ先に死ぬんじゃねえ！」

必死に戦って、敵を倒して、最後まで生き残ってみろ！ウェールズ！それが男の戦い、誇りだ！」

「！？・・・そ・・・そうだな。確かにその通りだ。わかったよ。

最後まで敵を倒し続け、生き残ってみせよう！

ありがとう、使い魔くん。いや、そういえば名前を聞いていなかったね」

「ジュンヤだ。お前はお前の“誇り”を貫け、もし死んだら俺がその“誇り”を継いでやる！」

「ジュンヤか。いい名だ。もし死んだら、僕の“誇り”きみに預けよう」

「了解だ」

「戦う前に、君みたいな男に会えてよかったよ。」

それからウェールズは机の上に置かれた、時計らしき物を見て言った。

「そろそろ、パーティーの時間だ。」

きみたちは、我々が王国に迎える最後の客だ。是非とも出席してほしい」

[illegible]

俺はいま、パーティー会場にいる。

あのあとワルドだけ部屋に残り、何か話していた。おそらく結婚式の話であろう。

いま王がいろいろ話をしているが、正直どうでもいいので、あまり聞いていなかった。

話が終わったのか、周りが喧騒の雰囲気包まれた。死に前に元気なもんだ、と思った。

しかし、ルイズはこの雰囲気に耐えられなかったようで、外に出て行ってしまった。

まあワルドが行ったので、別に問題ないだろう。

すると座の真ん中で歓談していたウェールズが近寄ってきた。

「ジュンヤ。楽しんでるかいい？」

「まあまあだな。主人は耐えられなかったようだが……」

「ああ。ラ・ヴァリエール嬢だね。まあ、戦争も知らないようだしね、仕方ないさ。

あと聞きたいことがあるんだが、いいかい？」

「なんだ？」

「正直言って勝率はあると思うかい？」

「……無理だろうな。数からして違っし、武器もあちらの方がいいだろう」

「やはりね……。でも、がんばってみるさ」

「死体だけは回収して、トリスティンの姫の元につれてってやろうか？」

「それもいいが、やはり王族として、みんなと一緒にの地で眠りにつ

きたい。すまないね」

「いや。お前がそう言うならいいさ。がんばれよ」

「ああ。君もな」

それだけ言っと、ウェールズは再び座の中心に入っていた。

残された俺は、そろそろ部屋に戻って寝ようと思い、近くにいた給仕に場所を聞いていると、後ろから肩を叩かれた。振り向くと変態が……。

「きみに言っておかなければならぬことがある」

「なんででしょう?」

「明日、僕はルイスはここで結婚式を挙げる」

「ほう!それはおめでたいことで。しかし何故こんなところ?」

「是非とも、僕たちの婚姻の媒酌を、あの勇敢なウェールズ皇太子

にお願いしたくなつてね。

皇太子も、快く引き受けてくれた。決戦の前に、僕たちは式を挙げる」

「それで僕に何の関係が？」

「きみも出席するかね？」

「いえ。いろいろ準備もあるのでね。やめときますよ」

「ならば、明日の朝、すぐに出発したまえ。私はルイズとグリフォンで帰る」

「自分より弱い人に任せるわけないでしょ。自分も残っておきますよ」

「つく！し、しかし、どうやって帰るのだね？」

「帰る方法なんて、いくらでもあります」

「勝手にしたまえ」

「いやだわ……。あの人たち……。どうして、どうして死を選ぶの？わけわかんない。」

姫さまが逃げてって言うてるのに……。恋人が逃げてって言うてるのに、

どうしてウエールズ皇太子は死を選ぶの？」

「そうだな……。あいつは言っていたが、やはり王族としての義務、誇りといったものなんだろう」

「なによそれ。愛する人より、大事なものがこの世にあるっていうの？」

「あいつはあいつなりに、いろんな人たちを守るために戦っている。家族、国民、沢山の人を守らなければいけない。」

それが王族として生まれた義務ってもんなんだろう」

「わたし、説得する。もう一度説得してみるわ」

「ダメだ」

「どうしてよ」

「お前には手紙を届ける仕事がある。

それにあいつはすでに覚悟している。戦う覚悟ってやつを・・・」

ルイズは、ぽつりと、呟くように言った。涙がぽろりと、ルイズの頬を伝った。

「・・・早く帰りたい。トリステインに帰りたいわ。この国嫌い。いやな人たちと、お馬鹿さんでいっぱい。誰も彼も、自分のことしか考えていない。

あの王子さまもそうよ。残される人たちの事なんて、どうでもいいんだわ」

やはり男と女では考え方が違うのだろう。

これ以上ウェールズの言葉を聞いてもわからないし、わかる必要もない。

そう思ったので俺は頷いた

「そついえば結婚するんだってな」

「まだ結婚なんて出来ないわ。まだ立派なメイジにもなれてないし・・・」

（ぼそッ）・・・それにするんだったらジュ、ジュ、ジュンヤがいいし／／／／／／」

後半がよく聞こえなかったし、なぜか突然頬が赤くなった。
俺はルイズの頭に手を乗せ言った。

「そうか……。とりあえず後悔はするなよ。それと困ったら俺を呼べ」

「／／／／／……うん。ありがと／／／／」

俺たちはその後、部屋に戻るため別れ、俺は部屋に入るとすぐに寝た。

明日は戦闘になるので体を休ませておきたい。

明日、ワルドをどう痛めつけてやるうか、俺はそう考えながら眠りについた。

続く

第14話 皇太子と空の国！？

挿絵あり（後書き）

今回は結構長めです。

少し青春した感じです。

それと何故か美形キャラがギャグに走ってしまいます。

次回『第15話 決戦！？』

お楽しみに！！

第15話 決戦！？（前書き）

お待たせしました

冬休みに入るとすべての物事にやる気というものを無くしてしまします

まあ、年越しの前に書いところかなという感じです

とりあえずワルドとの決戦、どうなるかは本編にて……………、

では、どうぞ……………。

第15話 決戦！？

- - - - - side 純耶

いま俺は礼拝堂にいる。

え？帰る準備はいいのかって？

バカ言っちゃいけないな。わざわざ無駄になるようなことはしたくない。

どのみちギーシュ達が迎えに来るんだから、意味ないじゃん。

それは置いといて、どこに俺が隠れているか、気になる人もいるだろう。

けっして某へビみたいにダンボールを被っている訳ではない。

そんな事をすれば、逆に怪しさ満点で見つかってしまうだろう。

そんなことで俺はいま、自身にある『能力』を使って消えている。その能力とは『ぬらりひよんの孫』の総大将であるぬらりひよん、その“畏”である“明鏡止水”を使い、周りから視認できていないのである。

正確には消えているわけではなく、視認できていないだけだ。

俺は結構ウェールズの近くにいるわけで、しかも気付いたら今にも殺されそうだった。

考えている間に結構時間が経っていたようだ。

とりあえず俺は“畏”の発動を解くと、ウェールズの前へと踊り出て、

刺突してきたワルドの杖を、抜刀したデルフの腹で受け止めた。

「よう、ワルド。なかなか刺激的な事をするじゃねえか」

「！？どこから出てきた！僕たち以外、この礼拝堂に居なかった筈だ！」

ワルドは突然出てきた俺に驚いたようで、後ろへ距離を離すと、大きな声で怒鳴ってきた。

「お前に教える必要は、ない！」

俺はそう答え、両手に握ったデルフでワルドに近づくと、切りつけた。

だがワルドは、それを後ろに下がり避けると、呪文を唱えだした。

「ユビキタス・デル・ウィンデ……」

唱えた呪文は『偏在』。

呪文が完成すると、ワルドの体はいきなり分身した。

本体と合わせて、五体のワルドが俺を取り囲んだ。

「偏在か……（だるっ……）」

「そう。ただの『分身』ではない。風のユビキタス（偏在）……
。風は偏在する。

風の吹くところ、何処となくさ迷い現れ、その距離は意思の力に
比例する」

ワルドの偏在は、懷から白い仮面を取り出すと、顔につけた。

別に分かっていたので俺は驚かないが、ルイズはそれに驚いたよう
だ。

ちなみにルイズは、戦闘が始まった頃から、ウェールズに連れられ
離れたところにいる。

ウェールズには式が始まる前に、ワルドが裏切り者と教えているの
で、ルイズの守りを頼んだのだ。

なぜ一緒に戦わないのかというと、実力が違うのでウェールズが邪
魔なのだ。

そう言つてやるとウェールズはめっちゃ凹んでいた。キモかったの
で適当にほめて、立ち直らせた。

「そうか。仮面の男はお前だったか……。フーケを脱獄させた
のもお前だろう」

まあ脱獄も何も、もともと捕まっていなかったしねwww
一応俺はわかっていなかった様子で驚いている感じに見せた。

「いかにも」

そう言うのと五体のワルドが、俺に踊りかかる。

さらにワルドは呪文を唱え、杖を青白く光らせた。

多分あれは『エア・ニードル』、さきほど、ウェールズを貫こうとしたとき使った呪文だ。

俺はそこから飛びのくと、一体のワルドへと近づき、下から切り上げる。

ワルドは杖で受け止めようとしたが、まず身体能力が違う。

通常時でも俺の身体能力は一般人の二倍だ。

まあ二倍といっても体を鍛えているワルドの少し上といった感じだろう。

杖で受け止めたワルドは、衝撃を受け止められずそのままぶっ飛び、壁にぶつかるポンツと音を出して消えた。

「まず一体……」

その後近づいてきた一体を切り裂くと、その後ろにいた一体の腹を思いっきり蹴飛ばした。

それで消え去った偏在を後にし、残りの偏在一体を倒すため周りを見ると、

何時の間にか一体消えていて、ワルド本人がルイズを突き飛ばしていた。

ルイズはそれで気絶したようで、起き上がらない。

まあ、ワルドがルイズを殺すことはないと思うし、ルイズが気絶したのは、この後、俺の計画を行うためにもちょうどいい。

近くにいたウェールズも一緒に突き飛ばされ、また杖で貫かれそうだった。

せつかく助けたのに殺されても困る。

俺は一瞬でワルドに近づくと、持っていた杖を切り裂いた。

俺は計画にウェールズが邪魔になるので、この礼拝堂から出ていくことにした。

「ウェールズ！ここは任せて、お前は外の連中の所に行ってやれ！」

そう。すでに外では戦闘が始まろうとしている。

なのに王族がこんなところに居ては、士気が駄々下がりだろう。

「し、しかし、それでは君が……」

「お前は王族だろう！お前はお前の“意思”を貫け！」

「！？わ、わかった！」

「早く行け！頑張れよ、親友！」

「ああ。君もな、親友！」

そう言っているとウェールズは礼拝堂をあとにした。

俺は別にウェールズを助けようとは思わない。ウェールズにも戦う理由がある。

それを邪魔するのは、俺には出来ない。

ちなみに会話していた間もワルドと戦っていた。

これはけっこう面倒だった。ワルドは杖を切られたので普通の杖で戦っている。

俺は邪魔者が居なくなっただけで計画を進めることにした。

俺はワルドの杖を下から切り上げ、弾き飛ばすと、デルフを鞘へと戻す。

そこから俺はワルドの腕を取ると、一気に背負い投げをした。

ワルドは床に叩きつけられると、その衝撃で肺の中にある空気が出ていき、苦しそうだ。

俺はワルドに馬乗りになると、無理やり目を合わせた。そこで俺は最後の警告を発した。

「ワルド。お前は どうしたい？」

「……僕は目的を達成するまで、死ぬわけにはいかない」

「そうか。その目的、俺が代わりに叶えてやるう」

「なに？ふん……、無理に決まっている。私の望みは聖地まで行くこと。」

「しかしあそこはエルフの領地。奪還することになる。そんなこと君でも無理だろう」

「俺に不可能な事はない」

「無理だな。一人で何が出来る……」

「……少し面倒になってきた。」

「こいつはいろいろ使えるから、部下にしようとしたがグチグチうるさい。」

「なので俺は最後の手段にうつる事にした。」

「……しかたない。これは使いたくなかったが、お前が悪い」

「？なにをする気だ・・・」

「こうするんだよ・・・」

すると俺の左眼に赤い鳥のような模様が写る。

俺はワルドと目を合わせると言った。

《・・・鋼乃 純耶が命ずる。 ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。俺の部下になれ！！》

キューーーーーーン

俺がそう言つと左眼から赤く光った鳥のようなものが、ワルドの目へと飛んでいった。

いまワルドの頭の中ではいろいろ変化しているだろう。

しばらく経つとワルドが立ち上がり、俺の前で跪き言った。

「Yes, My Lord（はい、我が主）」

計画どおり・・・。

俺は計画どおり言ったので、計画を進めるため、ワルドに始めての命令を出した。

「ワルド。お前はレコンキスタでは幹部のような者だろう?。」

「はい。そうですが、それがなにか?。」

「レコンキスタのトップが、クロムウェルという男というのは知っているな?。」

「はい」

「やつの指にはある指輪が嵌めてある。それを盗って来い。これは任務だ。できることならクロムウェルも殺して来い」

「Yes , My Lord」

そう言って出て行くとしていたので呼び止めた。

「まあ、さて。話はまだある」

「何でしよう閣下」

閣下てなんやねん・・・。

まあいいけど。それはとりあえず置いて話を進める事にした。

「任務が終った後、その格好のままではいろいろまずい。

これを持って行け。任務を終えた後は俺のところへ来い」

Yes,
My Lord

そう言つてワルドは礼拝堂を出て行つた。

ちなみに服は黒の騎士団の服だ。なぜそれを選んだかって？だってカッコイイじゃん！

[illegible]

俺はもう一つ用事があるのを思い出したので、城の中を散策していた。

ルイズが起きる前に見つけなければいけない。

兵隊さんが横を通っているが、“畏”を発動しているため、見つかることはない。

探していると宝物庫を見つけた。

ビシンッ、バシンッ、ビシンッ

「早く起きないと、頬がおかしくなっちゃうぞ」

「……うう……うん？……って、イタ！……ち
よ……痛い！痛いわよ！」

「おお！起きてたのか！気付かなかったぜ！」

「ねえ。それ嘘でしょ……」

「うん！」

自身たつぷりいうと殴られた。

「い、いたい……」

「あんたのせいじゃない！……もう（助けに来てくれたと
きはカッコよかったのに（ボソッ）（」

「ん？なんか言ったか？」

「な、何も言っていないわよ！／＼／＼／＼」

痛がっていたので後半が聞こえなかったが、何を言ったのだろう・・・。
ま、いつか！

すると突然地面が盛り上がり、そこからモグラが出てきた。

「こら！ヴェルダンデ！どこまでお前は穴を掘る気なんだね！いいけど！って・・・」

その後、土に塗れたギーシュが出てきて、俺たちに気付くと、とぼけた声で言った。

「おや！きみたち！ここにいたのかね！」

「まあな。お前らはあの後、どうなったんだ？」

「ああ。あの後傭兵達は倒したんだが、フーケは何時の間にかいなくなっていてね。」

その後、寝る間も惜しんで君達を追って、アルビオンまで来たの

さ」

「キュルケ達は？」

そのとき、ギーシュの傍らにキュルケが顔を出した。

「呼んだかしらジュンヤ」

「いたのか・・・」

「アルビオンについたはいいが、何せ勝手がわからぬ異国だからね。でも、このヴェルダンデが、いきなり穴を掘り始めた。後をくつついていったら、ここに出た」

巨大モグラは、ルイズの指に光る『水のルビー』に鼻を押し付けている。

キモイのでぶっ飛ばした。このモグラ野郎め！野郎かは知らんが・・・。

「とにかく脱出しよう。敵がそこまで来ている」

「逃げるって、任務は？ワルド子爵は？」

「手紙は手に入れた。ワールドは裏切りもん。あとは帰るだけだ」

「なあんだ。よくわかんないけど、もう、終っちゃったの」

俺たちは穴へ入ると、上から多人数の声が聞こえた。
たぶん王族派を打ち破った貴族派だろう。

穴を進んでいるとアルビオンの下側に出た。

そこにはタバサとシルフィードがいた。

モグラをシルフィードが咥え、俺たちは背中に乗った。

背中に乗ったのを確認するとタバサは、シルフィードを出発させた。

というか狭い。背中結構広いはずなのに狭い。

何故かというと、女子三人が俺に引っ付いてくるからだ。

俺がシルフィードの背中の中だとすると、右腕にルイズ、左腕にタバサ、背中にキュルケである。

キュルケの胸は俺の背中につぶれている。このやわらかさは男にとつて凶器だろう。

ギーシュはシルフィードの背中の中端ここに居る。ものすごくテンションが低い。

そういえば言うのを忘れていたが、『風のルビー』は摩り替えておいた。

いまウェールズの指にあるものは、ただのガラスである。

本物は俺のポケットの中にある。盗られると面倒な事になるし、始祖のオルゴールを発動できない。

俺は今後の計画を考えながら、戦いで疲れた体を休ませた……。始

続く

第15話 決戦！？（後書き）

今回はまあまあ長くなったでしょう。

新たな能力も出したりいろんな事をしました。

ここからいろんな展開があります。

なのでこれからも読んでってください。

次回『第16話 城への帰還、そして計画』

楽しみに！！

第16話 城への帰還、そして計画！？（前書き）

今年初めてのゼロ魔投稿！！

なかなか書く気になれなかったのが原因です…。

第16話 城への帰還、そして計画！？

- - - - - s u d e

純耶

俺たちが王宮の中庭に降り立つと、マンティコアに跨った衛士たちに囲まれた。

降り立つ前にこいつ等がいろいろ警告してきたが、タバサは見事に無視した。スルースキル発動である。

衛士たちは腰からレイピアのような形状をした杖を引き抜くと、一斉に掲げた。

するとその団体の中から、ごつい体にいかめしい髭面の隊長が、大声で俺たちに命令してきた。

「杖を捨てる！」

その言葉に俺たちは一瞬むっとした表情を浮かべたが、タバサが首を振っていった。

「宮廷」

正直俺には短すぎて一瞬わからなかったが、どうやら宮廷だから正直に言うこと聞いといけ、

ということらしい。俺たちは仕方なしにその言葉に頷き、杖を地面に捨てた。

「今現在、王宮の上空は飛行禁止だ。ふれを知らんのか？」

ルイズがシルフィードから、とんとと軽やかに飛び降りると、毅然とした声で名乗った。

「わたしはラ・ヴァリエール公爵が三女、ルイズ・フランソワーズです。怪しいものじゃありません。

姫殿下に取り次ぎ願いたいわ」

正直言おう。ルイズさん。いきなりそれでは逆にあやしいです。いきなり侵入者が姫に会いたいと言ってきたら、普通に怪しいわ。ビックリだよ。

たとえ名乗ったとしても、そんなこと言ったら捕まえなくなるわ。

しかし隊長ばい人は口ひげをひねって、目の前のルイズを見つめた。その後隊長ばい人は、掲げた杖を下ろした。

「ラ・ヴァリエール公爵さまの三女とな」

「いかにも」

たこにも。……冗談です。」

ルイズは、ない胸を張って隊長の目を真っ直ぐに見つめた。

「なるほど、見れば目元が母君そっくりだ。して、要件を伺おうか？」

「それは言えません。密命なのです」

「では殿下に取り次ぐわけにはいかぬ。要件も尋ねずに取り次いだ日にはこちらの首が飛ぶからな」

言えるなら密命っていわねえよ。バカじゃないかコイツ……。まあ仕事だけだね。

困った声で隊長ばい人も言ってるしね。この人も困ってるんだろう。

「密命なんでね。言えないのは当然でしょうに……」

俺はシルフィードから飛び降りるとそう言った。隊長ばい人は俺を見ると、苦い顔つきになった。

「無礼な平民だな。従者風情が貴族に話しかけるといふ法はない。黙っている」

「っは！相手の力量も測れない奴に、言われる筋合いはないな。まったく笑わしてくれる」

「なんだと！？」

俺が挑発すると相手の隊長は、俺の言葉に怒ったようだ。沸点が低いな……。そうするとルイズが仲裁に入ってきた。

「ちょっと！あんまり怒らせないで！」

「事実を言っただけだ。何も嘘は言っていない」

「この平面程度が図に乗るな！」

「灸を据えてやるのか？貴族サマ……」

「少し黙ってて……！もう。すぐに挑発するんだから……」

隊長が呪文を唱えようとしたとき……。

宮廷の入り口から、鮮やかな紫のマントとローブを羽織った人物が、ひょっこりと顔を出した。
中庭の真ん中で魔法衛士隊に囲まれた俺たちの姿をみて慌てて駆け寄ってきた。

「ルイズ！」

駆け寄るアンリエッタの姿を見て、ルイズの顔が、薔薇を撒き散らしたようにぱあっと輝いた。

「姫さま！」

二人は、一行と魔法衛士隊が見守る中、ひっしと抱き合った。

「ああ、無事に帰ってきたのね。うれしいわ。ルイズ、ルイズ・フランソワーズ……」

「姫さま……」

ルイズの目から、ぽろりと涙がこぼれた。

「件の手紙は、無事、このとおりでございます」

ルイズはシャツの胸ポケットから、そつと手紙を見せた。
アンリエッタは大きく頷くと、ルイズの手をかたく握り閉めた。

「やはり、あなたはわたくしの一番のおともだちですわ」

「もったいないお言葉です。姫さま」

友達と思うなら、戦場に行かすな。アンリエッタはいつも常識が足らなさ過ぎる。

アンリエッタは一行にウェールズの姿が見えないことに気付くと、顔を曇らせた。

「ウェールズさまは、やはり父王に殉じたのですね」

ルイズは目をつむり、神妙に頷いた。

「……して、ワルド子爵は？姿が見えませんが。別行動をとっているのかしら？」

それとも…、まさか…、敵の手にかかって？そんな、あの子爵に限って、そんなはずは…」

ルイズの顔が曇った。俺はこれ以上ここで話すのはマズイので、こ
こらで部屋に移ることにした。

「ルイズ。これ以上は色々和不味い。一旦何処か部屋に移ろう」

「…そうね。姫さま。一度部屋に移ってから、話すことにしましょ
う。色々悪い話もありますので…」

「…そうですね。隊長どの。彼らはわたくしの客人ですわ」

「さようですか」

アンリエッタは周りの魔法衛士隊に説明すると、隊長は納得しあつ
けなく杖をおさめ、
隊員達を促し、再び持ち場へと去っていった。

アンリエッタは再びルイズに向き直った。

「とりあえずどこか部屋へと移ることにしましょう。話はそれから
聞きます」

[illegible]

「裏切り者？」

「はい。ワルドは裏切り者だったんです。姫さま」

俺はいまアンリエッタの部屋にいる。ルイズも一緒だ。

キュルケとタバサ、そしてギーシュは謁見待合室に残してきた。ルイズはいまアンリエッタにこれまでであった事柄を話していた。話を全て聞いたアンリエッタは悲観にくれていた。

「あの子爵が裏切り者だったなんて……。まさか、魔法衛士隊に裏切り者がいるなんて……」

アンリエッタは、かつて自分がウェールズにしたためた手紙を見つめながら、はらはらと涙をこぼした。

「姫さま……」

ルイズは、そつとアンリエッタの手を握った。

「わたくしの手紙の所為で、ウェールズさまは殺されそうになったわ。

裏切り者を、使者に選ぶなんて、わたくしはなんていうことを…」

俺はその言葉に言った。

「確かにアンリエッタがやったことは悪い事かもしれないが、「ジュンヤー！」まあ待て。怒るなよ。

……続けるが、確かに悪い事かもしれないが、それは既に終わった事だ。終わったことは仕方ない。

問題はその後、どう反省して、どう解決するかだ。それに裏切り者なんて簡単に判る事じゃないしな」

「……そう、ですね。わかりました。ジュンヤさん。あなたの言葉で少しは気が楽になりました。」

アンリエッタは俺の言葉を聞くと、俺に向かい少し微笑んだ。

「そうでもないさ。…ただ、可愛い女の子の悲しむ顔は、見たくなかっただけさ」

「（キュン）／＼／＼あ、ありがとうございます／＼／」

なぜかアンリエッタの顔が赤くなり、悲しそうな顔から嬉しそうな顔になった。

反対にルイズは不機嫌な顔になったあと、罵声を上げながら俺の足を踏みつづけている。

「この犬！（ドスッ）この犬！（ドスッ）このバカ犬~~~~~！！
（ギョウウウ~~~~！！）」

「…なにやってんのさ」

別に痛くはないが、靴が汚れるので地味に困る。

「私は可愛くないって言うの！？しかも姫さまの前でもカッコつけちゃって！

ジュンヤのバカ！ヘンタイ！もう知らないんだからねっ！（ぷいっ）」

……可愛いな〜ルイズは。さすがツンデレ。嫉妬で怒っちゃうだなんて可愛すぎる。

「そんな事ないよ。ルイズも可愛すぎて、すぐにでも襲いたいぐら
いだ」

「お、襲う／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／
／／／」

襲うって言ったら、瞬間的にルイズの顔は赤くなってしまった。ウ
ブだねえ。

「べ、べつにキキキキ、キスぐらいならしてあげてもいいわ！／／
／／」

ルイズはそう言つと、こちらに顔を向け、目をつぶると唇を突き出
してきた。
くれると言つなら、さっそく貰いましょう。もちろんディープで。

「…いただきます。（ぶちゅ～～～～）」

「…んっ…んう…ちゅ……ちゅぷ……ぷはっ。な、なんでディープ
キスなの／＼／＼／」

「嫌じゃないだろ？」

「……………うん」

「じゃあ良いじゃねえか。……………うん？」

ルイズと話していると、アンリエッタが羨ましそうにこちらを見ている。

「…どうした。アンリエッタ」

「／／／い、いえ。別にわたくしもジュンヤさんとキスをしたいとか、ついでにディープがいいとか、

その後も色々考えているとか、考えていませんから／／／／／そんなにハレンチではありませんからね！」

「いや願望まるだしだから。どんだけしたいんだよ、って感じだから…」

「…へう／／／／」

まさかこの世界でへう、を聞くことになるとは…。ゼロ魔、侮れねえぜ。

「まあ良いけどな。（ぶちゅ～～～～）」

「んう～～～～／／／／（ぱたり）」

気絶してしまった。どうやら刺激が強すぎたようだ。でも自重はしません。

「帰るか」

「そうね」

俺たちはアンリエッタをベットに寝かせると、学園に帰ることにした。

ああ、そういえばルイズがアンリエッタに水のルビー返す場面とか、そういうところは既に終わらせていたので、ルイズは水のルビーを持っています。

帰り道ギーシュはシルフィードの上から落ちたので、放っておいた。俺は王宮に行くときと一緒だけだね。ちなみにキュルケの胸は張りがあります。

[illegible]

ワールド・マチルダ

かつては名城と謳われていたニューカッスルの城は、惨状を呈していた。

生き残ったものに絶望を感じさせ、死者に鞭打つ惨状である。城壁は度重なる砲撃と魔法攻撃で、瓦礫の山となり、無残に焼き焦げた死体が転がっている。

攻城に要した時間はわずかだったが、反乱軍……いや、いまやアルビオンに王は存在しないのだから、反乱軍『レコン・キスタ』は、すでにアルビオンの新政府である……の損害は想像の範囲を越えていた。

そして戦が終わった二日後。

照りつける太陽の下、死体と瓦礫が入り混じる中、ワルドは捜すフリをしながら、

自らの主人、ジュンヤの命令を遂行するため、この二日間タイミングを計っていた。

純耶から言われた命令は三つ。

一つ目は、アルビオン皇太子ウエルズの死体の処分。

これは戦時中、草原に倒れているのを見つけ、死んでいるのを確認すると、

人気がない丘に穴を掘るとその埋めて、墓標も立てておいた。

二つ目は、反乱軍レコン・キスタ、その総司令官オリヴァー・クロムウエルの殺害。

これはなかなか一人のところを狙えず、いまだ殺せていない。早急に殺さなければ…。

最後に三つ目は……、

「ワルド子爵」

！？

「ああ。閣下でしたか」

「驚かせてすまないね」

「いえ。それで何か御用でしょうか。閣下」

「いやなに。アンリエッタ殿下がウエルズ皇太子に送ったというラブレター……、

ここにあると聞いていたが、見つかったかどうか聞きに來ただけ

だ。どうだね、子爵」

「いえ。いまのところは見つかっておりません」

「そうか。ところで皇太子の死体の方はどうだね」

「それもいまのところは……」

「そうですか……。まあ良いでしょう。アルビオン王国は倒れた。これからは私たちの時代となる」

「……………」

残念ながらその願いはここで終わる……。

ワルドは周りに人がいない事を確認すると、腰の杖を抜き、クロムウェルに突きつけた。

クロムウェルは突然のワルドの行動に驚く。

「ど、どうしたのかね、子爵。私に杖を向けるとは厳罰ものだぞ」

「貴方には死んでもらいますよ、閣下。いえ、オリヴァー・クロムウェル」

「な、なぜだ！金か？金ならいくらでもやってやる！地位だろうが、何でもやるから命だけは…」

「命令ですよ、私の主人のね…」

「や、やめ」

「死ね！《エア・カッター》」

ざしゅっ！！

首から切り裂かれた頭は、苦痛の表情を浮かべながら転がり落ちた。首からは噴水のように血が吹き出ている。まったく…汚い死体だな…。

「…よし。つぎは…」

私は頭のなくなった死体の指から指輪を抜きさると、内ポケットへとしまった。

これが三つ目の命令でこの指輪は《アンドバリの指輪》というらしい。

指輪を締まった瞬間、殺気がしたので前に転がり込んだ。

「あなたはレコン・キスタの幹部じゃなかったかしら」

後ろを振り返るとそこにはローブを深く被った女がいた。
こんな奴はいままで見たことはない。幹部の一人だろうか…。

「新たな主人が出来たのでな。早速だが帰らせてもらう」

「素直に帰らせると思っ？」

「無理にでも帰るさ」

ざしゅ！！

私は後ろから襲ってきた何かを、持っていたフェンシングのような形状の杖で切り裂くと、
ここから逃げるために魔法を唱えだした。

「ユビキタス・デル…」

「させないわよ！」

女はどういう仕掛けか、私の周りを人形に囲ませると、その人形の手を持っている武器で襲ってきた。

呪文を完成させるため避けながら唱えるが、一つ二つと避けれたが、三つ目の攻撃を避けようとしたが、足元の石に躓き体勢を崩してしまった。

そこに敵の武器が迫ってきて、私の体に当たろうとするが……、

「やらせないよ！」

ガキン！！

「つく！何者だ！」

「あんたに名乗る名前なんてないね！…ワルド。危機一髪だったね。大丈夫だったかい？」

「ようやく来たか…。来ないかと思ったぞ。フーケ」

そう私を助けたのは土くれのフーケ。

主人からもう一人の同士がいると聞いていたが、フーケと聞いたときは驚いた。

「ここに来るのに移動手段がなかったからね。遅いのは勘弁してほしいよ」

「まあ、助けてくれたお礼は後でしょう。いまはこの女をどうにかする」

「こいつは何なんだい？」

「知らん。主人に聞けば、何かわかるかも知れんな」

「あいつに会わないと行かないのかい。まあいいけどねえ……」

すると我慢が出来なくなったのか、女が怒鳴ってきた。

「女が一人増えようが関係ないよ！二人まとめて死んでもらう！」

「っは！嫌なこった！あんたが死にな！」

「こちらは急いでのね。勝手に逃げさせてもらう」

僕は呪文を唱え魔法を発動させた。

《ユビキタス（偏在）》

合計五人に偏在すると、もう一度呪文を唱えだした。

「それ以上唱えさせないよ！」

「あんたの相手はわたしだよ！」

フーケは土のゴーレムを作り出すと、女を攻撃し始めた。

女も手持ちの人形では、巨大なゴーレムに苦戦しているようだ。

その間に呪文を完成させた私は魔法を発動させるため、フーケに話しかけた。

「フーケ！そこを離れろ！」

「！？つく」

フーケが離れるのを見届けると、私はその女に向け魔法を発動させた。

《《カッター・トルネード》》

三人がかりの魔法発動である。

別に精神力を三人分使っているわけではなく、効率よく魔法を発動させて威力を高めている。

魔法を発動させると、フーケをつれ、私たちは逃げ出した。

勝つための戦いではなく、逃げるための戦いであるため、勝つ必要はない。

偏在の五人のうちの残り二人には相棒のグリフォンを呼びにいった。一人は護衛である。

私たち二人はグリフォンに乗ると駆け出した。

「このグリフォンでトリスティン王国までいけるのかい？」

「ここから滑空して飛んでいけば行ける。飛ぶわけではないからな」

「それならいいけどね」

私たちは主人のいるトリスティンまでいくため、グリフォンで森を駆け抜けた。

続く

第16話 城への帰還、そして計画！？（後書き）

結構長くなりました。

いい感じに終わったのでよかったです。

次回『第17話 始祖の祈禱書』

楽しみに！！

第17話 始祖の祈禱書！？（前書き）

少し今回はエロが多いです。

まあ一応大事なところは隠してはいるので、大丈夫だと思います。

ではどうぞ…。

第17話 始祖の祈祷書！？

- - - - - side オス
マン

オスマンは王室から届けられた一冊の本を見つめながら、ぼんやりと髭をひねっていた。

表紙はボロボロ、色あせた羊皮紙のページは茶色くくすんでおり、今にも破れてしまいそうだった。

ふむ……、と呟きながら、オスマンはページをめくった。そこには何も書いていない。

およそ三百ページぐらいはあるだろうか、その本はどこまでめくっても真っ白であった。

「これがトリステイン王室に伝わる、『始祖の祈祷書』か……」

伝承には始祖ブリミルが記したという呪文があるはずなのだが、呪文のルーンどころか、文字さえ書かれていない。

それもそのはず。呪文を見るためには虚無を使う“担い手”と、水のルビーが必要なのだ。

それを知っているのはルイズに召喚された転生者の純耶と、ロマリ

アのヴィットーリオ。

予想ではあるが、ガリアの王であるジョゼフだけだと思われる。

「まがい物じゃないかのう？」

真正正銘本物であるが、事実を知らないオスマンがそう思うのも、仕様がなかったことであつた。

それにこの手の『伝説』の品にはよくあることで、証拠に一冊しかないはずの始祖の祈祷書が、

各地の貴族、寺院の司祭、各国の王室にあり、いずれも自分の始祖の祈祷書が本物だと主張している。

本物が偽者かわからぬ、それらを集めただけで図書館が出来るといわれているくらいだ。

「しかし、まがい物にしても、ひどい出来じゃ。文字さえ書かれておらぬではないか」

本物なんですがね……。まあそれは最もであり、オスマンが各地で見た始祖の祈祷書には、

ルーン文字が躍り、祈祷書の体裁を整えていた。しかし、この本には文字が書かれていないのだ。

これはいくらなんでも詐欺としか思いようがない。知らない人は皆そう思うであろう。

その時ノックの音がした。オスマンは秘書を雇おうと心で思いながら、来客を促した。

「鍵はかかっておらぬ。入ってきなさい」

扉が開いて、一人の貧乳、もといスレンダーな少女が入ってきた。桃色がかったブロンドの髪に、大粒の鳶色の瞳。当然ルイズである。

「わたくしをお呼びと聞いたものですから……」

ルイズは言った。オスマンは小さな来訪者を歓迎すると、改めて、先日のルイズの労をねぎらった。

「おお、ミス・ヴァリエール。旅の疲れはいやせたかな？ 思い出すだけで、つらからう。

だがしかし、おぬしたちの活躍で同盟が無事締結され、トリステインの危機は去ったのじゃ」

優しい声でオスマンは言った。

「そして、来月にはゲルマニアで、無事王女と、ゲルマニア皇帝との結婚式が執り行われることが決定した。きみたちのおかげじゃ。胸を張りなさい」

ルイズはそれを聞いて、ちょっと悲しくなった。
どうやってない胸を張れと言っのか…（ギロリッ）……もちろん冗談である。

幼馴染のアンリエッタは政治の道具として、好きでもない皇帝と結婚するのだ。

王族であるアンリエッタには仕様がなしたことなのだが、悲しいことには変わりがない。

ルイズもあんなおっさんとは結婚したくない。

オスマンは、しばらくじっと黙ってルイズを見つめていたが、思いだしたように
手に持った『始祖の祈祷書』をルイズに差し出した。

「これは？」

ルイズは、怪訝な顔でその本を見つめた。

「始祖の祈祷書じゃ」

「始祖の祈祷書？これが？」

王室に伝わる、伝説の書物。国宝のそれが、なぜオスマンの手の中にあるのだろうか。

「トリスティン王室の伝統で、王族の結婚式の際には貴族より選ばれし巫女を用意せねばならんのじゃ。」

選ばれた巫女は、この『始祖の祈祷書』を手に、式の詔を詠みあげる習わしになっておる」

「は、はあ」

ルイズは、そこまで宮中の作法に詳しくはないので、気のない返事をした。

「そして姫は、その巫女に、ミス・ヴァリエール、そなたを指名したのじゃ」

「姫さまが？」

「その通りじゃ。巫女は、式の前より、この『始祖の祈祷書』を肌身離さず持ち歩き、

詠みあげる詔を考えなければならぬ」

「えええ！詔をわたしが考えるんですか！」

「そうじゃ。もちろん草案は宮中の連中が推敲するじゃろうが……。」

伝統というのは、面倒なもんじゃのう。

だがな、姫はミス・ヴァリエール、そなたを指名したのじゃ。これは大変に名誉なことじゃぞ。

王族の式に立会い、詔を詠みあげるなど、一生に一度あるかないかじゃからな」

アンリエッタが、幼い頃、共に過ごした自分を式の巫女に選んでくれた。

ルイズはきつと顔を上げ、言った。

「わかりました。謹んで拝命いたします」

ルイズはオスマンから『始祖の祈祷書』を受け取った。
オスマンは目を細めて、ルイズを見つめた。

「快く引き受けてくれるか。よかったよかった。姫も喜ぶじやろうて」

ルイズが祈祷書を受けとる。

それはこの“ゼロの使い魔”という物語が始まる切っ掛けである。
今後ルイズと純耶には幾度の困難が待ち受けていることであろう。

そんな事も知らないルイズは祈祷書を胸に抱き、オスマンに一礼すると学院長室を出た。

side 純耶

え？何故かって？そりゃあここには貴族の風呂はあるが、平民用の風呂はサウナ風呂だったからだ。

まあ、サウナ風呂は共同で時々混浴みたいにメイドさんが入ってくるときがあるので、眼福だった。

何故俺だけなのかというと、俺は『我らの剣』といわれ、この学院に勤務する平民の英雄だし、

439

サウナ風呂は密室なので、メイド達の匂い、といってもいい匂いなのだが、凄い籠るのである。

匂いで悶々するし、正直なんかメイドたちを襲いかけた。理性で抑えたが……。

俺が襲わないとわかると、メイドたちが逆に襲ってくる。密室の中でくっ付いてきたり、

胸を当ててきたり、俺の息子を触ろうとしたり、こうスキンシップが激しくなるのだ。

というかもう無理だった。襲っちゃいました。総勢50人以上いたが、全員朝までやりました。

俺の体は最強だった。朝までやったが、まだまだいける気がした。絶倫である。

まあ流石に妊娠は勘弁なので、その辺は自重したが……。つーか、シエスタ激しすぎ……。

エロ話はこの辺で良いだろう。

話は戻って風呂だが、原作どおりマルトーに頼み、古い大釜を貰うと、

ギーシュに頼んで（命令）鍊金してもらい、直してもらった。

その後は入るとき火傷しないように底に木の板を置くと、大釜に水を入れ、火を焚いた。

大抵いい温度になると、俺は服を脱ぎ、風呂に入った。ちなみに設置場所も原作と一緒にだ。

「ふー。すげー、いい気持ちだわ、これは」

さすが風呂は違う。この気持ちよさは格別だ。

特にこっちに来てからは一度も入ってなかったので、凄く気持ちいい。

なんかいままでの疲れが流されていくようだ…。

俺は頭にタオルをのせ、鼻歌を歌った。

その時大釜の近くにある壁にたてかけていたデルフが、話し掛けてきた。

「いい気分みてえだね」

「ああ、いい気分だ」

「ところで相棒。メイドたちを襲うのもいいが、あの娘っ子はてめめにしねえのか？」

「ルイズに手を出すと親がうるさそうだしな」

流石にあの『烈風』であるカリーンと戦う勇氣はない。

勝てると思うが、あの母親はなぜか恐怖を感じる。いつそあれもハーレムにいれてやろうか…。

「ところで、伝説の剣さんよ。なんか思い出したか？」

「いんや、何も思いだせねえな」

「まあ六千年も生きりゃあ、忘れるわなあ…」

まあ俺はいろいろと知っているんだが…。

「何分大昔の事だからな。ところで相棒、誰か来たみてえだぜ」

俺もさつきから感じてはいたが、やつときたのか…。

訪問者は月の光に照らされ、人影がはつきりしてくる。

「誰だ？」

俺が声をかけると、人影はぴくっ！として、持っていた何かが落ちようとしていた。

俺はそれを確認すると風呂から飛び出て、その落ちかけていた物をキャッチした。

「おっと。危なかったな、シエスタ」

「／／／／／」

「あ！あれです！とても珍しい品が手に入ったので、ジュンヤさんにご馳走しようと思って！

今日、厨房で飲ませてあげようと思ったんですけどおいでにならないから！」

「ご馳走？」

風呂に入っただまま、俺は言った。

多分お茶だろう。いやいや懐かしい。俺お茶好きなんだよね。渋い感じがいい。

「そうです。東方の、ロバ・アル・カリイエから運ばれた珍しい品とか。『お茶』っていうんです」

「へえ、それは楽しみだな」

やっぱりそうだった。

まあこれで間違ってたなら、俺的には困るけどな。お茶好きだし。

シエスタは持ってきたティーポットから、カップに注ぐと俺に差し出してきた。

「ありがとう」

俺はそれを受け取ると、中身を口に含んだ。

お茶のいい香りが鼻を通り、独特の渋みが口に広がる。

ああ。お茶最高。さすが日本。懐かしさに少し涙が出た。

「はわわわ！ど、どうしたんですか！だいじょうぶですか！」

シエスタがそれを見たのか風呂釜に身を乗り出してきた。

淵に乗った巨乳が湯気によって、透けてきた。ちなみに平民はブラジャーなどをしない。

「いや、大丈夫だ。すこし故郷の事を思い出ただけだ」

「そういえばジュンヤさんは東方のご出身でしたね」

ルイズ以外には東方の出身ということになっている。

「まあな。そういえばよく俺がここにいてわかったな」

俺がそう言つと、シエスタは顔を赤らめた。

「え、えと、その。たまにここで、こうやってお湯に浸かってるのを見ていたもんですから……」

「覗きか？」

俺がそう指摘すると、シエスタは慌てて首を振った。

「いえ、その、そういうわけじゃ！」

釜の周りはこぼれたお湯でぬかるんでおり、シエスタは慌てた拍子に足を滑らせた。

わっ、とわめいて前のめりに釜の中に滑り落ちてきた。

「きゃあああああッ！」

シエスタは悲鳴をあげ、どぼーんと釜の中に落ちてきた。

「…大丈夫か？」

「だ、だいじょうぶですけど…、わーん、びしょびしょだあ……」

お湯に濡れたシエスタは、お湯から顔を出した。先程湯気によって少し透けていた服は、

お湯により完全に透け、メロンのような胸のてっぺんにはポチツと乳首が透けていた。

シエスタは俺が裸だった事を思いだしたのか、顔を赤らめ下を向いた。

しかしそんな事をすれば、視線の先に俺の息子があり、余計に顔を赤らめた。

「とりあえずシエスタは服を脱げ。風呂は裸ではいるもんだ」

「え！？そ、そうですね。じゃあ…」

シエスタは一度釜から出ると、服をぽんぽんと脱ぎ始めた。上着を脱ぐとき、たわわな胸がぷるんつと飛び出てきたのはすごい興奮した。

服は乾かすため薪を使って火の近くに干し、シエスタは再度お湯に浸かってきた。

シエスタの裸体はまさに女の子って感じで、肌は白くシミが一つもない。

その辺の貴族のお嬢様よりは綺麗だろう。すっぽんぽんだから、当然いろいろ見えていた。

「うわあ！気持ちいい！あのサウナ風呂もいいけど、こっやってお湯に浸かるのも気持ち良いですね。

貴族の人たちが入ってるお風呂みたい。そうですね、羨ましいならこっやって自分で作れば良いんだわ。

ジュンヤさんは頭がいいんですね」

「そつでもないけどな…」

俺はそう言いながらシエスタを抱き寄せると、そのままたわわに実る胸を揉んだ。

うーむ、やはり柔らかい。キュルケは張りがありそうだが、シエスタは張り、柔らかさ共にあるな。

「ひゃッ！／＼／＼ジユ、ジュンヤさん！？」

俺は無言のまま胸を揉みつつけた。シエスタの声がどんどん上ずってきている。

「…うう…あ…あん…んん…い…いい…」

「なあ、シエスタ。すこしヤラないか？」

俺が聞くとシエスタは少し考え始めた。

しかしシエスタの顔は既に蕩けきっており、答えは決まっているだろうと思えた。

「／／／／／／／…はい」

俺はその答えを聞くと、シエスタの体を後ろから抱き、行動を始めた。

[illegible]

すこしやりすぎた…。

あのセリフとは『お話も、お風呂も素敵だけど、一番素敵なのは……あなた、かも』である

俺はシエスタと別れると、ルイズの部屋へと急いで帰ってきた。

俺はそう思いながらルイズの部屋の扉をくぐった。

「遅かったじゃない。なにしてたの？」

「起きてたのか？まあ何っていわれても、ナニとしか言い様がないな」

「????よくわかんないけど、早く寝ましょ。明日も早いわ」

「まあそうだな」

流石に理解できないようだった。

仕様がなにか。なんたって公爵家の三女だ。そんな事わかんないだろう…。

俺は直ぐにルイズと一緒にベットに入ると、明日のため眠りについた。

何故か窓の外に気配を感じたが、まあ殺気はないので放っておこう。

- - - - - sideキョ

ルケ・タバサ

ルイズの窓の外にはキュルケとタバサがシルフィードに乗り、ぷかぷかと浮かんでいた。

タバサは月明かりを頼りに本を読み、キュルケは窓の隙間からルイズの部屋を覗いている。

その姿は美少女でなかったなら、ただの変態にしか見えなだろう…。

「なによー、ほんとに仲良さそうね。あのルイズが男と寝ているなんて…」

アルビオンの帰る風竜の上、ジュンヤの腕にくっ付き、頬を染めたルイズの顔が浮かぶ。

といっても女子三人くっ付いていたし、全員まんざらでもなかった。

「まったく、わたしだって、ジュンヤのこと狙ってるのに…」

キュルケはイラついていた。

さっきだって平民とお風呂のところで、ナニをやっていたし、この前もメイド達とやっていたらしい。

当然キュルケは処女である。いろいろ誘惑などはやってきたが、キスもしたことないし、

体を許したこともない。そんなときにジュンヤとあったのだ。考えるだけでも濡れてしまう。

「うーん、陰謀は得意じゃないけど、少し作戦練ろうかしら。ねえ

タバサ」

タバサは本を閉じて、キュルケに言った。

「嫉妬」

キュルケは頬を赤らめた。こういうのは珍しいが、ジュンヤが来てからは結構こういう事があった。

「そ、そうかもしれないけど、それは貴方でもしょ！さっきから本が逆よ！」

「……
バシッバシッ
嫉妬」

「ちょ、ちよつと……いた、いたい。凶星だからって殴らないで！」

多少なりともジュンヤは学院の女子に好感を与えていた。

タバサもそんな一人である。まあジュンヤの雰囲気は騎士みただったのもあったが……。

そんな感じでその夜は過ぎていった……。

続
く

第17話 始祖の祈禱書！？（後書き）

まあまあでした。

これからはジュンヤもエロくなったりします。

男ですしね。そんなもんです。

次回『第18話 宝探し！？』

お楽しみに！！

第18話 宝探し!?

- - - - - side

純耶

俺たちがアルビオンから帰ってきて、十日ばかりが過ぎていた。現在にはちょうど昼休み。

俺が昼の鍛錬を終え、魔法学院の東の広場、通称『アウストリ』を歩いていると、

広場のベンチでルイズが座っており、その横にはキュルケが立っていて、なにか言い合っていた。

とりあえず声でもかけてみるか…。そう考えた俺は、二人の近くまで歩いていくと、声をかけた。

「なにしてんだ？二人とも」

「へえ？ジュ、ジュンヤ！？どうしてここに!？」

「あら？ダーリンじゃない。私に会いに来てくれたの？」

「ダーリン言うな…。まあそれはいいとして、何してたんだ？なんか言い争ってたけど…」

俺がそう言つとルイズは手に持っていた何かを後ろに隠した。

…まあ、セーターかな？ここは気が付いてない振りするのがいいだろうな…。

「まあいいや。俺汗流してくるから。じゃあな」

「わたしも一緒に入ろうかしら」

「なに言つてんだよ…」

俺はそう言つと、踵を返し汗を流すため風呂へと向かった。

その後、汗を流した俺は、部屋へと戻ると掃除をしていた。

箒で床を掃いて、机を雑巾で磨く。最近はずいぶん洗濯などを自分でやっているの、

俺がやるとしたら、掃除や少しの雑用なものである。まあ自由時間が増えるからいいけどね。

コンコン

ん？だれだろ。ギーシュかな？いやここ女子の住む塔だし、あんまりこねえか…。

モンモランシーに会いに来てるけど、こっちにはこねえからな、あいつ。

とりあえず誰かわかんないし、早く返事しないと…。

「だれだ？」

「あ、あの…シエスタです…」

なんだシエスタか…。ギーシュならぶっ飛ばしてたのに…。俺はドアを開けるとシエスタにどうしたのか聞いてみた。

「どうしたんだ？」

「いえ、お昼になっても厨房に来られなかったので、お腹でも空いてるのではないかと…」

シエスタはそう言うと手に持っていた料理を見せてきた。

「ああ。そういえば行くの忘れてたわ。すまんシエスタ」

「いえ！そ、それでどうしますか？」

「もちろん食べるよ」

そう言うとシエスタの顔が輝いた。

「じゃあ、お腹いっぱい食べてくださいな」

小さなテーブルの上には、所狭しと料理が並んでいる。

シエスタは、ニコニコしながら隣に座っている。

俺は空いたお腹にエネルギーを送るため、料理に手を出し始めた。

「おいしいですか？」

シエスタが尋ねてきた。ふっ…、その質問は不粋が過ぎるってもんだぜ…。

「もちろん！」

なんかテンションが上がった。ついつい親指をピンツと上げて、宣言してしまった。

「えへへ、たくさん食べてくださいね」

シエスタは、俺の食べる姿を見てうつとりとした目で見てくる。

「どうした？」

俺がそう聞くと、シエスタはあわあわしながら返してきた。

「い、いえ！そんな風に一生懸命食べてもらったら、お料理も、作った人も幸せだなあって！／＼／＼／」

シエスタは顔を真っ赤にしながら、目を大きく見開いて手を振った。

「そ、そうか…」

ほんとにシエスタは可愛い。いやゼ口魔の女の子たち（もとい女性たち）は全員可愛すぎる。

正直言ってサブの女の子たちも殆ど可愛い。不細工なんて早々いなと思う。

「それ、わたしが作ったんです……」

するとシエスタは、はにかんだ表情でそう言った。

「へえ～。うまいじゃないか、料理」

「ありがとうございます。無理を言って厨房に立たせてもらったんです。でも、

こうやってジュンヤさんが食べてくれるから、お願いした甲斐がありました／＼／＼／＼」

ぐはあっ！……！な、なんとという破壊力…。こいつはすげえやつが

現れたもんだ。

シエスタ、グッジョブ！！きみはすごい女の子だよ。これが無意識なら最高だと思う…。

するとシエスタが、慌てた調子で言った。

「ジュ、ジュンヤさんっ！」

「ど、どうした」

「あ、あのっ！」

それからシエスタは、言葉を選ぶようにして口を開いた。

「この前の、その、お話とっても楽しかったです！特にあれ！なんでしたっけ！ひこうき！」

（ぼそ）といってもナニもしましたが……／＼／＼／＼／

ナニいうな……。つか、シエスタそんなに慌てなくてもいいのに。まあシエスタは元々村娘であり世間の事に詳しくないんだろう。俺の話を異国の話しとして捉えたのかな？

この世界の人にとってはあまり馴染みのない話だからな…。

とりあえず俺は話を続けさせるためにシエスタの問い？に頷いた。

「それがどうしたんだ？」

「そうです！魔法ができなくても空が飛べるってすばらしいです！つまり、わたしたち平民でも、鳥みたいに自由に空を飛べるってことでしょう？」

まあ飛行機本体がないと飛べないけどね。まず機械もないしね。コルベールがエンジンっぽいのを作ってるけど、まだ遠く及ばないし…。

「まあ飛べるだろうな…」

俺が適当に相槌を打つと、シエスタは身を乗り出してきた。

「あのね？わたしの故郷もすばらしいんです。タルブの村って言うて、ここから、

そうですね、馬で三日くらいかな……。ラ・ロシエールの向こう側です」

俺は料理を食べながら、相槌を打った。

「ふん」

「何にもない、辺鄙な村ですけど……、とっても広い、綺麗な草原があるんです。」

春になると、春の花が咲く。夏は、夏のお花が咲くんです。ずっとね、遠くまで、

地平線の向こうまでお花の海が続く。今ごろは、とっても綺麗だろうな……。」

シエスタは思い出に浸るように、目をつむって言った。

「わたし、一度でいいからそのひこうきとやらで、あのお花の海の上を飛んでみたいな」

タルブ村には竜の羽衣、もといゼロ戦があるから、そのお花の海の上も飛べるけどな。

コルベールに言えばガソリンぐらい作れるだろうし、固定化も掛かっているはずなので、

飛べることも間違いないだろう。俺のガンダールヴの能力を使えばどんな技でも行えるはずだ。

「そつだ！」

俺が飛行機の妄想をしていると、シエスタが、胸の前で、手を合わせて叫んだ。

叫ぶのはいいが、胸の前に合わせた手によって胸が強調され、少し

やばい事になっている。

俺の息子も強調し始めた。鎮まれ！！鎮まるんだ！！俺の息子よ！！と、冗談はおいといて、とりあえず何が“そうだ！”なのか聞いてみよう。

「なにがそうなんだ？」

「ジュンヤさん、わたしの村に来ませんか？」

正直行きたいです……、俺、ゼロ戦ほしいつす。

「なんでだ？」

「あのね、今度お姫さまが結婚なさるでしょう？それで、特別に私たちにお休みが出来ること

になったんです。でもって、久しぶりに帰郷するんですけど……。よかったら、

遊びに来てください。ジュンヤさんに見せたいんです。あの草原、とっても綺麗な草原」

「そうだな。俺も少し見たくなった」

「あとね？わたしの村にはとってもおいしいシチュー料理があるの。」

ヨシエナヴェっていうんです！

普通の人が見向きもしないで山菜で作るんだけど、とってもおいしいの！是非、ジュンやさんに

食べて欲しいわ。（ぼそっ）ついでにまた私の体も………きゃ！
言っちゃった！」

寄せ鍋ですね。わかります。

あとシエスタ。時々下ネタを言うのはやめてくれ。

「まあ行けたら楽しみにしとくよ」

「はい！一緒に行きましょうね！ジュンやさん！」

「ああ。あとご馳走様。おいしかったよ」

「はい。また持ってきますね」

話が一段落したところで俺の食事が終わり、そこでシエスタと別れることになった。

原作ではシエスタが大胆にもサイトを襲ってしまい、ちょうどルイズが来てその現場を見て、

激怒、そして部屋を追い出されたわけだが、流石にルイズを怒らすのは怖いし、

まずシエスタとは既に熱い夜を過ごした仲なので、俺が襲われる心

配はない。

だがこれでは宝探しに行くフラグが折れてしまったので、どうしようかと俺は唸った。

……ま、どうにかなるでしょ！多分キュルケが誘いにくると思うので、着いていこう。

ルイズの方には、一応連絡しておいて、後で謝ればいいか……。帰ってきたら激怒しそうだな。はぁ……。

その三日後。

とうとうキュルケからお宝探しのお誘いがきた。

ちなみにメンバーは俺、ギーシュ、キュルケ、タバサ、それに調理役にシエスタ。

それと何故かルイズもついてきた。まあ流石に着いてくるわな。これはしゃーないか。

「それじゃあ皆、準備はいいか？」

俺の言葉に他の五人は頷く。

俺はそれを確かめると、声高らかに言った。

「さあ出発だ！！」

俺たちは宝の地図を頼りに、トリスティンの門を出た。
ついに戦争の兆しが見えてきた。まずは戦争の鍵となるゼロ戦を受け取らねば……。
それにしても宝探しか……。わくわくが止まらねえな。このヤローッ！！

続く

第18話 宝探し！？（後書き）

まあまあが出来だと思っています。

あまり書く事はないので短いですがあとがきは終わりです。

次回『第19話 竜の羽衣！？』

お楽しみに！！

にはその巨体を地面に倒れさせた。

ここはトリステインのある廃墟の寺院。かつての壮麗を誇った門柱は崩れ、鉄の柵は錆びて朽ちている。

明かり窓のステンドグラスは割れ、庭には雑草が生い茂っている。

ここは十数年前にうち捨てられた開拓村の寺院であった。荒れ果て、今では近づく者もない。

しかし、明るい陽光に照らされたそこは、放牧的な雰囲気漂っている。旅人がここを訪れたなら、

昼飯の席をここに設けようとするだろうと思われる。オーク鬼の死体が何体もなければ、だが…。

「ふう…これで最後か……」

「ジュンヤさん！」

俺が最後のオーク鬼を倒したところで、離れたところに避難していたシエスタがこちらに走ってきた。

一步一步、走るたびに揺れる二つのメロンは俺の視線をくぎ付けにする。巨乳万歳。乳揺れ万歳。

「大丈夫だったか？シエスタ」

「はい！それにしても流石ジュンヤさんです！あんなにいたオーク鬼を何体も倒しちゃうんなんて！

まるで御伽噺の勇者みたい！」

「ありがとう。でも勇者は言いすぎだと思っけど……」

「そんなことないです！あんなこと出来る人殆どいませんよ！（ふにょん、ふにょん）」

シエスタは腕を絡め、胸を俺の腕に押し付けてくる。
そんなことすれば俺の息子が元気になってくるわけで……。

「こらっ！！エロメイド！！なに人の使い魔に色気だしてんのよ！
！離れなさい！！！」

「嫌です！ジュンヤさんも嫌がつてませんし、ジュンヤさんはミス・
ヴァリエールのじゃありません！」

「きいひいひいひいっ！このデカパイッ！この大きいのが悪いのよ
ー！っの、っのー！」

……ふにょん、ふにょん、もみもみもみ……

「あん／＼／＼んう……ああん……ん……や……やめ・てください……ああん！」

ルイズは暴走したすと、シエスタの後ろに回り込み、シエスタの二つのメロンを揉みだした。

シエスタのその柔らかな胸は、ルイズの両手によって形を変え、口からは喘ぎ声が……。

ルイズが胸を揉んでると、胸の真ん中にポチッと豆みたいのが出てきた。はい、感じてるんですね。

「ダッリンッ、大丈夫だった？怪我とかしてないかしら？（ふにょん、ふにょん）」

すると逆側の腕に近づいてきたキュルケが抱きつき、その張りのありそうな胸を押し付けてきた。

するとルイズはそんなキュルケに気付き、シエスタの胸を揉みながら怒鳴り散らす。

「なにしてんのよ、キュルケ！！ぶっ飛ばすわよ！！！」

「うるさいわね、私の勝手にしょ？貧乳ゼロのルイズ」

「ぐっ！！ゼロの意味が違って聞こえた気がするわ…」

あながち間違ってもいないと思うぞ、ルイズ…。
あふれる胸を強調しながら、ルイズを憐れんだ目でみる。

「貧乳ルイズにはこんな巨乳もの付いてないものね。可愛いそうに…」

「う、うるさいわね！！ロリコン（そっち）の人には需要があるのよ！！」

とうとうルイズが壊れ始めた。ロリコンで……確かにワルドはロリコンぽかったけど、
なんかロリコンで全員危なそうな気がするが、大丈夫か…？。

「ダーリンにあるかはわからないわよ？ねえ、ダーリン？」

「ジュンヤはロリコン（そっち）よね？というかなりなさい！！」

「違います！私ぐらいの丁度よさが良いんですよ！ですよねジュンヤさん？」

三人は俺を囲みながら、言い争い俺に同意を求めてくる。

後ろはキュルケは後ろ。右前がシエスタ。左前がルイズ。

後ろと右前から柔らかい感触が押し付けられ、左前からは体全体を押し付けてくる。

まあルイズには肝心のお胸さんがないからね。体はってます。でも女の子特有の柔らかさがヤバイ。

そんな感じで周りがいろいろ押し付けてくることにより、俺の息子は限界を迎えそうになってきた。

――軍曹！！そろそろ俺の息子が破裂しそうです！！発射許可を！！

――ダメだ！！それではこの小説が18禁になってしまう！！我慢しろ！！

――しかしっ!!ぐっ!!や、やばい!!奥からこみ上げてき
やがった!!

――今すぐ脱出しろ、伍長!!撤退!!撤退――ッ!!

少しメタな電波があつた気がしたが、そこは放って置いてくれ。お
兄さんとの約束だ。

ともかく匂いと感触といろいろやばくなってるので、離してもらう
ことにした。

「と、とにかく三人とも離してくれ。少し色々とやばい……」

俺がそういうと三人は離れていった。……ふう、ギリギリだった。
何がギリギリだったかは男ならわかってくれるはずだ。ここまでき
たらキツイ。

ちなみにタバサは自分の胸を両手で抑えて落ち込んでいる。
えっ?ギーシュ?そんなの序盤でオーク鬼にふっ飛ばされて倒れて
ますが、なにか?

「とにかくここを離れよう。オーク鬼の血で他のモンスターとかが集まってくるかもしれん」

「そうね。宝もなかったことだし」

「なかったというか、殆ど価値もないものだった、けどね」

「そうですね。残念です…」

上からルイズ、キュルケ、シエスタの順番だ。
俺たちは他の奴らが集まってくる前に離れるため、タバサに頼みシルフィードに乗ると飛び上がった。

「不憫」

「ん？何か言ったかタバサ？」

「……………いや」

俺たちはタバサの呟きに疑問を持ちながら、次の目的地までシルフィードの上で休憩し始めた。

いまだに倒れているギーシュを残して……。

「……う……う……ん？……あれ？……み、みんなは？……まさか！？ぼ、僕を見捨てないでくれええええ！！！」

結局ギーシュは気が付いた俺たちが回収しに帰ってきた。まったく、面倒な奴だ……。次は置いていくとしようか。

「そんな！！ひどい！！」

うっせえ!!!

「ぶほおつ!!!」

[illegible]

その日の夜。

ある程度離れた所にキャンプを張った俺たちは夕食を食べた後、話し合いをしていた。

キュルケは地図を広げ、ギーシュはそれに一言言った。

「もう諦めて学院に帰ろう」

ギーシュがそう促すが、キュルケは首を振らない。

「あと一件だけ。一件だけよ」

キュルケは、何かにとりつかれたように、目を輝かせて地図を覗き込んでいる。

そして一枚の地図を選んで、地面に叩きつけた。あれが『竜の羽衣』フラグか？

「これ！これよ！これでダメだったら学院に帰ろっじゃないの！」

「本当かしら？」

「それでなんというお宝だね？」

ルイズがキュルケに怪しんだ視線を送り、ギーシュがお宝の名を聞いた。

キュルケはルイズの視線を無視すると、腕を組んで呟いた。

「『竜の羽衣』」

皆が食事を終えた後、シチューを食べていたシエスタが、ぶほつ、と吐き出した。

そりゃあいきなり自分に関係する物が出てきたら驚くわな…。でも吐き出すのはダメだろ。

「そ、それホントですか？」

「なによあなた。しってるの？場所は、タルブの村の近くね。タルブってどこらへんの？」

キュルケがそういうと、シエスタは焦った声で呟いた。

「ラ・ロシエールの向こうです。広い草原があつて……、私の故郷なんです」

竜の羽衣フラグですね、わかります。

翌朝。

一行は飛ぶ風竜の上で、シエスタの説明を受けていた。

シエスタの説明は、あまり要領を得ず、とにかく、村の近くに寺院があること。

その寺院に『竜の羽衣』と呼ばれるモノが存在していることしかわからなかった。

当然それはルイズ達の話であり、原作を知っている俺には関係ないことだ。

「どうして『竜の羽衣』って呼ばれてるの？」

「それを纏ったものは、空を飛べるそうです」

シエスタは、言いにくそうに言った。

いや、纏うって言うより、乗り込むだけだな。

「空を？『風』系のマジックアイテムかしら？」

「そんな……、たいしたものじゃありません」

シエスタは、困ったように呟いた。

いいえ、たいしたものです（キリッ）

「どうして？」

「インチキなんです。どこにもある、名ばかりの『秘宝』。ただ、地元の皆はそれでも
ありがたがって……、寺院に飾ってあるし、拝んでるおばあちゃんとかもいますけど」

「へえええ」

それからシエスタは、恥かしそうな口調で言った。

「実は……、その持ち主、私のひいおじいちゃんだったんです。
ある日、ふらりとわたしの村に、

ひいおじいちゃんはあるわれたそうです。そして、その『竜の羽衣』で、東の地から、

わたしの村にやってきたって、皆に言ったそうです」

「すごいじゃないの」

「でも、誰も信じなかったんです。ひいおじいちゃんは、頭がおかしかったんだって、皆言ってます」

かわいいそうに……。頭がおかしくないのに、そう言われるのは少し嫌だな…。

「どうして？」

「誰かが言っただんです。じゃあその『竜の羽衣』で飛んでみると、でもひいおじいちゃん、飛べなくて。なんかいろいろ言い訳したらしいですけど、皆が信じるわけなくて。

おまけに『もう飛べない』と言って私の村に住み着いちゃって。一生懸命働いてお金を作って、そのお金で貴族にお願いして、『竜の羽衣』に『固定化』の呪文までかけてもらって、

大事に大事にしてました」

「変わり者だったのね。さぞかし家族は苦労したでしょうね」

「いや、『竜の羽衣』の件以外では、働き者のいい人だったんで、皆に好かれたそうです」

「まあとりあえず見に行ったら、なにかわかるだろう」

「そうですね。もうすぐタルブでしょうし、ヨシエナヴェもご馳走しますね」

「そりゃあ楽しみだ」

一行を乗せて、風竜は一路タルブの村へと羽ばたいた。

[illegible]

現在だがいま、俺の目の前には『竜の羽衣』がある。

ここはシエスタの故郷であるタルブ村、その近くに立てられた寺院である。

そこに『竜の羽衣』は安置されてあつた。曾祖父が立てたと言う寺院の形は、

俺にとって懐かしいさを覚えさせた。『竜の羽衣』は固定化のおかげか、

錆びがどこにも浮いてない。作られたそのままの姿を『竜の羽衣』

は見せていた。

キュルケやギーシュ、ルイズは気のなさそうにその『竜の羽衣』を見つめている。

好奇心を刺激されたのか、珍しくタバサは目を輝かせてそれをみている。

そんな俺は『竜の羽衣』の周りを歩きながら、全体を見ている。

シエスタはそんな俺を見て、心配そうに言ってきた。

「ジユンヤさん、どうしたんですか？わたし、何かまずいものを見せてしまったんじゃない……」

「いや、なんでもないさ……」

俺はそれに、ガンダールブを発動させながら触れる。

すると『竜の羽衣』の操作方法、現在の状態、何があって何がないのか、いろんな事が

頭のなかに流れ込んできた。これでこれの操作は大丈夫。問題はこれの運搬方法……。

原作どおりギーシュの家に頼んで、運んでもらうのもいいが、あまり力を作りたくはない。

別に一時的に能力を発動して、ガソリンを地球から転移させればいいので、心配はない。

それが残っているガソリンを何かの能力で増殖させるか……、手段は探せばいくらでもある。

「まったく、こんなものが飛ぶわけじゃないの」

キュルケが言った。ギーシュも頷く。

「これはカヌーか何かだ…、ぶげらッ!!!」

ギーシュは俺の拳を頬に受けると、見事にふっ飛んでいく。そして俺は言う。

「キュルケは言ってもいいが、ギーシュ、てめえはダメだ…」

「……………」

どうやら気絶したようだ。ざまあww

面白しろそうだから殴ったけど、反応がないとおもしろくないな。

「ジュンヤさん、ほんとに……、大丈夫？」

シエスタはギーシュを見事にスルーした。

俺はシエスタの肩をつかんで、両目を見つめながら言った。

「シエスタ」

「は、はい？」

シエスタは頬を染めて、俺の目を見つめ返す。

「お前のひいおじいちゃんが残したものは、他にあるか？」

「えっと……、あとはたいしたもの……、お墓と、遺品が少しですけど」

「それを見せてくれ」

シエスタの曾祖父のお墓は、村の共同墓地の一画にあった。
白い石でできた、幅広の墓石の中、一個だけ違う形のお墓があった。
黒い石でつくられたそれは、他の墓石と趣を異にしている。
墓石には、墓碑銘が刻まれている。

「ひいおじいちゃんが、死ぬ前に自分で作った墓石だそうです。
異国の文字で書いてあるので、誰も銘が読めなくて。なんて書
いてあるんでしょうね」

それは俺に読めというフリですか、シエスタさん……。
ええ、お答えしましょう。それが俺の仕事です。

「海軍少尉佐々木武雄、異界二眠ル」

「なにそれこわい」

俺がすらすら読めたのに驚いたのか、シエスタが壊れた。

俺はシエスタを見つめる。シエスタは俺に見つめられ、またまた頬を染めた。

「い、いやですわ……、そんな目でみられたら……」

黒い髪に、黒い瞳……。ええ、日本人ですね。わかります。それにしてもやっぱり日本人最高だな。大和撫子って結構好きなんだよね、俺。

「……はあはあ、感じちゃう、うん……はあはあ／＼／／」

何故か気付くとシエスタが感じ始めていた。
俺の視線だけで感じちゃうとか、シエスタ、最高です……。

「あ……」

俺はシエスタを草むらの中に引き込むと、すこし運動をし始めた。
ヤッている間に、原作であったシエスタの草原での会話は終了させた。

結局俺たちが帰ったのは、やり始めてから二時間後。ルイズに怒られた。

なにか怪しそうなものを見るような目で見てきたので、深いキスをして誤魔化した。

これで許されるとかルイズ、超ちよろいwwまだ手は出しませんと

も…。

その後飯を食った俺達は個別に部屋を用意してもらい、シエスタとその他の村娘、

人妻達と熱い夜を過ごした。シエスタのお母さん？もちろん巨乳なのでおいしく頂きました。

シエスタには姉妹もいるので、そちらもたいへんおいしかったです。まだ貧乳だったが……。

続く

第19話 竜の羽衣！？（後書き）

最近なぜか下ネタ路線に走ってしまうのは、何故なんだろうか……。

まあその方が面白いていうのもあるし、いいと思う。

次回『ゼロ戦とハゲ！？』

お楽しみに！！

第20話 ゼロ戦とハゲ！？

- - - - - side

純耶

大乱交となった夜も更け、次の日の朝。

俺は朝食を食べた後、能力を解放し、ゼロ戦の給油タンクに残っているガソリンを増殖させると、

ゼロ戦を草原へと持ってきて、無事飛行させることに成功した。

その姿を見たタルブ村の住民達は、驚き、そしてシエスタのひいおじいさんの言っていた事に、

嘘がなかった事を知った。まあ普通こんな物が飛ぶとは思わないので、仕様がなないことだと思う。

その後タルブ村の皆とお別れすると、俺達は魔法学院へと帰ることになった。

ゼロ戦にはルイズを乗せ、他はシルフィードに乗って帰った。シエスタはそのまま残って休暇らしい。

キュルケも乗ってたがっていたが、流石にこれ以上は重量オーバーなので諦めてもらった。

しかし代わりにデートの約束を取り付けられたので、逆にルイズが怒り出した。

どうしようもないので、俺は学院目指して飛び続けた。

ミスタ・ツルb…コルベールは、当年とって42歳。トリスティン魔法学院に奉職して二十年。

『炎蛇』の二つ名を持つメイジである。彼の趣味…、というか生きがいは研究と発明。

彼は、俺の乗って現れたものを研究室の窓から見つけて慌てて駆け寄ってきた。

それは、ハゲしk…激しくコルベール知的好奇心を刺激したらしい。

「きみ！こ、これはなんだね？よければ私に説明してくれないかね？」

「だが断る！」

—— orz ↑ コルベール

「嘘ですよ。これはですね——」

俺は適当に知っている事を、説明した。

「——ほう！あれは君の故郷では普通に飛んでるのか！素晴らしい！」

コルベールは、ゼロ戦のあちこちを、興味深そうに見て回った。

「これはもしかして翼かね！羽ばたくようには出来ておらん！さて、この風車はなんだね？」

「プロペラです。コレを回転させて、前に進むんです」

「なるほど！これを回転させて、風の力を発生させるわけか！なるほどよくでk……」

その後色々会話があったのだが、面倒なので省かせてもらう。

結果から言つと俺はコルベールにガソリンを作ってもらつ事を約束し、

名前を教えあうと、コルベールは、さつそく実験を行いはじめた、
って感じだ。

別に俺が作ってもいいが、面倒だし、コルベールにも勉強になると
思つたのでこうした。

その後俺はルイズの部屋へと戻ると、普通にいつも通り過ごした。
別にルイズとケンカしてないし、ちゃんと連れて行つたので原作み
たいにはならない。

というかあそこまでバカなサイトも、普通におかしいと思う。

それより三日後。

俺が広場にてゼロ戦を弄っていると、コルベールがやってきてガソリンが出来たといってきた。

コルベールが飛べないか聞いてきたが、既にガソリンは残っていないし、少量では無理なので、もっと作って欲しいといったら、めっちゃ張り切っていた。

その日の夜。

俺の前には、祈祷書をひろげているルイズがいた。

「じゃあ、とりあえず考えついた詔を読み上げてくれ」

こほんと可愛らしく咳をして、ルイズは自分で考えた詔を詠みはじめた。

「この麗しき日に、始祖の調べの光臨を願いつつ、ルイズ・フランソワズ・

ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。畏れ多くも祝福の詔を詠み

あげる奉る……」

それからルイズは、黙ってしまった。

「続きは？」

「これから、火に対する感謝、水に対する感謝……、順に四大系統に対する感謝の辞を、

詩的な言葉で韻を踏みつつ詠みあげなくちゃいけないんだけど……

……」

「踏みつつ詠みあげてみればいいんじゃないか」

ルイズは拗ねたように唇を尖らせて言った。

「なんも思いつかない。詩的なんていわれても、困っちゃうわ。わたし、詩人なんかじゃないし」

「そうかも知れんが、とにかくなんでも言ってみ」

ルイズは困ったように、頑張って考えたらしい“詩的”な文句を呟いた。

「えっと、炎は熱いので、気をつけること」

「『こと』は詩的じゃねえし、ただの注意だ」

「風が吹いたら、樽屋が儲かる」

「ことわざかよ。逆に、そんな事を知っているお前に驚きだ」

やはり詩の才能がなかったらしい。原作どおりである。

ルイズはふてくされると、ぽてっとベッドに横になって、「今日はもう寝る」と呟いた。

ごそごそとシーツの中で体を隠しながら着替え、ランプの明かりを消すと、ルイズは布団に包まった。

俺はルイズに続いてベッドに入ると、ルイズの横に寝転んで話しかけた。

「そう機嫌悪くすんなよ」

「…悪くないもん（ぷいっ）」

……可愛い。さすがルイズ。ツンデレ最高です。

「まあいいや。とにかく頑張れよ」

「……うん……ありがとう」

ルイズはそう言つと目を瞑り、しばらくすると寢息が聞こえ始めた。

……たぶん、あと数日後には神聖アルビオンから宣戦布告がある筈だ。

ワルドがもし、トップであるクロムウェルを倒しているとすればどうなるかわからんが、もし死んでいたとしても、バックにいるガリアが代わりに何か用意するだろう。

すべて予想でしかないが、多分そうなっていくはずである。原作どおり戦いが始まることになる。

ルイズには色々苦難があるだろうが、俺がそばにいて守るしかない。勿論他の奴らも……。

俺はそう心に誓いつつ、眠りへとついていった……。

終わったと思う読者たち、愚かなり。

現在は翌日の昼前。晴天なり。

ルイズは現在、学院の授業に出ている。

そして俺は修行のために学院の横にある森林に来ている。

俺が剣術の鍛錬をしていると、遠くのほうから人の気配がした。

僅かしか気配がしないので、相当の熟練者が鍛錬を積んだ兵隊であろう。

だがこんな所に兵隊が来るとは思えない。まあ傭兵か、或いは暗殺者。

俺が刀を手に気配のする方を警戒していると、森の茂みから黒い人影が飛び出してきた。

俺は急接近し、人影の首に刀を突きつけ、その姿を見てみると見知ったやつだった。

「……ワルドか」

「はい。任務を遂行しました」

俺は刀を鞘に戻すと、ワルドに尋ねた。

「遂行率は？」

「100%かと……」

よし。これで水の精霊の件は達成できるな。

クロムウェルは死んだし、ウェールズが利用されることもなくなるだろう。

俺はワルドから指輪を預かると、気になる事があり聞いてみた。

「そういえばフーケは如何した？」

「フーケは学院の近くにある村の宿にいます。それが如何しましたか？」

「いや、別にいい」

アルビオンのウエストウッド村に行ったかと思ったが、来てたか……。まあ俺が来いって行っただけだ。でもマチルダって結構、義理堅そうだな。

「さて、次の任務だが……ワルドにはトリステインのタルブ村に行ってもらおう」

「タルブ、村ですか……私はそこで何を？」

「もう直ぐ戦争がある」

「アルビオンですね」

「ああ。予想だがアルビオンはタルブの方面から攻めてくるはずだ。そこでワルドにはタルブに向かってもらい、村の住民を守ってもらいたい。」

特に学院のメイドであり、俺の知り合いであるシエスタを、最優先で守ってくれ」

死ぬとは思わないが、俺の介入によって何か不都合があるかもしれない。

一応誰かに守ってもらいたい。死なれたら困るしな、折角の美少女だし。

「シエスタとはあの黒髪のメイドの事ですか？」

「そうだ」

「フーケはどうします」

マチルダか……どうしようかな？

「一応フーケも連れて行ってくれ。報酬も渡すと言っておいてくれればいい」

「わかりました」

後は何かあったかな？あ、あと1つ……。

「あと他に仲間というか、部下というか、協力者を探しておいてくれ。」

何か技能を持っている奴や、戦闘能力が高かったりと、判断は事前に任す。

判断は任すが、俺を裏切らない奴を選び出せ。もし能力が高く、有能そうな奴がいても、

裏切りそうな奴だったら、俺の所に連れて来い。」

「御意」

「それに合わせ、お前のコードネームと、チーム名を決める」

「その名とは？」

「コードネームは“ライトニング”、チーム名は――…」

…――“不敗の敗者”

「不敗の、敗者？」

「ああ。不敗の敗者、だ。意味は一応あるが、気にすんな」

「わかりました」

不敗の敗者の意味は、何となくだ。
たぶん集まる奴らは社会の“敗者”、これからは“不敗”になるだ
ろうと思い、命名した。
あまり深い意味ではないので、何となく覚えてくれたらいい。

「さて、そろそろ学院に戻るんでな。ワルドも早速出発してくれ」

「では、主もお気をつけて」

ワルドはそう言うと、森の中へと消えていった。

ふう…俺もそろそろ戻らないと、ルイズに怒られるな。

昼の前には一度顔を出すことになってるし。とりあえず行くか…。

俺は学院へと向かい、森を歩き出した。

P S・結局、時間を遅れてしまい、ルイズに怒られてしまった。
怒り方が可愛いので、つつい抱きついてしまった。仕様がな
ことだと思う。

続く

第20話 ゼロ戦とハゲ！？（後書き）

今回は色々と動きました。

次回は神聖アルビオンが動き出すと思います。

次回『第21話 宣戦布告！？』

楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0009p/>

代わりにガンダールヴ!? ~ 使い魔は最強!! ~

2011年6月9日20時20分発行